
ロウきゅうぶ ～不可視の6人目～

Bell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウきゅうぶ 不可視の6人目

【Nコード】

N9119V

【作者名】

Bell

【あらすじ】

小学6年生のオリ主 園田 歩が私立慧心学園に転校してきた。さっそく真帆に目をつけられ女バスにかかわっていく。

そんな感じで始まるロリなのにスポ魂なロウきゅうぶです。

なるべく原作にそって進めていきたいと思っています。（あくまで予定）

01. 転校生の責務（前書き）

はじめまして。

文章は拙いとおもいますが楽しんでもらえたら幸いです。

それでは……どうぞ

01. 転校生の責務

〵 交換日記（SNS） 〵

まほまほ「みーたんがまえにいった、てんこうせいってあしたくんだよね？」

紗季「そうだけど、あんたはちょっとは自重しなさいよね」

湊 智花「あはは。確かに私の時もいっぱい質問してきたもんね」

ひなた「おー？ 新しい人くる？」

あいり「そういえばひなちゃん、その時寝てたから聞いてないかも……」

まだ桜が咲き誇る4月のある水曜日、俺は教室の一番前に立っていた。

「園田 歩です。よろしくお願いします」

転校生として味もそっけもない挨拶をする。

ここでみんなの気を引く一発芸でもあればいいと思うけど生憎俺はそんなレパトリーは持ち合わせていない。

挨拶と一緒にぺこりと頭をさげると隣にいる^{たかむら}篁先生が教室のほうを見て、

「よしっ！じゃあ園田の席は……」

と、俺の座る席を探し始めた。その間、俺も先生に倣いぐると教室を見まわしてみると一番窓際の席に座っているツインテールの女の子がランランとした目で俺の方を見ているのに気付いた。

（なんやろ？やたらと見られとる？…）

そう思っていると、俺と目が合ったのに気付いたのかそのツインテールの女の子が手を挙げていきなり元気な声でしゃべりだした。

「はい。みーたん、私の隣が空いてまーす」

「そうだなー。じゃあ真帆のところでいいか。園田、お前の席はと

りあえずあそこだ」

そう言われて鞆を持って席に行くと、待ってましたとばかりに真帆と呼ばれたツインテールの女の子がバンバンと音が出そうなほど、自分の隣の空いてる席をたたいてここに座れとアピールしてきた。ちなみに、この私立慧心学園は小学校から大学まであり、俺が通うことになったここも「初等部」と呼ばれている。

これだけでもこの学園の規模が大きいことがわかってもらえるだろうか。

もちろん教室も普通の小学校と違い、机が三人一席になっていながら大学の講義室みたいになっていたりする。

今、ツインテールの女の子が叩いているのはちょうど三人席の真ん中で、それを挟んで通路側の席に座っている眼鏡をかけた真面目そうな女の子に、

「もうー紗季は気が利かないなー。それじゃあ、あゆむんがここに座れないじゃん」

「あんたに言われなくてもわかってるわよ」

(あゆむん?)

内心首をかしげていると紗季と呼ばれた女の子が席を立ち、道を譲ってくれた。

「ありがとう」

(でも、いきなり女の子の間に座るのはなんか緊張するな)

そんなことを思いながらも道を譲ってくれたことにお礼を言って席につく。

「ねえねえ、あゆむんはどうして転校してきたの？ 前の学校はどんなところだった？ 好きなことは？ あとねっあとねっ……」

「もう真帆っ、少し落ち着きなさい。ごめんなさい園田君、私は永塚紗季っていいいます。そして、こっちのうるさいのが三沢真帆ですよろしく」

三沢さんのマシンガントークに戸惑っていると、席に座りなおした永塚さんが自己紹介をするのと一緒に三沢さんを止めてくれた。

「こらー真帆、いろいろ聞きたいのはわかるけど紗季の言うとおり少し落ち着け。休み時間にでもたっぷり聞けばいいだろ。じゃあ授業は始めるぞー」

箕先生にも注意をされてしまい、不満そうにしながらもそれならそれでと思ったのか、にかっと笑い、

「じゃあ休み時間に」

そう言って、授業を受けるように三沢さんは体を前に向けた。

（授業が始まってよかったー。でも休み時間になったらさっきの勢いで質問攻めにされるのかな？　それはちょっと勘弁してほしいわ。やっぱり転校生ってめずらしいんやろうな。それでもちよっとテンション高すぎる気するけど……）

そんなことを思い、こんなことになると思った日のことを思い出した。

約1カ月前のこと。家族で夕食を食べている時、

「歩、父さんな来月から転勤にすることになった。だから、引越しするから準備しとけよ」

「は？」

今日のハンバーグはおいしいなー。なんて思っていたら唐突に父さんからびっくりな報告を聞かされてしまった。

俺はマジで？　と父さんの隣に座る母さんを見ると、

「そんなマジで？って思ってるような顔しないの」

ばっちり顔に出ていたらしい。

「今度はどこなん？」

父さんはいわゆる転勤族で、引っ越しもこれまでで1度や2度ではないので俺はすでに諦めた感じで質問してみた。

「今度はちょっと遠いところだな。けど、大きな学校が近くにあって歩はそこに通うことになるな。なんとその男バスは地区大会で優勝したらしいから歩が好きなバスケもできるぞ」

「ふーん」

「なんか気のない返事ね？やっぱり引越しいや？」

「そんなことない。大きな学校は見てみたいし、強い男バスにも興味あるし」

「そう、それならよかった」

そう言って母さんにはっこりと笑い、ご飯を食べ始めた。

「じゃあそういうことだから、しっかりと準備しとくんだぞ」

と、父さんが締めくくった後はたわいないことを話して夕食は進んでいった。

夕食もすんで、お風呂に入りながら

「地区大会優勝校かー。確かにバスケットは好きだけどあんまりうまくないしなー。練習きついかなー？」

そんなことを考えて、これからの引越しの準備にむけて気が重くなるのを感じつつ1日が終わりを告げた。

それからの1カ月は、引越しの準備やら友達との別れなんかでバタバタしていて、あっという間に過ぎていった。

そして、今日初めて学校にきて職員室で担任の笹先生を紹介され、教室まで案内してもらって今に至るというわけやけど……

ちなみに笹先生を初めて見たとき、俺とあまりかわらない150cmくらいの身長とその童顔のせいで先生に見えなかったのは秘密にしといたほうがいいんやろうな。

キンコンカーンコン

「はい、じゃあ授業はおしまい。もう待ちきれないって感じだけど、ほどほどにしといてやれよ」

そんなセリフを残しつつ教室を出ていく篁先生を見て、いよいよかと覚悟を決めていると隣の三沢さんはもちろんだけど教室のあちこちから人が集まってきて囲まれてしまった。

「どうして転校してきたんだ？」

「父さんの仕事都合で」

「どこに住んでるの？」

「^{まつづみ}松角^{まつづみ}っていう駅の近く。ここから30分くらい自転車で行ったところ」

「好きなことは？」

「うーん、バスケかな」

「「バスケっ!!」」

囲まれてからいろいろなことを質問され答えていたらバスケと答えた瞬間、隣の三沢さんとちょうど前にいたツンツン頭の男子がそろって大きな声をあげたのでびっくりしてしまった。

「あゆむん、バスケできるの？ うまい？」

「まあ、前の学校ではバスケ部だったけど自分で言うのもなんだけどそんなにうまくはないよ。むしろ、後輩とかの指導なんかの方が多かった感じ。それより、さっきも言ってたけどあゆむんって俺のこと……だよな？」

「そつ、歩だからあゆむん。へん？」

いきなりあだ名で呼ばれたのに驚いて聞いてみると、あっけらかんとして逆に聞かれてしまった。

「お前、バスケするの？ なら、うちの男バスに入らないか？ あつ、俺は竹中夏陽^{なつひ}って言って男バスのキャプテンをやってるんだ」

「もう、私がしゃべってたんだから夏陽はあとにしるよ」

「うっさい真帆。で、どうだ？ 男バスに入ってみないか？」

「そうだなー、1回部活を見に行ってから考えるよ」

と、そんな話をしていたら休み時間の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

次の授業の先生が入ってきたので質問タイムはお開きになり、みんな自分の席に戻っていった。

そうして午前の授業が終わり、昼休みになったが俺はまだ席を動けずにいた。

その訳はというと、母さんお手製のお弁当を持って席を立とうとしたら三沢さんにひきとめられたからだったりする。
曰く、

「まだまだ聞きたいことがたくさんあるから逃がさん!!」

とのことである。

休み時間の度に質問タイムは開催されていたので、もう大丈夫だと思っていたら甘かったらしい。

「じゃあみんなでごはんにしよ!!」

そう言って後ろの席に振り返り、そこにお弁当を準備し始めている三沢さんをしり目に隣の永塚さんを見ると、「あきらめて」とアイコンタクトを送られ後ろの席にお弁当の準備を شدした。

仕方なしに俺もお弁当の準備をしようと振り返ると、当然後ろの席にいる人と目が合った。

「ども、お邪魔します」

挨拶をしつつ後ろの席の人を見ると、なんとも奇妙な組み合わせだった。

向かって右、つまり三沢さんの後ろの席には、やたらと背の高い女の子がなぜかおどおどしながらこちらを見ていて、正面の子は反対にすごく小さく、にこにこしてあまつさえ手を振っている。

最後に左の子は髪を肩くらいまで伸ばして礼儀正しいような感じでこっちがお弁当の準備を終えるのを待っていた。

「園田歩です。よろしく」

「おー、ひなは袴田ひなた。よろしくー」

「湊智花です。こちらこそよろしく」

「え、えと。香椎 あ、愛莉です。よろしく」

俺が挨拶をすると、それぞれ自己紹介をしてくれた。

正面の背の小さい子が袴田さん、背の高い子が香椎さん、そして礼儀正しい子が湊さんらしい。

しかしこうして考えてみると、転校初日から女子に囲まれてお昼を食べるなんてなんか変な感じだ。

今までは男子としか食べたことがないだけに緊張するな。

「ふふ、そんなに硬くならなくても大丈夫ですよ。真帆が無理やり誘ったようなもんなんですから」

永塚さんがフォローしてくれたことに感謝して、みんなでお弁当を食べ始める。

食べている最中も三沢さんからの質問は留まるところを知らず、永塚さんに注意されたりしながら楽しくお昼は進んでいった。

「そういえば、あゆむんはバスケット部だったんだよね！ 私たちも女バスなんだよ」

「私たち？」

「おー、ひな達みんなバスケット部」

三沢さんが私たちと複数形にしたのを不思議に思ったら袴田さんが答えてくれた。

「と、言っても女バスはこの5人しかないんですけどね」

「えっ、五人しかないの？」

思わずオウム返しに湊さんに聞き返してしまったが、前の学校では30人くらいの部員がいたし、バスケットは結構人気のあるスポーツだからびっくりしたとしても許してほしいところだ。

「女バスはみんなが私のために創ってくれた部活なんです。だから、まだ部員はこの5人だけだし顧問も美星先生なんです」

「別にもっかんのためだけってわけじゃないよ。私がバスケットをやってみたかったから女バスを創ろうとしたんだし」

「そうよ。だからトモがそんなに気に病むことはないわよ」

「へえ、だからみんなはすごく仲がよさそうなんだね」

言ってから、はっとしてみんなの顔を見てみると、はにかむような感じの表情になっていた。

そんな風に反応されるとは思わず、すごく恥ずかしいことを言った気がして俺は頬が赤くなってしまふのを抑えられなかった。

そうして楽しい昼休みが終わり、さすがに三沢さんの質問タイムもお開きになり午後の授業も何事もなく進んでいった。

そして放課後になり竹中君に言った通り、男バスの部活を見学しようとして体育館に向かうのだが、これがこの後の学園生活をがらりと変えてしまう出来事に巻き込まれてしまうことをこのときの俺は露にも思っていなかった。

01. 転校生の責務（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字や感想などあればぜひ書いてください。

02. コーチ就任（前書き）

第2話の更新です。

ちよつと話が強引かなと思いますけど、それは勘弁してください。
それでは……どうぞ。

02. コーチ就任

〃 ガールズトーク 〃

まほまほ「しかし、みーたんがほうかごにたいいくかんにしゅうごうってなんだろう？」

あいり「部活を見に来るのも少ないのにめずらしいよね」

紗季「いつもみたいになんか思いついたんじゃないかしら」

湊 智花「楽しいことならいいけど美星先生って、ときどき変なことをしようとするからちょっと心配だね」

ひなた「ひな、楽しいこと賛成」

紗季「まあとりあえず行ってみましょ」

「ちわーす」

「「「「えええ!!」「」「」」」」

放課後になり男バスの練習を見学しにきた俺が見たものは、篁先生の前で驚きの表情を隠せない女バスのメンバーだった。

いきなりのことで、呆然としてしまい入口に立ったまま話盗み聞きする形になってしまった。

「男バスと試合ってどういうことですか？」

「負けたら廃部ってひどくない？」

「2週間後なんて急過ぎます」

不本意なことを告げたであろう篁先生に詰め寄る五人。告げた本人も苦虫を噛んだような顔をしている。

「確かに勝手に試合を受けてきたことは謝る。ごめん。でも、そうでもしなきゃ問答無用で廃部にされてた。これでも譲歩したほうなんだよ。それにあんた達なら何とかなるって思ったからOKしたんだ」

こんな風に信頼を寄せられたら、これ以上食い下がるのは篁先生にも失礼になってしまう。

そして、今日1日一緒にいただけでもわかってしまうほど、こんな

展開で燃えないわけがない人が1人いる。

「よし！ やったろーじゃんっ！ 夏陽達なんて楽勝だよ」

案の定、三沢さんが一番早くやる気をみせた。

「そうね、もうやるしかないみたいだし廃部になんてさせないんだから」

「うん。廃部になんてさせない。私が何とかしてみせる」

「おー。ひなもがんばる」

「わ、私もがんばる」

三沢さんに続き、他の4人も決意を固めたようだ。
そんな中、箕先生が湊さんをみんなから少し離れたところに連れていくのが見えた。

「で、ああ言ったけどぶっちゃけ勝てそう？」

「えーと、正直今のままだと厳しいと思います。さすがに私ひとりでなんとかなるほど男バスも弱くはないですし。せめて、試合までの2週間のみんなの指導と当日の作戦を考えてくれる人がいてくれたらと思います」

「そっかあ……なら、ちょうどいいしあいつを使うか。それで、さしあたっては」

二人の会話は離れていたもので聞こえなかったが、話終わったらしい
篁先生がおもむろに俺の方を見た。

悪戯を思いついた子供のような笑顔をしている篁先生を見て、俺は
今まで話を聞いていてすぐ帰らなかったことを後悔した。

「にゅふ、おーい。話聞いてただろう、ちょっとこっちおいで 園
田？」

ぱっと女バスのみんなが一齐に入口に突っ立っている俺の方を見た。

（おいおい、俺が居ることに今気付いたんかよ）

「ちなみに拒否権は？」

「ない」

あの顔は絶対によくないことになると思って質問してみたらノータ
イムで答えが返ってきた。

逆らうのは諦めて篁先生のところへ行く時に、ため息がでてしまっ
たのは仕方ないと思う。

「どこまで聞いてた？」

「2週間後に男バスと試合して、負ければ女バスは廃部になるってことはわかりました」

「それだけ理解してたら十分だな」

どこか楽しそうにしている笹先生から、放課後の体育館での練習は、女バスが月・水・金、男バスが火・木・土と交互に使っていること。今回、男バス側が女バスの練習は遊びだという理由で体育館の使用を譲るように言ってきたこと。などの説明を受けた。

「という訳で、バスケ経験者の園田には女バスのコーチをしてもらいたいんだ」

「いやいや、俺なんかじゃとても荷が重いですよ」

「別に1人でやれとは言わないさ。私の方でも1人心当たりがあるからそいつと2人でやってくれたらいいよ」

「いや、でも……みんなも転校してきたばかりで見ず知らずのやつなんかにコーチされるなんていやなんじゃ？」

なんとかコーチをやらせようとする笹先生を説得するのは難しいの

で、女バスのみんなは嫌がるだろうと思い聞いてみた。

「バスケ教えてくれるっていうなら大歓迎だよ」

「休み時間の時、後輩の指導とかもしてたって言ってたからいいんじゃない？」

なんと三沢さんと永塚さんが肯定派についてしまった。

「でも、女子5人の中に男子が1人っておかしくない？」

なおも食い下がる俺。

「わ、私はちょっと苦手だけど頑張ってみる」

「バスケ経験者がいてくれた方が心強いから私も賛成です」

香椎さん、湊さんもまさかの賛成派らしい。

そうなれば、せめて1人くらいはと最後の袴田さんを見ると、

「あゆむーはひな達にバスケ教えるのいや？」

ピシャーン!!

(何これ、かわいすぎるやん!!こんな断ったら男ちゃうで)

「いや、是非ともやらせていただきます。むしろやらせてください」

首を傾げながら涙目で言ってくる袴田さんを見た瞬間、体中に電撃が走った。

袴田さんに悲しい顔なんてさせてはダメだ。

こんな顔をさせてしまっているのはこの俺か？
ならどうすればいい？

動揺してしまい、つい反射で承諾の答えをしてしまった。

「にゅふふ、確かに聞いたからな。じゃあ頼んだよ」

「はっ!! いやそれは卑怯じゃ……」

なんとか正気に戻ったはいいけど、時すでに遅し、で言質をとった
篁先生はいたずらっ子の笑顔全開になっていた。

「あゆむんも早速ヒナの無垢なる魔性の餌食か」
イノセントチャーム

「無垢なる魔性？」

「ひなの二つ名なんです」

二つ名なんてあるのか、と思うけど今はそんなことを考えてる場合ではない。

「まあ来週には私の方の助っ人を連れてくるから一緒にやったらいいじゃん」

「そんな簡単に……」

もう九分九厘諦めていたが最後にみんなの顔を見してみた。
……そんな期待に満ちたキラキラした目は反則だよ。

「はぁ……わかりました。コーチやります」

「よっしゃー!!」

今度はしっかりと自分の意思で（なかば諦めでも）賛成の意思表示

をした。

三沢さんが嬉しそうにガッツポーズをとって、俺の両手を握り

「男バスに勝つためにビシバシよろしくな、あゆむん!!」

「あ、ああ。こちらこそよろしく、三沢さん」

俺がそう返すと嬉しそうな顔だったのが一転して不機嫌顔になった。

「もー『三沢さん』なんて堅苦しいから駄目。呼ぶなら『真帆』にして。それか『まほまほ』。それにあゆむーは微妙に敬語になるときがあるからそれも禁止だかんね」

「ちゃん付けは？」

「ダメ」

「わ、わかったよ、真帆」

俺がちよっと戸惑いながらも返事をすればまた笑顔に戻ってくれた。

「じゃあ私も『紗季』でいいわよ」

「私も『智花』でいいですよ」

「おー。ならひなも『ひなた』いーよ」

「わ、わたしも『愛莉』で大丈夫です。」

そうやって、みんなからも名前で呼んでいいと言ってもらえた。

「じゃあ俺のことも『歩』でいいよ。それと、と、智花と愛莉も俺に対して敬語なんか使わなくていいよ」

そのお返しとして俺も名前で呼んでほしいことを伝える。

やっぱり名前で呼び合うのは友達の第1歩だからな。

けど、女子を呼び捨てにするのに慣れるのはちよつと時間がかかりそうだな。

「ところで、笹先生の心当たりっていうのはどんな人なんですか？」

これから俺と一緒に苦労を分かち合う人のことにも興味があったので聞いてみる。

「えーと、私の甥で今は高1。中学時代は弱小校だったのを県準優勝にまで持って行った司令塔。それで、いつもバスケのことだけ考えてるバスケバカってところかな」

「すごい人じゃないですか。そんな人がくるなら俺はいらないんじ

や？」

ちゃんとした人がくるなら素人の俺では逆に足を引っ張ってしまうんじゃないかと不安だ。

「そんなことないさ。そいつはどんなにすぐくても高1だしね。みんなの練習をみれるのは練習日の時くらいだろうから、練習が休みの日なんかのフォローは園田にしかできないことだよ」

視線を俺に合わせ、俺の両肩に手を置いて授業中ですら見ていないような真剣な顔で言われ、こんな顔もする人なんだと感心してしまった。

「で、あゆむん。今日はどうしょ？」

真帆にそう言われて時計を探せば、もう少して5時になるところだった。

「みんなも登下校はスクールバス？」

慧心学園の生徒は、ほとんどが登下校にスクールバスを利用している。

みんなもそれは同じらしく、俺も自転車でも大丈夫な距離だけどス

クールバスを使うつもりでいる。

それを考えると6時半くらいには片付けないとまずいので、あと1時間半くらい練習できることになる。

「じゃあとりあえずみんなの実力を見てみたいから、俺もいれて3on3をやってみよう」

「ねえ、3on3ってなに？」

紗季が質問してきたのでみんなの顔も見ると、どうやらやる気になっている智花以外全員全滅らしい。

「バスケ経験者は智花だけ？」

「そうだよ。しかも、もっかんはすげーうまいんだよ。夏陽なんて目じゃないくらい」

「もう真帆、そんなことないよ」

夏陽っていうとたぶん竹中君のことだから智花は男バスのキャプテンよりもうまいのか。

それは頼もしいと思う反面、他の4人が素人なのに大丈夫だろうかと不安もある。

まあその辺りはこの後の3on3で見てみたらいいか。

「3on3は3対3に分かれてハーフコートでやる試合みたいなもののことをいうんだ。という訳でそれをやりたいからみんな着替えてきてよ」

「了解」

「わかったわ」

「うん」

「おー」

「う、うん」

各々返事をしてみんな体育倉庫の方へ向かっていく。どうやらそこを更衣室として使ってるらしい。

「さて、じゃあ俺も着替えてこようかな」

この後の3on3に期待半分、不安半分に思いを馳せていると1つ重大な問題があることに気付いた。

「俺、どこで着替えたらいいんや？」

02. コーチ就任（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ここおかしいんじゃない？みたいな指摘があれば遠慮なく感想で書いてもらえるとうれしいです。

03. 3on3 (前書き)

ついにバスケット描写ありの話です。

私自身がバスケット素人なので不自然な描写は寛大な心で見てください。
それでは……どうぞ。

03. 3on3

〃 ガールズトーク 〃

湊 智花「いちじはどうなるかと思ったけど歩君がコーチ引き受けてくれてよかったね」

まほまほ「まあもっかんとわたしがいれば、なつひたちなんてらしくうだった」

紗季 「トモはともかくあんただって素人でしょ」

まほまほ「そんなことないって。さいしょのときだって、わたしがシュートきめたからわたしのチームがかったんだし」

あいり 「あはは、そういえばそんなこともあったね」

まほまほ「そういえば、じゃないって。もっかんはおぼえてるよね？」

湊 智花「うん、ちゃんと覚えてるよ。そのあと言ってくれたことも全部」

紗季 「ひな、やけに静かだけどどうかした？」

ひなた 「服が脱げないー助けてー」

しばらくして体操服に着替えたみんながでてきた。

ちなみに俺は着替えに使えるような場所が見つからなかったのでトイレで着替える羽目になった。

「あれ？ 紗季、アイガードなんてもってるんや？」

「？ ええ、バスケするときはこれを使ってるの。それより……」

「ねえ！！ あゆむん、さっき関西弁じゃなかった？」

なぜか興味津々の真帆に気おされてしまう。

「そっか、さっきからなにか違和感があると思ってたけどそれが理由なんだね」

「おー。なんでやねん？」

俺は関西が長かったから、敬語の時は普通だけど地は関西弁なんだと説明した。

「そろそろさっき言うた3on3をやろう。チームは、俺と紗季とひなたでチーム、智花・真帆・愛莉でチームに分かれよう」

「よっしゃー、もっかん、アイリーンいっちゃやれるところをみせるぞー」

ほんとに真帆は元気な子だな。

「みんなルールはどれくらい知ってるん？」

「ダブルドリブルやトラベリングとかの初歩的なのなら知ってるわよ」

紗季が答えてくれ、智花を除く3人も同じ程度らしいのでとりあえずは問題ないな。

「3on3では相手からボールを取ったら一旦ハーフラインまで戻ってから攻撃やからな。じゃあ、そっちの攻撃からはじめよっか」

智花にボールを渡し、ディフェンスにつく。

「紗季は真帆、ひなたは愛莉を担当してくれ、俺は智花を相手するから」

「了解」

「おー、わかった」

それぞれのマッチアップの相手を決め、配置につく。
そしていよいよ3on3が始まった。

「真帆っ」

ハーフラインに立っている智花とボールの受け渡しを行うと、智花は少しドリブルをして真帆にパスをだした。

「まかしとけ」

「いかせないわよ」

真帆にパスが渡ると予定通り紗季がマッチアップにつく。

フリースローラインより若干外の位置でパスを受けたので、紗季を抜くべくドリブルをする。

まあそこは素人らしい感じの、べったんべったんとしたドリブルなのは予想通りだ。

紗季も懸命にディフェンスをしてコートの手元に追い詰めていく。

「くそー、アイリーン」

追い詰められた真帆はコートの方側にいる愛莉にパスをだす。

「あう」

苦し紛れのパスは愛莉には強すぎたらしく、パスをうまく受け取れなかった。

パスミスの原因はパスの強さだけじゃなく、愛莉がびっくりしすぎていたこともありそうだ。

ルーズボールはひなたがとったので、今度はこっちのオフェンスに交代だ。

「じゃあ今度はこっちの番や」

さっきとは逆になって、智花とボールの受け渡しをやってオフェンスをスタートさせる。

みんなの実力を見るのが目的なので、まずは紗季にパスを試してみる。

「まかして」

無事パスを受け取り、ちょうどゴール下にいるひなたに向けてすぐパスを出す。

ワンバウンドさせ受け取りやすくしてくれたパスを体全体で受けたひなたは、愛莉が少し離れていたので両手で押し出すようにシュートを放つ。

2、3度リングに当たって危なっかしくもネットを揺らすことができた。

「ナイツシュー」

「おー。やったー」

無事シュートを決めたひなたと紗季がハイタッチを交わす。

「くそー、今度はこっちの番だね？ 最終兵器もつかん、やっておしまい」

「もう真帆ってば」

最終兵器と呼ばれて照れている智花。

とうにか始まって数分で最終兵器が投入されるってどうなんだろう？
けど、そっちがその気なら……

「智花、竹中君よりうまいって言う実力を見せてーや」

「う、うん」

ハーフラインに立った智花にそう告げる。

さて、そう言ったものの正直止められるかは不安なところだ。

智花とボールを受け渡しをして気を引き締める。

今度はドリブルで抜こうという気満々な感じで対峙するので、抜かせまいとしっかりと腰を落としてそなえる。

しばらく、ダンっダンっ様子を見る感じでドリブルをしてキツと表情を変える智花。

「行きます」

そう宣言して閃光のようなスピードでドライブを仕掛けてくる。

「くっ」

間一髪で止めることに成功したが、内心冷や汗をかいて余裕なんて吹き飛んでしまった。

すぐさま体勢を立て直そうとする智花に、そのスキをつこうとステールを仕掛ける。

なんなくかわされ、逆にこちらの体勢が崩れたのを好機に抜きにかかってくる。

なんとか体勢が崩れるのをふんばり、フリースローラインに沿って智花と並走する形になった。

けどラインの半分くらいところで智花が急制動をかける。完全に虚をつかれ止まるのが若干遅れた。

「なっ」

智花にはそのちょっとした遅れも致命的で、すぐシュートモーションに入ってしまう。

そして俺はディフェンスをするのも忘れ、視線を釘付けにされてしまった。

あの急制動の後だというのに一切崩れていないフォーム。

まるで教科書のお手本のような流れるモーション。

時間がゆっくり流れているように感じるほど智花のシュートは綺麗だった。

「よしっ！」

智花の放ったシュートはシュツと音を立ててネットを揺らした。

「ナイス、もっかん」

「す、すごいね、智花ちゃん」

真帆たちに褒められて照れている智花に1つ質問してみる。

「智花ってどっかの有名チームのエースやったりしん？」

「そ、そんなことないよー」

思わずそんなことを聞いてみたくなるほど智花のシュートは綺麗だったし、その前のドリブルもすごかったと思う。

なるほど、これなら真帆が智花の実力が竹中君より上だっていうのも頷ける。

それほど智花の実力は小学生の域を抜きんでている。

竹中君の実力は知らないけど智花より上だというなら相当な強者つわものになっってしまう。

けどバスケットは5人でやるスポーツだ。

たとえば智花1人がズバ抜けて強くてもイコールチームが強いとは限らない。

でも頼りになるエースがいるというのは、すごく心強いことであるのは変わらないので嬉しいことだ。

「じゃあ今度はこっちの番やな」

智花にボールを渡してもらい、ハーフラインに立つ。

智花の実力を見せ付けられて黙っていられるほど俺は人ができていない。

むしろワクワクしてしまって、みんなの実力を測るという本来の目的を頭の片隅に追いやってしまったている。

実力的には智花より数段劣る（自己評価）けど、とっておきを見せれば多少は驚いてくれるだろう。

「さて、行くで」

本日4度目となる受け渡しを行い、オフENSEを開始する。

俺に智花が見せたほどのドライブで抜き去るなんてことは無理なので、フェイントを混ぜてドリブルでゴールに近づくしかない。けど智花はディフェンスもうまく、俺のフェイントに時折引っかかるけどすぐ体勢を持ち直してプレッシャーをかけてくる。逆にこっちが体勢を崩せば、即座にスティールを狙ってくるので1秒たりとも気を抜けない。

(くそー、ディフェンスもめっちゃうまいな。せやけどもうチヨイ、ゴールに近づければ……)

このままではジリ貧なのは確実なので勝負にすることを決める。まず、ボールと智花の間に自分の体を置くような感じで、ほぼ真右と言っていいほどの向きでドリブルをする。

これには智花も一瞬驚いていたが、すぐ気持ちを切り替えて追いついてきた。

しかしここで、智花が追いついたのを見計らって仕掛ける。

「えっ」

『とっておき』その1

今まで右に向かってドリブルをしていたのを急に反転させる。

ただそれだけなら智花は余裕で着いてくるだろう。

けどその時、右手でドリブルをしていたのを左手に変え、智花に背を向け続けている格好でドリブルの向きをゴールの方へ90°変える。

智花からは一瞬ボールが見えなくなり、完全に抜き去る形になる。

これが俺の『とっておき』その1の《ドリブルする手を変える》だ。これをやられるとたいていはリズムを崩され隙ができる。

「おいおい」

しかし、智花も一筋縄ではないかない。

完全に抜いたはずなのにゴール下まで行く前に追いつかれてしまった。

俺はフリースローラインより若干内側に入ったところで止められてしまう。

本来ならここでまた智花のチェックをかわすための作戦を考えなければならぬが、俺はかまわずシュートを放つ。

『とっておき』その2

智花のブロックを気にもせず放った俺のシュート。

それを放った俺は、体はゴールの方を向きゴールから遠ざかる方向、つまり後ろに向かってジャンプしている。

これが『とっておき』その2で、俗に言うフェイダウェイシュートのことである。

智花が懸命に手を伸ばしジャンプするが残念ながら（それでもギリギリだった）ボールには届かず、そのままボールはネットを揺らした。

ボールがコートにバウンドしているのを、乱れた呼吸を整えながら見ていた。

周りがやけに静かなのに気付くには呼吸が落ち着くくらいまでか

かった。

そして、ふいに静寂は破られる。

「すげー！ もっかんと互角だー」

「トモを抜いた時は一体なにをしたの？」

「あゆむーなんかすごかったー」

静かだったのが一転、真帆をはじめ紗季とひなたが駆け寄ってきてワイワイガヤガヤと騒ぎはじめる。

「へたなんてうそじゃん。十分うまいじゃん」

「ここで、あれがこうなって……」

褒めちぎってくる真帆とさっきの俺のプレイを思い出そうとしている紗季を見ているのがかなり気恥ずかしくなってきたので、早く次のゲームを始めるべくボールを拾いに行き智花に渡す。

「……もう1回勝負」

ボールを渡すと、そう言って睨みつけるように俺を見てくる。
静かだった智花も、実のところは悔しくて黙ってしまっていただけ

だったらいい。どうやら智花は負けず嫌いみたいだな。
そういう俺は幾分頭も冷え、みんなの実力をみるという目的も思い出したので、今度はちゃんと紗季やひなたにパスをだして智花との勝負を意識しすぎないようにしよう、と自分に言い聞かせる。
決して智花にビビって敵前逃亡しているわけではない。

それから何本か3on3をやって、6時半くらいになったので今日はそれで終了にすることになった。

勝負は真帆たちのチームが勝ったので片づけの間中、真帆はウキウキとしていて、反対に紗季はブスツとしていた。

俺との勝負が1勝1敗で、あとは俺がともに勝負をしなかったの
で智花も不満そうな顔をしている。

勝負をしなかったと言っても智花がオフエンスの時は俺がマークについていたので、そこでの勝負は7対3くらいの割合で智花の勝ちだったの
で、それで満足してほしいところだ。

そうこうしているうちに片づけも終わったので、みんなでスクールバスに乗り家路についた。

03. 3on3(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字や感想等あればぜひ書いてください。

04. 女バスの絆（前書き）

今回は若干ボリュームが多いのでゆっくり読んでください。
それでは……どうぞ

04. 女バスの絆

〳〵 交換日記（SNS） 〳〵

まほまほ「いやーあゆむんってけっこう良かったよね？」

湊 智花「うん。最初のドリブルとかフェイダウェイシュートなんかはすごかったね」

紗季 「へー後ろに飛んで打つのはフェイダウェイシュートっていうんだ」

湊 智花「そうなの。結構難しいんだよ、あれ」

あいり 「そんな難しいシュートができる人が教えてくれたら私もなんとかなるかな？」

まほまほ「だいじょうぶだって。そもそも、なつひたちなんてらしくしょうだし」

紗季 「もうまたあんたは適当なこと言って。でも、みーたんもコーチを連れてくるって言ってたし、2週間がんばって練習して男バスに勝つわよ」

ひな 「おー。ひなもがんばる」

あいり 「わたしもがんばってみる」

まほまほ「こらっさき、かってにしきんなっ」

次の日、登校してきた俺は俺を見つて手招きしている紗季に誘われ、昨日と同じ席に向かった。

真帆だけまだきていないので窓側から席に着く

「おはよう」

俺が挨拶をするとみんな「おはよう」と返してくれた。

「さっそくだけど今日はなにをしようかしら？」

席に着くなり隣の紗季から今日の練習について質問されてしまう。
今日は木曜だから体育館は使えないので昨日の夜に考えていたことを提案してみる。

「具体的な練習はもう1人のコーチの指示でやった方がええと思うから、今週は基本的に体力づくりをした方がいいんじゃないかと思うんやけど、どう？」

最後の方の質問は、この中で唯一のバスケット経験者である智花に向けて聞いたみた。

「それでいいんじゃないかな。じゃあランニングとか？」

「そうやな。この辺でちょうどいいランニングコースってない？」

「うーん、それなら河川敷とかがいいかもね。往復2キロくらいかな」

紗季がそう提案してくれ、距離もちょうどいいくらいなのでとりあえず今日はそこにすることに決めた。

「じゃあ、始めは河川敷までランニングにしようか。で、悪いんやけどそれはみんなだけで行ってきてくれんかな？」

「ぶー、なんであゆむーはこない？」

「俺は今日は男バスの練習を見に行つてこようと思つとるから」

やっぱり敵の実力を知つとかないと作戦もたてれないから、これは

重要なことだ。

そんな感じで練習について話していたら笹先生が入ってきた。

「はい、授業は始めるぞー席につけー」

ダダダダ………バンッ

笹先生が入ってきてからすぐに廊下を走る音が聞こえてきたと思っていたら、教室の後ろのドアが勢いよく開いて肩で息をした真帆が飛び込んできた。

「ハアハア……セーフ？」

「まあギリギリだな」

苦笑いをしている笹先生をしり目に、俺の隣の席についた真帆に後ろに座る愛莉から声がかかった。

「おはよう、真帆ちゃん。今日はずいぶん遅かったね。お寝坊でもした？」

「おはよう。いやーパパの説得に時間かかっちゃって危うく遅刻するところだった」

遅刻の理由（未遂だけど）はどうやら寝坊ではなかったらしい。真帆の性格なら寝坊でも不思議ではない、というか常習犯でもおかしくないような感じだけど、後からみんなに聞けば真帆は無遅刻無欠勤の優良生徒なのだそうだ。

それならそれで元気いっぱい真帆のイメージとぴったりだなと思ってしまう。

「パパの説得って、あんたまさか……」

「そうそう、そのまさか。前から言ってたんだけど、やっと買ってくれるって」

「ほら真帆、静かにしろ。授業始めるぞ」

「はーい。まあくわしくは休み時間にね」

私語を注意されたので、先生に向かって返事をしてみんなに聞こえるような小声でそう言って前を向き、授業の準備を始める。

（なにを買ってもらったか気になるところやけど、まあ次の休み時間に教えてもらえるやろうからいいか）

そんなことを思いながら俺も授業を受けている『フリ』をする。悲しいことに慧心学園の授業は前の学校より進んでいて俺にはさっぱりわからない（あまりわからうともしていない）。

2日目にしてなかば諦めている状態で、テスト前に賢そうな紗季や智花に教えてもらおうと思っている始末である。
なので俺はこの時間を使って、昨日の3on3の時のみんなの印象をまとめる算段をしていた。

真帆

- ・運動神経は良さそう（体力もあり）
- ・ジャンプ力もありシューター向き
- ・単純思考なのがたまにキズ
- ・ムードメーカー的存在

紗季

- ・冷静沈着
- ・洞察力もあり司令塔向き
- ・チームのお姉さんの存在
- ・アイガードがかっこいい

智花

- ・絶対的エース
- ・俺に指導できることなし
- ・やや負けず嫌い

愛莉

- ・極度の怖がり（2週間でなんとかなるか？）
- ・身長が高いから絶対センター

ひなた

- ・おっとりしてて運動は苦手っぽい
- ・シュートはゴールまで届くかもあやしい
- ・体力もなさそう
- ・無垢なる魔性には要注意

昨日の状況を思い出しながらメモをとっていく。

（やっぱり一番のネックは愛莉やな。恐怖症が治ればすごいセンターになるんやけど2週間じゃさすがに無理やろな。さてさてどうしたものかな）

そんなことをつらつらと考えていたら、いつの間にか授業が終わるところだった。

朝のことを早くみんなに話したいらしい真帆が授業が終わるやいなや口を開く。

「ねえねえ聞いてよ。朝のことなんだけど、やっとゴールを買ってもらえることになったんだ」

「やっぱりゴールのことだったのね。真帆パパはいつも甘いんだから」

「そうでもないよ、苦勞したんだからなオールコート買ってもらうの」

「っオールコート!!」

思わず大きな声を出してしまい愛莉を驚かせてしまったとしても仕方ないと思う。

なんせ今、真帆は父親にオールコートを買ってもらったなんて言ったのだから。

ゴール本体ですらなかなか手が出る値段じゃないのにオールコートを作るだけの庭があるなんてどんな家だと思ってしまう。

「真帆ん家^ちってもしかしてすごいお金持ちだったりする?」

「あはは、やっぱり驚くよね。真帆の家はお父さんが資産家でお家もすごく大きいんだよ。プールもあるし家にメイドさんがいるくらいだし」

「マジでっ! メイドまで……」

後ろに座る智花に小声で聞いてみるとまたしても驚きの事実が発覚した。

しかし、真帆がお嬢様だったとは驚きだな。

こんなお転婆なお嬢様がいたんじゃメイドさんもさぞ苦勞してそう

だな。

「なんだよ、あゆむん。そんなにじろじろ見るなよ……」

「あっ、悪い」

お嬢様なんているんだ、と考えていたらつつい真帆のことをじつと見つめる形になってしまった。

「ふふ、真帆。顔が赤いわよ」

「う、うっさい。それよりコートは今週中に使えるようにしてくれるらしいから、来週からは家でも練習できるから」

まだ顔がちょっと赤いけど、それをつつこんだらさらにややこしくなりそうなのでそれには触れないでおこう。

そんなことをしているうちに、次の授業が始まる時間になったので話は終わりになった。

そうして昼休みになり、今日はお弁当を持ってきてないので購買にパンを買いに行くことにした。

「お、あゆむんも購買？　なら一緒に行こ」

「お嬢様なのにパンなん？」

「朝急いでたから忘れてきたのよ、きっと」

「いーじゃん別に。ほら早く行かないといいパン買えないじゃん」

そんなやり取りをして真帆と一緒に購買に行くことになった。

出遅れはしたもののお目当てのパンを買うことができてご満悦な真帆と一緒に教室に帰る途中、昨日のことで気になったことを聞いてみる。

「女バスって真帆が作ったんやんな？　いつくらいに作ったん？」

「んーと、去年の10月くらいかな。なんで？」

ちよっと言いつらいことを聞こうとしていたので、少しの間ためらってしまったけども意を決して聞いてみることにした。

「10月くらいならできてだいたい半年くらいやんな？　それにしてはみんなまだ初心者みたいな感じやったからあんまり真面目に練習してこんかったんやない？」

「最初のころはちゃんと練習してたんだけどやっぱりつまんないじ

やん。だから最近はずっと試合しかしてなかったからなー」

「こんなこと言うのはなんやけど、なら今回のことはそれほど無理して勝たなくてもいいんじゃない？ 遊びでやる感じのバスケットならそれこそ真帆の家でもやれるんやし」

「……………」

真帆が黙ってしまい、ちよつと言いがまずかったかなと思っていて、いきなり真帆が携帯をいじりだした。

「よし。みんなには言ったから中庭に行こつ」

「え、ああ」

いきなり中庭に行こうと言いだした訳もわからず、とりあえず真帆について中庭に行き、空いているベンチに2人で座る。

真帆は何か考えているようで無言で気まずいので、とりあえず買ったパンを食べ始めることにした。

1つ食べ終え、2つ目を食べようとしたところで真帆がいつになく真剣な顔をして話し始めた。

「もっかんって、ここには去年の2学期くらいに転校してきたんだけど初めの頃はなんか暗い雰囲気で、1人であることを望んでる感じだったからみんな近づきにくくてしばらく友達もできなかったんだ。私も初めはあゆむんが来た時みたいにいっぱい質問してたんだ

けど、答えてくれるんだけど返事がそっけなくてだんだん話しかけなくなってたんだ」

「今の智花を見てたらそんな頃があったなんて信じられやんな」

「ほんとにそんな感じだったんだから。みーたんも気を使って、みんなと仲良くさせようといういろいろやっただけどそれでもダメで、ずっともっかんはひとりぼっちだったんだよね」

真帆と智花の間にそんなことがあったなんてな。智花が2学期の途中なんかに転校してきたなら、親の都合じゃないなら前の学校でなかあつたんやろうな。

「それからしばらくして、体育の授業が急にバスケットになったんだ。まあ私はその時バスケットするのに夢中でもっかんのこと見てなかったんだけど、夏陽と一緒にチームになった時に私のシュートミスにつつかかってきやがったんだ。それで私と夏陽でケンカになっちゃって、それがだんだん大きくなって男子対女子でバスケットで勝負することになった。もっかんを女子のチームにみーたんが誘って、なにか言ったら急に目つきが変わってそこからのもっかんはすごかったんだよ！ 夏陽なんて簡単に抜いて、私たちがボール持ったらすぐパスをねだってそのままシュート決めちゃうし、男子のボールも自分でとってシュートしちゃうし、男子が1本シュート決める間に2本3本シュート決めて、めっちゃくちやかつこよかった。そんなもっかんを見て、バスケットスゲーって思って授業終わった後の着替える時からもっかにバスケットについていっぱい話かけるようになったんだ。初めの方は無視されてる感じだったんだけど、次の日も、その次の日も話かけてたら今度はだんだん話すようになってく

れてうれしかったな。それで気付いたらいつも一緒にいるようになって自然に『友達』になってた」

少ししゃべり疲れたらしく真帆が買ってきたオレンジジュースに口をつける。

「友達になって、話してるうちになんでそんなにうまいのかって聞いたら前の学校でバスケットだったことや、けどもうバスケットは辞めたってことを言ったんだよね。それを聞いたら、もっかんはあんなにうまいのにもったいないし、私ももっかんみたいにバスケットしたいって思ってた一緒に女バスを作ろうって言ったみたんだ。もっかんはいいよって言ったんだけど、私はもう作る気満々だったからみーたんに顧問を頼んで、すぐOKをもらって、その時に部員が最低でも5人はいるって言われたから次の日から部員集めを始めたんだ。最初は紗季を誘ったんだけどバスケットなんかに興味ないって感じで断られちゃった。何日か説得したんだけどダメだったから、あのアイガードを作って「これもう作っちゃったから責任とって入部しろ」って言ったら入部してくれたんだよね」

「いやいやそれ、かなり無茶やん。よくそれで紗季は入部したな」

「あのアイガード作るのに結構苦労したんだよね。パパを説得するのは時間がかかったちゃって無理だからお小遣いで買ったり、紗季の眼鏡の度をやんばるに調べてもらったり。きつとそんな苦労に気付いて、私がどれだけ本気なのか知っちゃたから入部したんだと思うよ。だてに幼馴染やってないからね」

やんばるって誰だろう？　　と思いつつも、今は些細なことなので話を先に進めてもらう。

「それで紗季の勧誘に成功したから次は愛莉とひなたの勧誘に？」

「そっ。愛莉はよく泣いてるところを助けたりしてたし、ひなたは4年生の頃に給食を食べてあげたりしてて仲良かったから勧誘は結構すぐ終わったんだ。これで5人そろったから女バスができて、初めての練習の日に試合をしたんだ。そしたらもっかんがすげー楽しそうな笑顔でバスケットしてるんだよね。男子との試合のときはあんなに鬼気迫る勢いだったのに。あとで聞いたたら、もっかんはバスケットになると極度の負けず嫌いになっちゃうらしくてそれが原因で前の学校から変わってきたんだって。けど、私たちとやってる時はそんなことにならないで心から楽しんでバスケットができるって言うてくれたんだ」

なるほど、だからみんなすごく仲良しで信頼し合ってる感じがするんだろうな。

そんな中に俺をいれてくれるのには、すごくうれしいことなのと同じ時にうまく馴染めるかと心配になってしまう。

「だからもっかんにとって、この女バスはきつとすごく大事なところだと思うんだ。確かにバスケットなら、もう私ん家でもできるけどたぶんやらないと思う。だってもし、女バスがなくなってもまだもっかんがバスケットをやりたいって言ったら、私たちはきつと女バスを守れなかったことを悔しく思うし後悔しちゃうと思うんだ。私たちがそんなことを考えるのもっかんもわかってるから、もしこの試合

で負けて女バスがなくなったら、きつともっかんはバスケットを辞めると思うよ。少なくとも私たちの前ではやらないと思う」

そこまで話して、今まで少しうつむきながらしゃべっていた真帆が瞳に涙をにじませながら俺の方を向く。

「だけど、もっかんはバスケットが好きだから、もっとずっとバスケットをやっていたいだろうから、そして私ももっとバスケットがうまくなりたいから絶対試合に勝ちたい！ そのためなんだから、なんだってしたい！ だからあゆむんっ 私たちにバスケットを教えて！！」

正直、俺は悔ってた。真帆たちがこんなに真剣に考えていたなんて思ってもみなかった。

これからは、もっとずっと真剣に真帆たちが勝てるように努力することを心に誓う。

「負けてもいいじゃないか、なんて言っちゃって悪かったな。ごめん。これからは真帆たちの力になれるようにもっと努力するよ」

「謝らなくていいよ。……じゃあこれからビシバシ鍛えてくれよな」

「ああ、まかしとけ」

うるんだ瞳を拭いながらそう言ってくる真帆に俺も精いっぱい誠

意をこめて答える。

それから2人でパンを食べ、教室に戻ると紗季に盛大にからかわれてしまった。

どうやら真帆は、『あゆむんと2人で食べるからみんなはもう食べていいよ』としか伝えてなかったらしくあらぬ疑いをかけられてしまっていた。

顔を真っ赤にして反論している真帆には気の毒だけど、下手にあれば巻き込まれると余計ややこしくなるのは目に見えているので真帆には1人で耐えてもらうしかない。

そうしているうちに昼休みが終わっていったのだった。

04. 女バスの絆（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

女バスの結成について書いてみましたけど、やっぱり原作ほどグツとこないですね。

誤字・脱字等あれば指摘をお願いします。

05. 男バスの理由（前書き）

もう5話なのに昴すらでてきてない……
カメラ速度で進行していきませんがよろしくです。
それでは……どうぞ

05. 男バスの理由

〃 ガールズトーク 〃

紗季 「ふふふふ、いきなり歩と2人でごはん食べるなんてどうしちゃったの」

まほまほ 「べつになにもないって。ただてんきがよかったからそとでたべようってことになっただけだって」

あいり 「ふふ、真帆ちゃん顔真っ赤だよ」

ひなた 「トマトみたーい」

湊 智花 「そんなに照れなくてもいいのに」

まほまほ 「うがー。ほんとになにもないんだってば」

昼の騒動はそのあとの休み時間の度に続いたけど、帰りのHRが終

わるころにやっとな落ち着いた。

ずっと必死に反論していた真帆は、すでに疲れ果てた感じで机に突っ伏している。

この後ランニングに行ってもらうつもりやのに大丈夫なんかな？

「おーい、智花、それに園田。悪いけどこの後職員室に来てくれ」

HRも終わり、帰る支度をしていると笹先生から呼び出しがかかった。

笹先生はそれだけ言うときっさと教室から出て行ってしまったので要件を聞くこともできなかった。

まあ智花と一緒に呼び出されたなら女バス関連だとは思うけど、なにかしたかなと不安にもなってしまう。

「美星先生なんだろう？」

智花も俺と同じく呼び出されることに心当たりがないらしく首をひねっている。

「まあ行けばわかるか。とりあえず、どんだけかかるかわからんから真帆たちは先にランニング行ってきてくれん？」

「オッケー。河川敷まで行ってくればいいんだよね」

「そんでいいよ。ただ、自分がどんだけ走れるか自覚するためにや

ることやから無理なペースで走らなくていいから、そこだけ気を付けてな」

「おー、わかったー。無理しないでがんばる」

「ひなちゃん、それなんか変だよ」

真帆たちに先に行くように伝え、帰り仕度ができたので智花の方を見ると智花も準備が終わったようだった。

「じゃあ行ってくるから無理はせんように気をつけてな」

「またあとでね」

真帆たちと別れ、智花と職員室に向かう。

智花と一緒に職員室に行くと待っていたのは笹先生だけではなかった。

「おーきたか、こっちきて」

呼ばれて行くと会議室みたいなところに連れて行かれ、そこには知らない先生と竹中君がいた。

どうやら試合関連で呼ばれたのは間違いないようだ。

「なんで湊はともかく園田が一緒なんだ？」

こちらの事情を知らない竹中（向こうが呼び捨てだからこっちも呼び捨てに変えてやる）が睨みつけるような眼をして問い詰めてくる。

「園田は女バスの臨時コーチになったんだ。だから今日もきてもらった」

「なっ！ 本当か」

篁先生が説明をしてくれるけども信じられなく驚いた顔でこちらを見ってくる。

「まあ、成り行きだね」

「お前、男子のくせに女子につくのか！」

「確かにコーチになったのは成り行きやったけど、今はもう本気で女バスを勝たしてやりたいって思っとる」

俺が竹中に睨み返すように言うと、隣の智花の顔が驚きに変わり、そしてうれしそうに笑顔になった。

まだ睨んでくる竹中を制したのは意外にも見知らぬ先生だった。

あとで聞いたらこの人は小笠原先生と言って男バスの顧問をしている人らしい。

「まあいいじゃないか竹中。女バスにだってコーチくらい必要だろう。たとえ無駄なことだとしてもな」

言い方にカチンときたけど俺がなにか言うより先に篁先生が口を開く方が早かった。
ちなみに篁先生もこめかみがピクピクつと動いていたけど我慢したらしい。

「小笠原先生、メンツもそろったことですし今度の試合のルールを決めてしましましょう」

「そうですね。さっさと決めてしまいいいでしょうか」

今回、俺と智花が呼ばれた訳はバスケのルールを知らない篁先生の代わりに今度の試合のルールを決めるためだった、というのは後から聞いた話だ。

「まず、こっちは5人しかいないんで交代要員がない訳だから、そっちも交代はなしにしてもらわないと困ります」

「それでは5ファアルで退場になったらどうするのです？」

篁先生が5ファアルの意味がわからないらしいので助け舟を出す。

「退場にしないでフリースローなんかにはいいんじゃないですか？」

「……まあそれでいいでしょう。それではフリースロー2本とそのあとのボール権も移るということにしますか。あとは普通のルールでいいんじゃないですか？」

あと何があるかなと考えていたら智花に服を引っ張られる。

「時間を短くできないかな？ やっぱ長いと実力の差がでてきちゃうから」

「確かにそうやな」

智花は自分では言い出しづらくらく俺に言うように頼んできた。

「試合時間なんですけど前半後半6分の計12分にしてもらえませんか？」

「なっ、それは無茶だろう！」

竹中が反対してくるけど箕先生がささずフォローしてくれる。

「まあ負けるのが怖いなら無理に短くしてくれ、なんていいませんけどね」

「!! ふんっ、いいでしょう。無駄な試合が早く終わるならちようどいいですね」

竹中はまだ何か言いたそうにしていたけども小笠原先生が了承してしまったので何も言えずにいた。

「じゃあ後は普通のルールでいいですね」

小笠原先生がそう言うってくるけども、俺も智花も何も思いつかなかったので黙って頷く。

俺達2人が頷いたので篁先生がこれで終わりとはばかりに席を立った。それに続いて俺と智花も会議室を出ていくと、篁先生がついてこいと手振りで示したので一緒に職員室を出る。

近くにある自販機まで行き、ジュースを奢ってもらい一息つくことになった。

「ふー、助かったよ2人とも。なんせルールなんてさっぱりだから私だけじゃ危なかったよ」

「なら先に言っておいてくれればもうちょっといろいろ考えておけたのに」

文句を言う俺に「ごめん。ごめん」と全然反省してない感じで謝ってくる。

「いやーなんせカマキリの野郎、いきなり今度の試合のルールを決めようなんて言い出すからさー」

「カマキリ？」

「竹中君と一緒にいた先生のことだよ。小笠原先生って言って男バスの顧問をしてる人」

確かにカマキリっぽい顔だったな、なんて思いだしていると、いちいち棘のあるしゃべり方も思い出してしまいイラっとする。

「篁先生、俺はこれから男バスの練習を見てこようかと思うんですけど、試合のビデオとか持ってないですか？」

「んー、持ってないな。まあ後でちょっと探してみるよ」

そうしてしばらく休憩した後、篁先生は職員室に戻って行ったので俺は体育館に、智花はみんなに合流するために2人で昇降口に向かう。

「もしかして、昼休みに真帆と女バスができるまでの話をしたんじ

やない？」

「な、なんでそれを」

昼休みに話した内容は、真帆があれだけ紗季達に聞かれても言わなかったから知らないはずなのに。

「さつき竹中君に言い返した時の態度で気付いちやった。あー知っちゃったんだって、そのうえで勝たしてやりたいって思ってくれたんだって」

「態度だけで？ そんなにわかりやすいかなー俺？」

「本気なんだっていうのはわかったよ。昨日転校してきたばかりなのに、そこまで私たちのこと考えてくれる理由なんてそれしか思いつかないよ。それで真帆はどんなことを話したの？」

ここまでバレたら仕方ないので真帆に聞いたことをかいつまんで説明することにした。

「そっかーやっぱりみんなにはバレちゃってるんだ」

「バスケットが好きすぎておかしくなっちゃうこと？」

「それもだけど、この試合で負けたらバスケットを辞めようって思ってること」

やっぱりか。

昼休みの真帆の話で薄々はそうなのかもと思っていただけ、本人から聞くと重さが違う。

「確かにバスケは性格が変わっちゃうくらい好きだけどそれ以上に好きなものができたから、もし負けても笑顔で『次はなにしようか？』って聞いてみせるんだ」

「そんなことにはさせない。俺にできることは全部して女バスを勝たせる。真帆とも約束したしな」

「ありがとう。頼もしいね」

そうこうしているうちに昇降口についたので体育館に向かうために智花と別れた。

体育館に着くと目当ての男バスはちょうど練習を始めるところらしかった。

俺は体育館の隅に座り、敵情視察を始める。

基本的なドリブルの練習から始まり、パスの練習、シュートの練習と順番にこなしていった。

「やっぱり全体的にうまいな。さすが地区大会優勝校やな」

実力の高さに感心すると同時に、女バスとの差を改めて認識し顔が引きつってしまった。

そうしているとレイアップのシュート練習が終わって休憩になった。すると、竹中が後ろに4人引き連れて俺のところへやってきた。

「おい、お前本気で女バスのコーチやるのかよ」

「さっきも言ったけど俺は本気やよ」

男バスの練習内容をメモしながら答える。

「素人同然の女バスがたった2週間の練習で俺たちに勝てるようになるわけないだろ」

「それはやってみやわからんやろう？ 真帆たちの場所は渡さへんよ」

さすがにここまでバカにされたら我慢できないので、メモをとるのを止め竹中と睨むように向かい合う。

「俺たちだって女バスが憎くてつぶそうとしてるんじゃない。ただ、真面目にやらずに遊んでるなら余所でやればいいだろ」

「真帆たちにとっては、ここでみんなでやるバスケットに意味があるんや」

昼休みに真帆から聞いて、さっき智花と話して、俺の感じたことをぶつける。

「俺たちだってもっと練習したいんだ。お前、俺たちが去年地区大会優勝したのは知ってるか？」

「ああ、知っとるよ。なにか？ そっちには実績があるから女バスの方がなくなればいいとでもいうんか？」

「違う。じゃあどうして去年の成績を『地区大会優勝』って言うかは知らないだろう。それは県大会が1回戦でボロ負けだったからだ。それが死ぬほど悔しかったし、もっと練習しないといけないって思ったけどもう場所がなかった。あとからできた女バスのせいだな。それでもちゃんと練習してるんなら俺たちも我慢するけど、あいつら遊んでばかりじゃないか。なら俺たちに渡してくれてもいいじゃないか！！」

竹中の言い分もわからなくもないけど、それでも引くわけにはいかない。

「そっちのこともわかるけど、さっきも言うたけどここでみんなでやることが重要なんや。やから絶対真帆たちの場所は守ったる」

「ふん、もういい。でも、湊のワンマンチームでどうにかできるほど俺たちは弱くはないぞ」

「そんなんわかつとる。まあ試合を楽しみにしとくんやな。ギャフ

ンと言わしたるからな」

お互いにほとんど掴みかかりそうな剣幕で言いあい、言いたいことは言ったのでズンズンと音がしそうな歩き方で体育館を後にした。昇降口まで戻ってきたところで、男バスの練習を半分しか見ていないことに気付いたけども今更戻れないので仕方なしに真帆たちに合流することにした。

真帆たちはランニングから戻ってきていて筋トレをしていたので、それに一緒に参加しそれで今日の練習はおしまいになった。

俺は胸にモヤモヤしたものを抱えたまま家路についたのだった。

05. 男バスの理由（後書き）

なぜか歩が熱血キャラになってしまいました……
次でやつと昂が登場する予定です。
誤字・脱字があれば指摘してください。

06. 昴登場（前書き）

やっとすばるんを登場させることができました。
今までで一番の長文ですのでゆっくり読んでください。
それでは……どうぞ。

06. 昇登場

〵 交換日記（SNS） 〵

まほまほ「みーたんからメールきた！！ とりあえずいっしゅうかんかくほ。あとはわたしたちしだいだって」

湊 智花「1週間だけなんだ……。なんとか試合までやってもらえるようにできればいいんだけど」

紗季 「才能を認めてもらってもっと指導してみたいって思わせるってこと？ 正直むずかしくない？」

まほまほ「わたしにまかせなさい。あしたくわしく」

紗季 「真帆の考えることなんて、ろくでもないことになりそうね」

あいり 「男の人なんだよね？ 怖い人じゃなければいいな……」

ひなた 「こわい人はくる？」

竹中と言いいいをした次の日、金曜なので体育館は使えたけど体力づくりを行う方針はくずさず、シャトルランや筋トレをして練習を終えた。

土日の週末は自主練として、体力づくりをそれぞれでやってもらう。

そして週明けの月曜日、登校してきた俺は真帆の隣にある大きな鞆を見つけ、あっけにとられつつも鞆の持ち主であろう真帆に聞いてみる。

「これ、なにが入っとるん？」

「にししし。今日の秘密兵器」

今日に秘密兵器がいるようなことがあったかなと疑問に思い、真帆の良き理解者？である紗季に疑問の視線を向けてみる。

「金曜にみーたんからメールがきて、例のもう1人のコーチが今日から来ることになったのよ。連絡なかった？」

「うん、初耳やね。そっか今日からなんや」

それがどうして秘密兵器につながるのかまだわからなかったけど、

その答えは浮かない顔をした智花が教えてくれた。

「けどその人は1週間しかコーチをやってくれないらしくて、試合までやってもらえるように私たちを気に入ってもらえる作戦がそれなんだって。私たちもまだ中身は教えてもらってないんだけど」

「1週間っ！ それはいくらなんでも短すぎるやろ。練習日で言ったら実質3日やん」

「やっぱりそうだね。じゃあせめてもう1週間やってもらえるように頼んでみるしかないね」

そのための秘密兵器なんだろうけど真帆のニヤニヤした顔をみてみると激しく不安になってしまう。

「はい。授業始めるよ」

真帆の秘密兵器の内容は分からずじまいだったけど、先生が入ってきたので仕方なく話を切り上げることになった。

休み時間の度に内容を聞いてみたけどもはぐらかされてしまい、結局わからないまま放課後になってしまった。

もう1人のコーチを迎えるために体育館に向かい、すぐ練習できるように着替えることになった。

真帆は体育館に持ってきた秘密兵器の入ったカバン（運ばされたのは俺で意外と重かった）を抱えてみんなと一緒に体育倉庫に入っていた。

俺もすでに定番になりつつあるトイレで着替えを済ませ戻ってくると、体育倉庫から悲鳴が聞こえた。

「絶対無理だよ」

「こんなの着れないよー」

一体何事かと思ったけど、まさか扉を開けて確かめる訳にもいかず、なにがあったのかとソワソワしながら待つことになってしまった。しばらくするとなにか言いあいをしていたのも静かになり、扉が開いた。

「なっ!!」

出てきたのは真帆だった。……だったけども服装がおかしい。

体操服に着替えているはずが体育倉庫からでてきた真帆は、頭に白いカチューシャとヒラヒラのエプロンを装備し、黒のロングスカートのドレスを着ていた。

いわゆるメイドの格好だったのだ。

驚きで固まっていると他のみんなも体育倉庫からでてきた。

しかし、みんなも真帆と同じようなメイド服をきていたので再度固

まるはめになった。

紗季と智花は真帆と同じロングスカート、愛莉とひなたはミニスカートの格好だった。

「うう恥ずかしいよ……」

「スカート短すぎるよ……」

「全く、真帆はろくなこと考えないんだから」

「ひなは結構好きだよー？」

みんなの文句（ひなただけは大丈夫らしい）を聞いていると、1番最初に出てきた真帆が目の前にきてクルリと1回転した。

「どう、あゆむん？ 似合う？」

「あ、ああ。すごくよく似合っとなるよ。かわいい」

「えへへへ」

戸惑いを隠せないままそう返事を返すとポツと頬を赤く染め、みんなのところへ戻って行った。

しかし、これが真帆の秘密兵器の内容なんだろうな。

幾分冷静さを取り戻した頭で考える。

けど、とてもこんなことで真帆たちのことを気に入ってもらえると

は思えない。

むしろこれで気に入ってもらえたら今から来るコーチはかなりやばい感じの人になってしまいうんじゃないか？

そんなことを考えていると、なにやら真帆がみんなに向かって言っているのが聞こえてきた。

「だ〜か〜ら〜、もう1人のコーチが入ってきたらみんなで『お帰りなさいませ、ご主人さま』って言うの！！」

それを聞いた瞬間、ガクっと体の力が抜けたような感じがした。正直、メイド服を見た時からこのセリフは言うだろうと思っていたけども、実際聞いてみると恥ずかしいセリフにしか聞こえない。

「もー、こんなの私の家じゃ普通だよ？」

「あんたのそこは普通じゃないの」

紗季が至極もつともな反論をしているけど効果はなく、しぶしぶみんなセリフを言うことに賛成した。

みんながそんな言い争いをしている間、俺はみんなから少し離れたところで傍観者を決め込んでいたら、ふいに紗季と目が合ってしまった。

やばい、と思うけども遅かった。

「そういえば、歩のはないの？ 真帆」

「余計なこと言わんでいいって」

「フフフ、もちろんそんなことはないよ。ちゃんと用意してあるよ。
……ジャジャーン」

そう言って取り出したのは、メイド服と対をなす服装で黒を基調としたスーツ、赤い蝶ネクタイ、どこからどう見ても執事服だった。こんな服を着るのは御免被りたいけども、真帆のワクワクした眼、紗季のあんたも道連れよ的な眼、ひなたの純粹な着ないの？ 的な眼にさらされ、しぶしぶ着ることにした。
ちなみに愛莉と智花は俺の執事服を気にする余裕はないらしい。

「はあ、わかったよ。着てくれればいいんだろ」

「ちなみにこっちもあるけど、どう？」

再び鞆から取り出したのは真帆と同じロングスカートのメイド服だった。

「アホか！！ そんなん着るわけないやろ」

「にやははは、やっぱ無理かー。じゃあそれに早く着替えてきてよね」

無駄なやりとりをしてしまい、ドツと疲れた感じになってしまった。でも仕方なしに着替えにトイレに向かった。

着替えをしていて気付いたことが1つ。この執事服は俺の体のサイズを測って作ったんじゃないだろうかと思うくらいピッタリだった。一体真帆はどうやってこの執事服を作ったのか、もといどうやって俺の体のサイズを調べたのかすごく気になるところだ。

まあ気にしても仕方がないと割り切って着替えを済ませ体育館に戻ると、若干落ち着きを取り戻した愛莉と智花を含めてみんなが寄ってきた。

「あゆむん、なんか『ぼい』な」

「おー。あゆむーカッコイイ」

「確かに似合ってるわね」

「うん、似合ってるよ」

「ちょ、ちょっとカッコイイかも」

口々に褒め言葉をもらったので調子に乗ってしまう。

「お褒めいただきありがとうございます。お嬢様方」

右腕を90°曲げておなかのところへ持っていく、左手はまっすぐ脇にたらしとお辞儀をする。

「おー、あゆむんやるじゃん！」

そんなこんなでメイド5人、執事1人でもう1人のコーチを待つ。
体育館の入口に6人で並んで待っていると、ついに扉が開いた。

「「「「「お帰りなさいませ、ご主人様」」」」」

扉が開いた瞬間、みんなで一斉に例のセリフを言ってお出迎えをした。

しかし、開いた扉は開けた張本人の顔もよく見えないうち閉じられてしまった。

そして、少し間をあけてもう1度開いた。

「「「「「お帰りなさいませ、ご主人様」」」」」

さっきと寸分変わらず同じセリフで迎えるけど今度は扉は閉じられず、代わりに呆氣にとられた顔をして順番に俺らを見回している。

（あれ？ この人？）

顔に見覚えがあったので思い出そうとしていると、正氣に戻ったらしくハッとした表情をした後、急に腰を90°曲げて頭を下げた。

「ミホね……篁先生が無茶を言ったんだね。申し訳ない」

「なんのことですか？ ご主人様」

突然謝られ、なんのことだかわからない俺達を代表して真帆が聞き返した。

「え、その服装は篁先生が無理やり着せたんじゃないの？」

どうやらこのメイド（＋執事）でのお出迎えを篁先生の仕業だと思っただけらしい。

いきなりそんな発想になるなんてこの人も篁先生の破天荒な性格のおかげで苦労してるんだろうな。

「違いますよー。これはご主人様をお迎えするために自主的に着たんですよ。ねえ、もっかん？」

「……………はい」

蚊の泣くような小さな声で智花が返事をする。

そりゃあ素直に「はい」とは言えないよな、さんざん渋ってたし。」

「あのうご主人様、初対面ですし自己紹介とかしませんか？」

見かねた紗季が話題を変えようと自己紹介を提案する。

「そ、そうだね。じゃあみんなの名前を教えてください」

それを聞いた真帆がみんなにアイコンタクトを送る。

「「「「「かしこまりました、ご主人様」「」「」「」

若干疲れた顔をしてみんなを見渡すもう1人のコーチ。

「その『ご主人様』って言うの止めてもらえないかな？」

再びアイコンタクトが送られ、真帆を中心に円陣を組む。

「じゃあ・・・」

「いや、でも・・・」

そうして、なかばヤケクソ（2人はノリノリ）で相談の結果を発表する。

「」「」「わかりました。お兄ちゃん」「」「」

それを聞いた瞬間、目の前にいる人が膝をついてガックシとうなだれた。

気を取り直してみんなの自己紹介を済ませ、次はいよいよもう1人のコーチの番になった。

「えー、長谷川昂、15歳です。バスケ歴は6年くらいでポジションはガードです。篁先生とは親戚で、今日は篁先生の紹介できました。1週間よろしくお願いします」

自己紹介を聞き、長谷川さんをどこで見たかを思い出した。

「あつ、もしかして君は園田君？」

どうやら向こうも俺のことを思い出したらしく、少し驚いた顔をしている。

「え、なに？ あゆむん知り合い？」

「知り合いつていうか、まあお隣さん」

長谷川さんの顔を知っていたのは、引っ越してきた時にお隣さんに挨拶をした時に会っていたからだった。

「それにしても奇遇ですね。まさかお隣さんの長谷川さんが篁先生の親戚だったなんて」

「そうだね。けど、ここは『女子』バスケットなんだよね？ なんて男の園田君がいるの？」

至極当然なことを質問されてしまい、どう答えたものかと考える。

「俺も基本的には長谷川さんと同じ理由ですよ。篁先生からコーチをするように頼まれたんです。だからこれからよろしくお願いします」

「なるほど、篁先生から……。男がもう1人いるっていうのは心強

いね。こちらこそよろしく」

2人で話していると突然真帆が長谷川さんの腕に抱きついてきた。

「お兄ちゃん!!」

「ま、真帆さん。どうしたの？」

「『真帆さん』なんて呼び方ダメ!　さん付禁止。あと敬語も禁止」

「わ、わかったから離れて『真帆』」

きちんと呼び捨てで呼んでもらえて満足したのか案外素直に腕から離れた。

「じゃあお言葉に甘えてみんなのことも呼び捨てにさせてもらうね。そのかわり、俺のことを『お兄ちゃん』って呼ぶのを止めてくれると嬉しいんだけど」

「えーこれもダメなのー。『妹系メイド』って最強じゃない?　じゃあ、すばるんのツボってなに？」

「うん?.....え?」

真帆に詰め寄られ、かなり困惑している長谷川さんを助けるために

2人の間に入る。

「真帆、ちょっと落ち着けて。すいません長谷川さん。真帆のやつ、張り切りすぎちゃってるんです。この服も長谷川さんを歓迎するために真帆が全員分用意したんです」

「べつに謝らなくてもいいよ。ちょっと驚いただけだから」

興奮気味の真帆をなだめていると、オズオズと智花が口を開いた。

「……長谷川さん。早速ですけど、今日からご指導をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「そ、そうだね。じゃあみんな着替えてきてくれる？」

それを聞いた真帆は不服そうに頬をふくらました。

「えー、なんでー？」

「なんでって、そりゃあそんな格好じゃ……………ねえ」

「ん？ パンツなら大丈夫だよ。ほら」

「「なっ！」」

そう言いながら真帆はいきなりおへそが見えるくらいまでスカートを捲りあげた。

完全に不意をつかれた俺と長谷川さんは目をそらすこともできずに真帆のスカートの中を見ってしまう。

結果的に『大丈夫』の意味を知ることになった。

「……………スパッツ？」

俺は見てしまったものの正体をつぶやく。

「そ、もっかんと紗季もはいてるよ。ちなみにミニのしたはブルマ……………だよと」

「きゃあっ!!」

そしてミニスカートの下も大丈夫なのを見せるために、よりにもよって1番恥ずかしがっている愛莉のスカートをめくったのだった。話している間もずっと短いスカートを必死に下げようとしていたので、いくらブルマといえども見てしまった罪悪感には真帆の時より断然大きい。

「こら、真帆。愛莉に謝れ」

「おー。ひなのブルマも見ろ？」

「ひなた、そんなことしちゃダメ」

紗季が真帆をしかり、ひなたが自分のスカートをめくり、智花がそれをたしなめている間、俺も長谷川さんも見てしまった罪悪感に打ちひしがれていたのだった。

結局、服装は体操服に着替えることになり、俺もみんなも着替えにいくことになった。

着替えて再度集合した俺たちに向かって、長谷川さんがこれからやることを告げる。

「えーと、まずはみんなの実力が知りたいから紅白戦をしようか。智花と歩は経験者なんだよね？　ならチームは智花・紗季・ひなたと歩・真帆・愛莉に分けようか。歩はコーチだけど悪いが人数合わせに参加してもらうよ」

「わかりました」

俺もみんなと一緒に着替えに行かされた時からこうなることを予想していたので、特に不満に思わずに賛成する。

「なら始めようか。と、その前に愛莉ちよっといいい？」

「は、はい。な、なんでしょう？」

突然話しかけられて驚いたらしく、かなりあたふたしながら返事をする。

「愛莉は背が高いからしつかりとゴール下を……」

ピシッ

そんな音が聞こえそうなほど一瞬でこの場が凍りついた。

俺を除く5人の顔を見ればそれは一目瞭然だった。

そして静寂は突然破られる。

「うわああああああん、やっぱり私はでか女なんだあああああ」

愛莉がまるで赤ちゃんのように泣き始め、俺と長谷川さんは突然の事態に訳もわからず困惑してしまった。

それにいち早く対応したのは真帆と智花だった。

「アイリーン、ダメじゃないか。すばるんに説明しとかないから勘違いされちゃうんだぞ」

「そうだよ、愛莉は4月生まれだから他のみんなよりちょっと早熟なだけだって」

まだ、なにがなんだかわからない俺達2人のそばをティッシュを持ったひなたが愛莉にトコトコと駆け寄っていった。

「おー、あいり。ティッシュあるよ」

成り行きを見守るしかない俺たちに紗季が説明をしてくれる。

「愛莉は高身長がひどいコンプレックスなんです。ちょっとしたでも背のことを言われるといつもこうで」

「そうやったんや」

バスケをしている人にとっては身長が高いことはアドバンテージになるけども、確かに女の子であんなに背が高いというところからかわれたりしたんだろうな。

俺も愛莉がバスケをしているとわかった時は、背が高いことからす

ごい有利だなと思ったけどそれを口に出さなくて正解だったわけだ。
今後は愛莉の背について触れないでおこうと決めたのだった。

みんなの説得のおかげで愛莉がようやく落ち着いたのは、もう6時
を過ぎてそろそろ片付けをしなければならぬ時間だった。

「ご、ごめんなさい。せつかく、き、来てもらったのになにもでき
なくて。ごめんなさい、ごめんなさい」

「いいんだよ。今日はみんなとおしゃべりして仲良くなれただけで
も十分だよ。じゃあみんなでチャチャッと片付けしちやおうか」

長谷川さんがそう言ったのでみんなで片付けを始める。

と言っても、もとからボールが2、3個ころがっているだけなので
後はモップをかければ終わってしまう。

そんな中智花がフリースローラインに近寄り、近くにあったボール
を拾い上げそのままジャンプシュートを決めた。

俺はその時モップがけをしていて気付かなかったけど、長谷川さんの目が驚きで開かれてしばらく動かなかったらしい。

そうして掃除を終えた俺たちは、笹先生の車で帰る長谷川さんに別れを告げ、家路についたのだった。

06. 昂登場（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

男バスとの試合はまだまだ先になりそうです。

次回更新がちょっと遅くなるかもしれませんが気長に待ってもらえるとありがたいです。

感想など書いていただければ幸いです。

07. 迷える子羊たち（前書き）

いつもより少し更新が遅れました。

もうすぐ資格の試験があつて勉強しないといけないのに、この小説を考えるのが楽しくて勉強していません。

本気でやばいなーと思っている今日この頃。

内容はまだ暗い感じで進みますが書き方をちょっと変えてみました。
それでは……どうぞ。

07. 迷える子羊たち

〃 交換日記（SNS） 〃

紗季 「真帆のバカ！！ バカのトロサーモン！ 長谷川さんドン引きだったじゃないの」

まほまほ 「おかしいなー。メイドといもうとはさいきょうだってパパがいつてたんだけどなー」

紗季 「どうすんのよ、このままじゃあと2回で絶対終わっちゃうわよ」

あいり 「うう、私を取り乱しちゃったから……ごめんなさい」

湊 智花 「愛莉のせいじゃないよ。でも、最終日に続けてもらえないか頼んでみてダメなら諦めよう。あとは歩と一緒になんとかしよ」

まほまほ 「いや、まだあきらめるのははやいって」

紗季 「そうよ、最後まであがいてみよ」

ひなた 「おー、お兄ちゃんくる。ひなもがんばる」

湊 智花 「みんな………ありがとう」

次の日登校してくると愛莉はまだ暗い顔をしていた。

「やっぱり私、人より背が高いのかな？」

「そんなことないっていつもいってるじゃん」

「真帆の言う通りよ。あんまりしつこいとまた揉むよ？」

「朝っぱらからなんて会話をしてるんだよ」

席に着くと紗季がちょうど愛莉にセクハラ発言をしているところだった。

「ひなもあいりのおっぱい揉みたい。気持ちいい」

「あうう。もう胸は……………許して」

「だから、なんて会話をしてるんやって。そういうのは男の俺がおらんとこでやってよ」

呆れていると先生が入ってきたので話は終了になった。

今日はいつもとより教室に来るのが遅かったから結構ギリギリになつてしまった。その理由は職員室に寄って篁先生と話していたからだ。ついさっき話した内容を授業をBGMにして思い出す。

「篁先生、ちょっといいですか？」

「なんだ、園田か。どうした？」

ちょうど職員室に入ろうとしていた篁先生を見つけ呼びとめた。

「昨日の練習のこと、聞きました？」

「ああ、昴を送って行ったときに聞いたよ。愛莉を泣かしちゃったんだって？」

「そうです。それで練習は全然できなかったです」

篁先生を朝から探して聞きたいことはその時思った疑問だった。

「前に先生は長谷川さんのことを四六時中バスケのことを考えてるような人だって言っていましたけど、昨日の様子からするとなんかそこまでバスケに夢中じゃないというか冷めてるって感じだったんですけど……」

「あーそれはね、いろいろ事情があつてね。まあ園田には話しておいた方がいいかな。ついておいで」

そう言つて、職員室に入ると来客用のイスに座り、俺に対面に座るように促すので大人しく従う。

「結論から言うといつは今、バスケが嫌になつて。理由は至つて単純で、憧れの先輩が不祥事を起こしてバスケ部が1年間活動停止になったからだ。その先輩を追って高校を決めたくらいに憧れたのに勝負する時間も、一緒に練習する時間すら奪われた。だから、あいつはやる気をなくしてる」

「その不祥事ってなんだったんですか？ 1年間の活動停止って結構重いですよね。暴力ですか？」

予想以上に深刻な話になつて焦つたけど、とりあえず疑問に思つたことを聞いてみる。

「顧問の娘と駆け落ちしたんだと。しかも相手は小学6年生。そりゃ怒るわって感じだけどね」

「え？　ここ小学校ですよ？　それならここでコーチしてるってバレたらややこしいことになりませんか？」

小学生と問題を起こして活動停止になった部活の部員が小学校に出入りしているとなったら、長谷川さんにあらぬ噂がたってしまうんじゃないか？

「大丈夫だろ、昂にそっちの気がなければやましいことはしてないんだし。それに正直見てられないんだよね、今のあいつ。これをきっかけにして元に戻らないかなって思うんだ」

心配そうな顔をしている笹先生を初めて見る。普段が笑顔が多い人だけにたまに真剣な顔を見ると本気で想ってるんだなと感じる。

「それでも、よく女バスのコーチなんて引き受けてくれましたね？　長谷川さんの1番来たくないところだったんじゃないですか？」

「そこは……ほら………ねえ？」（ニヤリ）

絶対なんかしたよこの人……

「まあ長谷川さんのことはわかりました。あと、先週頼んだ男バスの資料ってなにかありました？」

「ああ、あれね、ちょっと待って……たしかこの辺に」

自分の机に戻ってゴソゴソとあさってなにかを探し始めたのでおとなしく待つ。

そうしてしばらく待つとDVDを1枚出してきた。ちなみにDVDが入っていた引き出しにPSPやDSと一緒に入っていたのは教師としていいんだろうか。

「DVDですか？」

「そ、中身は紅白戦が2本と練習試合が1本、それと1日の練習風景が入ってるよ。練習試合のメンバーがたぶん今回のメンバーでてくると思うよ」

「すごい貴重な資料じゃないですか。こんなのどうやって手に入れたんですか？」

予想外にいい資料が出てきたのでびっくりしてしまふ。

「あのカマキリの野郎がムカついたからウィルスをうつしてやったらネット経由で流れてきた」

「いやいや、なんてことしてるんですか」

と、こんな感じで話をしていたら時間がやばくなってしまったという訳だ。

それにしても長谷川さんの件は結構深刻だな。あんな理由があったんじゃそりゃコーチするのにやる気がでないのも仕方がないな。真剣に長谷川さんが今週で終わってしまった時のことを考えなきゃいけないかな。

そんなことを考えていたらいつのまにか授業が終わっていた。休み時間になっても俺たちはどこかしんみりとした空気になっていたのは今後のことへの不安からだった。

「どうした？ 暗い顔して。自分たちの実力にようやく気付いて落ち込んでるのか」

そこへ竹中がやってきて嫌味を言ってくる。それに1番に反応したのはやはり真帆だった。

「そんなことないよーだ。夏陽なんて楽勝だな」

しかし、どことなくいつもの元気がないような気がする。

「ふん、1、2週間真面目に練習したくらいでうまくなれるほどバスケは甘くないぜ」

「すばるんっていうすごいコーチが教えてくれるから大丈夫だもんねー。あと、あゆむんもいるし」

なんかおまけみたいに言われて少しショックだ。まあ実際、補佐みたいなものだからおまけと言えはおまけなんだけど……………

「すばるん？ 園田とは別にコーチがくるのか？」

「そうだぞ。すばるんはすごいんだぞ。えーと、えーと……………」

どうやら真帆は長谷川さんの経歴を自慢したいらしいが忘れてらしく、首をひねっているので仕方がないから助け船をだしてやる。

「本名は長谷川昂さん。篁先生の甥っこで高校1年生でバスケット部の時に弱小校を県大会準優勝まで持って行った司令塔ってところかな？」

「そうそれ、それが言いたかったんだよ。どうだすごいだろ」

真帆が薄い胸をはって、まるで自分のことのように自慢する。

「ふ、ふん。どんなやつが教えたって1週間くらいの練習でそうそううまくなるわけじゃないじゃん。じゃあな」

捨て台詞を残して去っていく竹中を真帆は、穴が開けとばかりに睨んでいた。

「なんだよ、夏陽のくせに生意気な」

「まあ竹中の言うことももつともやけどな。けどあいつがムカツクことには同感や」

「や、やっぱり難しいのかな？」

真帆と竹中の悪口を言い合っていたら愛莉がオズオズと話しかけてきた。

「ぶっちゃけ1週間かそこらの練習じゃ全然足りやんよ。でも、『勝てる作戦』があつて、それに向けての練習をそれこそ死ぬ気でやればなんとかできるんじゃないかと思つとる。その『勝てる作戦』を考えるのに長谷川さんみたいな人がいないと困るんやよ」

「歩じゃ無理なの？」

そんなことを紗季が聞いてくるけど、正直俺には荷が重いことだ。

「みんなを教えるのはできると思うけど、作戦を考えるのは俺には
厳しいな。智花はどう？」

「わ、わたし？ 私には全然無理だよ」

自分に振られるとは思ってもみなかったらしく、智花は体の前で
両手をブンブンさせて否定してくる。

「じゃあやっぱり長谷川さんには続けてもらわないかな。なんか
いい方法ないんかなー」

「試合の理由を話して同情を誘うのはダメ？」

「それは俺も考えたけど、篁先生がそれを話す時はタイミングをし
っかり考えろってさ。いきなりやと逆効果になりそうやってさ」

結局いい案が浮かばないまま放課後になり、今日は体育館が使え
ないのでまたランニングをみんなやって家路につく。

その間も、みんなの顔にはいつもの元気がなく暗い雰囲気が漂っ
ていた。

そして次の日。

放課後になり、長谷川さんを迎えての練習2日目が始まった。今日のお出迎えは普通だったので、入ってきた時の長谷川さんはホッとしたような顔をしていた。

「じゃあ準備運動はこれくらいにして、この前できなかった模擬戦をやるか」

事前に俺も着替えていたので、この前言われたチームに分かれてゲームを始める。一応みんなの実力を長谷川さんが見るための模擬戦なので、俺は智花の相手とアシストに回ることにする。

智花もそれはわかっているらしく、前回ほど俺との勝負にこだわらずに紗季達にパスをだしている。しばらく模擬戦を続けて休憩になった。

「智花、ちょっといい？」

「は、はい。なんでしょう？」

「普段の練習ってどんなことをしてるのか教えてもらえないかな？」

それを聞いた智花は体育倉庫になにかを取りに行った。

すぐ戻ってきた智花の手には水色の小さなメモ帳が握られていた。

今まで普通の練習をしたことがないから俺もまだ知らないので、長谷川さんの隣から智花の持ってきたメモ帳を覗き込む。

「へえー、ちゃんとしたメニューじゃないか」

確かにメモに書かれていたメニューは基礎練習を中心にバランス良く組まれていた。けどそれならおかしいことが1つでてくる。

「なにしてんの？」

「うわっ！」

真帆の声が聞こえたと思ったら、長谷川さんの驚いた声も聞こえてきた。

なにがあったか見てみると真帆が長谷川さんの背中におぶさっていたので、さっきので真帆が背中に飛び乗ったらしい。

「ほら、真帆。長谷川さんの迷惑やから降りといで」

「はーい」

案外素直に降りてきて俺の隣にやってくる。

「で、何見てたの？」

「普段の練習メニューを教えてもらつとるところやよ」

真帆も一緒にメモ帳を見ていたけども、小さなメモ帳を4人で見ているので当然お互いの顔がすごく近い。少し動いただけで致命的な部分が接触事故を起こしそうなくらいだ。かと言って、メモ帳を見ないという選択肢はないのでこのままの体勢でいることにする。

「そういえばこんなのだったっけ。懐かしいなー」

「懐かしい？　これ、今のメニューじゃないの？」

長谷川さんは疑問に思ったようで智花に聞いているけども、俺はそうじゃないかなと思っていた。もし、このメモの練習をちゃんとやっていたら未だにみんなが初心者レベルなのはおかしいからだ。

「初めはこれでやってたんだけど、だんだんめんどっちくなってきたから最近は試合しかしてないよ」

「ごめんなさい。いけないって思ったんですけど、みんなが楽しいと思える方がいいのかなって考えてしまっ……」

それで竹中は「女バスは遊んでばかりだ」なんて言ってるんだな。けどそれだって、バスケのことになると極度の負けず嫌いにな

る智花が練習よりみんなの楽しさをとることができた結果なんだから喜ぶべきことなんだよな。

「えっと……じゃあ練習メニューは考えなくていいのかな？」

やっぱりそうなるよな……。

けど、それじゃあ困るのでメニューを考えてもらえるように頼んでみる。

「いえ、ぜひもつといいメニューを考えてほしいです」

「そうだよ、すばるん。私たちにもコージョーシンってやつができてさ。だから、ビシバシやってくれたまえ」

そう言って真帆は『ビシバシ』のところで両手を右の方にあげて戦隊もののポーズらしきものをとった。きっと『ビシッ』っていう感じに反応したんだろうけどそのセンスはいかなものかと思う。

「そ、そっか。ならみんなの意見も聞いて考えてみようか」

長谷川さんも若干引いている感じだった。けど、メニューを考えてもらう時に男バスとの試合のことを言えれば、それ用の練習を考ええてもらえるかな。

「すっげーの作ってよね。一時間でレベルが3上がったやうなやつ」

「レベル？」

真帆がよくわからないことを言うてくる。長谷川さんや俺はもちろん、智花さえもわかっていなさそうだ。

「そつ。一時間で3上がるから1週間だと、2時間が3日あるから……18だね。レベル18だとどれくらい？ 地区大会優勝は楽勝だよね？」

「バツ、真帆それじゃあ……」

真帆が核心じゃないけど男バスのことに触れる。けど、その言い方じゃあ……。

「うーん。よく意味がわからないけど、とりあえず1週間で地区大会優勝は無理じゃないかな。そんな練習メニューはどんなに頑張っても作れないよ」

そりゃ普通はこうなるよな。だからこそ、長谷川さんの力があるってことをうまく伝えないといけないんだよな。

そんなことを思っていると、やけに真帆が静かなのに気付く。

「おい、真帆。どうし……」

真帆の顔を見て驚く。いつも元気いっぱいな笑顔はそこにはなく、ただ感情のない顔が浮かんでいた。

「……んで………無………の」

弱々しい声でなにか言っただけどうまく聞き取れなかった。真帆の異変に長谷川さんも気付き、戸惑っているといきなり真帆は大声をあげて長谷川さんに詰め寄った。

「無理とか困るよ！　なんで無理なの？　ゲームなら一晩やればレベル10くらい余裕じゃん！　だったら1時間で3は楽勝でしょ！　」

真帆の声は隣のバレエ部がびっくりしてこっちを見るくらい大きく、みんなが異変に気付いて近くに寄ってくる。

「……それは無理だよ。そんな急にうまくなれるものじゃないし、最初は体力をつけなきゃいけない。でも、真帆なら1ヵ月ちゃんと

練習すればすぐに……………」

「1カ月も待てないよ！ 体力ならあゆむんに言われて走ってるよ？ それじゃダメなの？ じゃあ必殺技教えてよ。打ったら絶対きまるシュートとか！」

レベル云々の話はかなり真面目な話だったらしく、本気で『1時間レベルが3上がる練習』を長谷川さんが作ってくれると思っていたようだ。とりあえず、真帆を落ち着かせることが先決だな。

「真帆、落ち着けつて。そんなに長谷川さんを責めるなよ」

「でもっ！ ………………わかった」

近くにきたみんなも真帆をなだめるのに協力してくれ、なんとか落ち着かせることができた。けど機嫌までは直らず、落ち込んだままだった。

それでも一応、みんなで新しい練習メニューを考えてみたけどもムードメーカーの真帆が暗いままなので、いい意見がでるはずもなくこの日の練習は終わりとなってしまった。

そうして、結局なにも進展がないまま2日目の練習は終わったのだった。

07. 迷える子羊たち（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

原作を読んだ時もありましたけどバカのトロサーモンとかどんな罵倒の仕方なんだろうね？あまりバカにされていないように感じるのは私だけでしょうか？

次回も少し更新は遅れると思います。

誤字・脱字・感想があれば、特に変えた書き方についてあればよろしく願います。

08. 決意新たに（前書き）

最近はちよつと長文気味になってしまってます。
気長に読んでもらえるとうれしいです。
それでは……どうぞ。

08. 決意新たに

〃 交換日記（SNS） 〃

まほまほ「もー、すばるんにはがっかりだよ」

湊 智花「残念だけど、やっぱり急にうまくなれる方法なんてないんだと思う。長谷川さ

んは当たり前のことを言ってるだけなんだよ、きっと」

紗季 「そうかもね。けど私たちや歩だけじゃどうしようもないし、やっぱりコーチは続

けてもらわないとなあ」

あいり 「じゃあ、やっぱり今度の練習の時に試合のこと話すの？」

紗季 「そうね、なるべく練習中に好感度あげて、最後に続けてくれるように頼んでみ

ましょ。ひな、頼りにしてるわよ」

ひなた 「おー。おまかせー？」

そして、長谷川さんとの練習最終日。

長谷川さんを説得するいい案もないまま、俺たちは着替えて長谷川さんを待っていた。けど、いつもの時間になっても長谷川さんは現れなかった。

「どうしたのかしら、いつもならもう来てくれてる時間なのに」

「も、もしかして、今日はきてくれないのかな？」

「そんなことはないはずやけど………」

もし本当に今日来てくれなかったら最悪だ。説得の機会すらないことになる。そうだったら、最後の手段で篁先生に頼むしかない。先生ならきつとえげつない手段で長谷川さんを連れてきてくれることはできるはずだ。でも、なるべくならそれはしたくないな。やっぱり自分の意思でやりたいと思ってほしいし、無理やりしてもらってもきつといい結果にはならないだろう。それとも、長谷川さんは諦めて俺が作戦から考えてみるか……。

そんなことを考えていたら体育館の扉を開いて長谷川さんが入ってきた。来てくれたことに安心してみんなで長谷川さんに駆け寄る。

「良かった、きてもらえないかと思いました。じゃあ早速練習を……」

…」

そう言って話しかけてみるけども、長谷川さんの顔がすごくつらそうだったので途中で言い淀んでしまう。

「さっき、男バスの子と話をしてきた。試合のこと聞いたよ」

どうやら遅かった理由は竹中たちと話していたからだったらしい。竹中たちに先を越された形になってしまった。こんなことなら、もっと早く試合のことをいうべきだったかも。

「……ごめん。男バスの味方をするわけじゃないけど、君たちを勝たせてあげられるような指導は無理だよ。勝ちたいならもっと違う方法を考えてほしい」

つらそうな顔をして俺たちにそう告げる長谷川さん。それに真っ先に反応したのは真帆だった。

「他に方法なんてないよ！　すばるんが必要なんだよ、あたしたちには……！」

「……真帆」

真帆の真剣な訴えを聞いても長谷川さんの顔は曇ったままだった。

「ごめん、真帆。俺には無理だ。それに真帆たちがかわいそうだとも思うけど、男バスの気持ちもちよっとわかるんだ」

「――っ、すばるんのバカ!!」

「おい、真帆。待ってって」

長谷川さんに怒鳴って走り去っていく真帆を、急いで追いかける。後ろでは、智花が帰ろうとする長谷川さんを引きとめて、少しでも練習を見てほしいと頼んでいるところだった。

そんなやり取りをあとにして真帆を追いかけることに集中する。まだ背中は見えていたけど、それもすぐ角を曲がって見えなくなってしまった。

「くっそー、やっぱり真帆のやつ、足速いなー」

ただでさえ真帆は運動神経がいいので足が速いのに、さらに今ががむしゃらに走っているので余計速くなっている。なかなか追いつけずにいると、ついに見失ってしまった。

それでも、見つけずに戻るなんてことはありえないので決して狭くない校舎を真帆を探して走り回った。

ようやく見つけた真帆は中庭にいた。真帆が俯いて座っているのは、何日か前に俺と真帆が話したベンチだった。

「こんなところにいたんか。探したよ」

声をかけて隣に座るも反応らしい反応もなかった。かわりに、ぐすぐすっという弱々しい鳴咽が聞こえてきた。それには気付かないフリをして話を続ける。

「いきなり怒鳴って走りだすからびっくりしたで。あとで長谷川さんに謝らんといかんな」

「ぐすっ……。だって、すばるんが無理だって。男バスの気持ちもわかるって」

なんとか話せるくらいまで落ち着いてきたらしく、俺もゆっくりと話しかける。

「今の状態じゃ、長谷川さんが男バスの気持ちもわかるっていうのも無理ない。現に俺だって、もし真帆たちより先に男バスと関わったら向こうの味方をしてたやろうしな」

「——っ。そんな」

真帆がショックを受けた顔をしているが、かまわずに続ける。

「でも、ここで話を聞いて、まだ2週間くらいやけど一緒におって、みんなの気持ちもわかったつもりや。長谷川さんもきつと、もつとこっちの事情を知ったらコーチをやってくれるはずや」

そして、次に言うことを意識して頬がちょっと赤くなる。

「そ、それに俺もおるしな。たとえ長谷川さんがダメでも俺がなんとかする。ここで約束したことは守るよ」

「あゆむん……」

言ってからさらに恥ずかしくなり、照れ隠しに真帆の頭に手を置き、少し乱暴に撫でる。

「ま、まあ長谷川さんの説得は最悪、笹先生に頼めば脅迫まがいのことをしてでも説得するやろうから大丈夫やろ」

「ふふ、そうだね。頼りにしてるぞ、あゆむん」

まだ瞳に涙を残したまま、そう言って真帆はにっこりと笑ったのだった。

2人で体育館に戻ると、長谷川さんはもう見当たらず最後の練習が終わった後だった。それが次につながるような感じではなかったことは4人の顔を見ればすぐにわかった。俺たちが戻ってきたのを見て紗季が口を開く。

「最後の練習終わっちゃった。どうしよっかこれから……」

「長谷川さんが作ってくださったメニューでがんばってみるしかないね。せめてもう少し時間があればいいのに」

「試合の延期ってできないのかな？」

智花の「時間があれば……」というのを聞いて愛莉が質問してくる。

「まず無理でしょうね。絶対勝てるっていう自信があるから試合受けたんだろうし。くそーム力つくなーあのカマキリ」

紗季がバツサリと切り捨て愛莉が少し落ち込んでしまう。

「おー？ おにいちゃんもうこない？」

「くるよ。絶対すばるんは助けにきてくれるよ！」

元気を取り戻した真帆が、ひなたの発言を否定する。

「なんで、『絶対』なんて言いきれるほど信じられるのよ？ 『バカ！！』 なんじゃないの？」

「ムカついたけどみーたんが連れてきた人だから信じることにした。それにあゆむんがなんとかしてくれるって言ったもん」

「へー、歩がねー。これはさっき、なにがあったか詳しく話してもらわないといけないわね」

ニヤニヤしながらそんなことをいう紗季から逃げるため、俺は慌てて着替えにトイレに向かうのだった。

そして、日曜日。俺は朝起きてからずっと頭を悩ませていた。

「うがー！　わからん！　どうすればいいんやー」

もしも長谷川さんの説得が失敗した場合のことを考えて作戦を考えていたのだから、わかっていたがこれがなかなか難しい。机の上にボツになった作戦を書いた紙がところ狭しと置いてあるけども、これだという作戦は思いつかないでいた。作戦を考えるにはまずは相手の実力を知ることから、ということ朝から笹先生からもらったDVDをみていたけど、思ったことは1つ。

男バスは強い。

俺も練習を見に行ったけど、あの時は途中で帰ってしまったし、見れたのは前半の基礎的な練習の部分だけだったのであまり参考にならない。実際に試合の映像を見ると、ディフェンスはマンツーマンが多く、しっかりとそれぞれが役割をこなしている。特別うまい選手はいないが粗もないチームだという印象だ。さすがは地区大会優勝校という感じた。

そして問題が竹中のオフENS力だ。さすがに自慢するだけあって、あいつは智花ほどの実力はないけど結構な点取り屋らしい。今の女バスでは止められるのは智花だけだろう。けど、智花にはオフENSでも頼らざるを得ないから竹中までまかせたら負担が大きすぎる。智花を軸にして、オフENSとディフェンスの負担を軽くしてあげられるような作戦がいいんだろうけど……………。

そうしてさっきのセリフに戻るといふ訳だ。

「しかし、ほんとどうすっかなー長谷川さんの説得。まあ、ちゃんと女バスのことを話せばわかってくれそうなんだけどな。というか、それしか方法が思いつかん」

かなり悩んでみたものの、結局は直接会って話すしかないという結論になり、少し早めに昼食を食べて隣の家を訪ねることにした。

呼び鈴を押してしばらくすると、長谷川さんのお母さんの七夕なゆさんが出てきてくれた。

「あら？ 君はたしかお隣の……」

「はい、隣に越してきた園田歩です。今日は昴さんに会いにきました」

「まあ、今日はかわいいお客さんがたくさんね。すばるくんなら庭にいると思うからどうぞ」

そう言ってもらえたので遠慮なく庭の方へ行かせてもらう。角を曲がれば庭に着くというところで話声が聞こえ、思わず立ち止まってしまった。話し声から、さっきの七夕さんが言っていたかわいいお客さんが誰なのがわかった。

「——私、バスケのことになるとすごく負けず嫌いになっちゃうんです。——」

先客は智花だった。なんで智花がここにいるかはわからないけど、女バスのこと、自分のことを話しているようだった。とても入っていきける雰囲気ではないので、壁にもたれて俺も智花の話を聞くことにした。

智花は、前の学校で負けず嫌いの性格のせいで居づらくなり慧心に転校してきたこと。体育の授業でバスケットをして真帆に気に入られたこと。紗季とあいり、ひなたを誘って女バスを作ったこと。そして智花がどんな風に慧心女子バスケットボール部のことを想っているかを話していった。俺が真帆から聞いたことを、智花の言葉で、智花の想いを話し続けた。長谷川さんからこの試合に負けたらどうするかを聞かれ、もう2度とバスケットはしないと答えた智花はこう続けた。

「もし負けても、私きつとみんなに笑いながら聞いてみせますよ。
『さあ、次はなにしようか?』って」

それを聞いた瞬間、長谷川さんが息をのんだのがわかった。とても切なくて、そして覚悟をきめたような声だった。俺からは智花の顔は見えなかったけど、きつと清々しい顔をしていたんだと思う。

しばらく無言ままだが続いたが、飲み物を渡すためにやってきた七夕さんが2人の沈黙を破った。

「あら？ 歩君がこっちにきてない？」

「え？ 来てないけど。歩が来てるの？」

長谷川さんが逆に七夕さんに聞き返している。このまま隠れているのもおかしいので出て行くことにした。

「すみません。お邪魔してます」

「い、いつからそこに?!」

俺の登場に智花が慌てだした。きっと話を聞かれていたのが恥ずかしいのだろう。それとも長谷川さんと2人で居たことを知られたくなかったのか。

「智花が話し始めたところくらいからやな。ごめん、盗み聞きする形になってもうて」

「ううう……」

智花はよほど恥ずかしいみたいで赤くなって小さくなってしまった。

「ところで、歩も俺の説得にきたのかな？」

長谷川さんが俺の方を向いて核心を突いてきた。

「そのつもりだったんですけど、今の智花の話を聞いても無理なら俺にできるはことないですね。それで、どうです？ 考えなおしてくださいますか？」

俺はなるべく真剣な顔をして長谷川さんに尋ねてみる。これには智花も顔をあげ、長谷川さんをじっと見つめていた。

そして、少し長い沈黙を経て長谷川さんが口を開いた。

「……………ごめん」

返事はなんとなく予想していた。たぶん断られるんじゃないかと。長谷川さんの隣に座っている智花はやっぱり残念そうに顔を俯かせている。しかししばらくして顔を上げた時には、もう覚悟を決めたような顔になっていた。

「それじゃあ、厚かましいですけどゴールを使わせてもらってかわないですか？」

どうやら智花はこのまま長谷川さんの家で練習していくようなので、練習の相手を申し出てみる。

「智花、練習していくん？　なら、ボールだしくらいいしょか？　長谷川さん、かまいませんか？」

「あ、ああ。かまわないよ」

長谷川さんからも許可がでたので、ボールだしをしにゴール下に移動する。そうして智花はシュート練習を黙々とし始めた。途中に智花の休憩を兼ねて俺もシュート練習をしたり、2人で1on1をやったりして練習をしていた。その間、長谷川さんはずっと俺たちの練習を見つめていて黙ったままだった……。

そうして俺たちが練習を終えたのは、もう太陽が傾き、空が夕焼けに染まるころだった。俺と智花はシャワーをお借りし、長谷川さん親子に玄関の前で見送られる。

ちなみに俺もシャワーを借りたのは、俺は家に帰ってから浴びるからと断ったら、智花も「それなら、私も」と断り、長谷川さんに説得され俺が使うならということで決着したので俺もシャワーを使わせてもらうことになったのだった。

「こんなに長く、申し訳ございませんでした。ありがとうございます」

そう言って智花は長谷川さんの家を後にした。俺は長谷川さんが智花の後ろ姿をじっと見ているので、無言のままその場に立っていた。そして智花の姿が見えなくなったところ、智花のいなくなった方を向きながら長谷川さんに話しかける。

「長谷川さん、俺、今からかなり生意気なことを言います。ムカつくなら怒ってくれてかまいません。……俺、長谷川さんが今どんな立場なのか篁先生から聞きました。憧れの先輩のせいでバスケット部が1年間の活動停止になってバスケットが嫌になったって。確かに目標にしていた人が突然いなくなって腐ってしまうのはわかります。けど、そんなことで冷めてしまうほど長谷川さんの中でバスケットってそんなに軽いものですか？」

長谷川さんの方に向き直ると、長谷川さんも俺の方を向いたので、眼を見て話を続ける。

「それに、さっきまでの練習でも智花のことを気にしてましたよね？ あれは智花のシュートフォームに惹かれていたんじゃないですか？ このままなら来週の試合は負けてしまうでしょうね。もちろん最後まであがいてみせますけど、きっとそれが現実です。そうしたら、智花はバスケットを辞めてしまいますよ？ あんなにバスケットが好きで、あんなに綺麗なシュートが打てる智花が。もし長谷川さんが助けてくれたら守れるかもしれないのに、です」

「……………」

長谷川さんは自分を責めるように話す俺を、怒るでもなく黙って見つめていた。そして突然、今まで抑えられていたものが溢れ出てきたような、そんな声を出した。

「あー！もー！ そうだよ。俺には無理だっつーの。このままバスケに背を向けるのも、智花を見捨てるのも！！ 母さん、晩御飯の準備4人分な！ 歩、お前はここにいろ！」

「ふふ、わかったわ」

「わかりました」

そう言い残して長谷川さんは智花の帰って行った方へ全速力で走って行った。その後ろ姿を見送りながらいると、晩御飯の準備をするために家に戻ろうとしている七夕さんがポツリとつぶやいた。

「おかえり、すばるくん。ありがとう、歩君」

ちょうど玄関が閉まるタイミングだったので、うまく聞き取れなかったけど、どこか嬉しそうな感じの声だった。

しばらくすると、少し眼を赤く腫らした智花を連れて長谷川さんが戻ってきた。

「じゃあこれから作戦会議だ。男バスのこと、教えてくれ」

「「はい！」」

俺と智花はそれから再度、長谷川さんの家にお邪魔し、男バスのことや明日からの練習について話し合った。それは夕食をごちそう（ホテル顔負けの料理ができてすごく驚いた）になっても続き、智花の門限が迫ってきたのでお開きになった。

智花を駅まで送っていくという長谷川さんと玄関のところで別れ、俺は隣の自分の家に着くまでにふと夜空を見上げた。そして、「よしっ」とガッツポーズをとって明日から始まる忙しくも楽しいであろう日々を想うのだった。

08. 決意新たに（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想等書いていただければうれしです。

09. 本格始動(前書き)

やっとここまでこれたなって感じですよ。

けど試合まではあと三話くらい先なのでまだまだがんばらないと…

…ですね。

それでは……どうぞ。

09. 本格始動

〃 交換日記（SNS） 〃

湊 智花「やったよ！ みんな。昴さん、また明日からも来てくれるって」

まほまほ「でかした！ もっかん」

あいり「本当に？ 良かったー」

ひなた「おー？ おにいちゃん、おかえりー」

紗季「よくやったわよ、トモ。それにしても、どこで長谷川さんと会ったの？」

湊 智花「練習しに学校に行ったら偶然。それで、昴さんのお家にお邪魔したら歩君もきて、それ

でいろいろあったの。ごめんね、うまく話せないから明日学校で話すね」

まほまほ「あゆむんもいったのか。あたしもいけばよかった」

紗季「なにしにいくのよ。それにしても、『昴さん』ね。いろいろ面白くなってきたわね」

そして週が明けて月曜日。

俺が登校してくるとテンションMAXの真帆が、席につくなり話しかけてきた。

「おはよう、あゆむん！ もっかんから話は聞いたよ。昨日はよくやってくれた、褒めてつかわす」

一体いつの時代の人だよ、というツツコミはせず軽く流す。

「俺はなんもとらんよ。智花ががんばったから長谷川さんは来てくれることになったようなもんやよ」

「ほんとにー？」

妙にニヤニヤした紗季が聞いてくる。智花を見てみると顔を赤くして俯いているので、俺が来る前に昨日のことを根掘り葉掘り聞かれていたんだろう。

「智花がどう話したかわからんけど、俺は確かに煽りはしたけど、長谷川さんは結局は智花のためにコーチをすることを決めてくれたから、やっぱり智花のおかげだよ」

「もっかんのためかー、胸でももませたとか？」

「そ、そんなわけないでしょ?!」

「またもや真帆がセクハラ発言をして智花がかなり慌てている。そんなことより俺は、1つの懸念材料が真帆の足もとにあるのでそれについて訊ねてみることにした。」

「真帆、その足元にあるカバンやけど見たことがあるような気がするんやけど……」

「うん、前持ってきたのと同じだよ！ 中身もね」

「俺は前回と同じく、紗季に「マジで？」とアイコンタクトを送ると「マジよ」と返ってきた。ような気がする。」

「それを着るのはいいけど、下にすぐ練習できるように体操服きるんやで。昨日練習メニューを話しあったけど、やっぱり余裕はないから練習はすぐ始めると思うから」

「オッケー、オッケー。練習どんとこいって感じ」

「着るのはいいんだ……………」

愛莉がなにやらブツブツ言っていたけど無視した。そこはもう、真帆がこの状態なら言うだけ時間の無駄なのであきらめる。

そして放課後になり、またもやメイド＋執事で長谷川さんを迎える。扉が開いた瞬間、前回と同じくお決まりのセリフを言う。

「「「「「お帰りなさいませ、ご主人様！」」「」「」」

今度は扉を閉めるのではなく、かなり肩を落として困ったような顔をしていた。

「ごめん、みんな。着替えてきてください」

そう苦笑とともに言う長谷川さん。もちろん、俺たちも想定内なのですぐに着替える。下に着ているのでその場で脱いでしまう。みんなの着替えが終わってのを見て、改めて長谷川さんが口を開いた。

「もう智花や歩から聞いていると思うけど、またコーチをやらせてもらうことになりました。けど、まずはこの前ひどいことを言ったのを許してもらえとうれしい」

そう言って、長谷川さんは頭を下げる。

「おー、おにいちゃん、ゆるすー」

1番初めにひなたが答え、顔をあげた長谷川さんに、もちろん俺たちもひなたと同じ気持ちなので笑顔で答える。

「ありがとう。じゃあ早速だけど始めようか。打倒男バスへの特訓を」

長谷川さんの宣言を聞いてみんなの顔が真剣なものに変わる。

「じゃあまずはチームを2つに分けます。Aチームは真帆と紗季で歩の指導でシュート練習をしましょう。Bチームは愛莉とひなたちゃんと智花でまずはディフェンスの練習だ」

昨日話し合った通りにチーム分けがされる。とりあえず俺の仕事は、真帆と紗季を試合で使えるほどのシューターにすることだ。

「じゃあ、歩そっちは頼んだよ。昨日決めた通りにやってみてくれ。Bチームは、まずはランニングだから外に行こうか」

「「はいっ!」「」」

智花たちBチームが元気よく返事し、ランニングの為に外に出て行き長谷川さんもそれについて行った。

「それで? 私たちはなにをすればいいのかしら?」

「そうだぞ、あたしたちはどんなことすんの?」

2人ともやる気は十分なようで早速、練習内容を聞いてくる。もちろん俺もやる気十分なので、2人にボールを持ってゴールの近くまでくるように指示を出す。そして、真帆を右斜め45度でゴールから3mくらいのところに立たせ、紗季を真帆と反対の左斜め45度の位置に立たせる。

「じゃあ2人には試合まで、徹底的にここからのシュート練習をしてもらうよ。この位置をしっかりと覚えといてな」

「でも、少し遠くない?」

距離が少し遠いのを心配している紗季に試しにシュートを打ってもらおう。放ったシュートは、バックボードの上の方に当たってリン

グにかすりもしなかった。続いて真帆にも打ってもらったけど、真帆はリングには当たったけどシュートは決まらなかった。

けど今はこれで十分だ。紗季の心配した通り、この距離は少し遠いので真帆たちの力で届くかが心配だったけども2人ともリングに届いたので一安心だ。

「じゃあフォームを教えるからよくきいてな。まず、シュートは腕の力だけじゃなくて、膝のバネを使って……………」

基本的なシュートフォームを教えていく。真帆も紗季も初心者なので両手打ちのやり方を教えていたら、真帆がそれに文句を言ってきた。

「えー、もっかんやあゆむんとおんなじやつがいい！ 片手でビュッって打つやつ」

「ワンハンドシュートは、もっとフォームがしっかりしてからじゃないと難しいで？」

そう言って説得するも聞いてもらえず、結局ワンハンドシュートを教えていく。紗季は両手打ちの方でいいと言ってくれた。説明も終わり、2人にさっきの位置で早速練習をしてもらう。

しばらく交互にシュートを打って、フォームが崩れたりしたら指摘し、相手の方へもどこが悪かったのか考えてもらい注意するべき

ことを確認していく。そうして、何回かやっているうちにシュートが決まりはじめる。

「よっしゃー、入ったー。見たか紗季！」

「なによ、私だって」

真帆が決めれば、すかさず紗季も決め、そんな風に次第に成功する時が増えていった。

「大丈夫か！ ひなたちゃん?!」

練習していると外から長谷川さんの慌てたような声が聞こえてきた。なにかあったようなので練習を止めて様子を見に行く。すると、愛莉に膝枕をしてもらい大粒の汗を書いて横たわるひなたがいた。そばには青い顔をした智花と慌てている長谷川さんもいた。

「苦しいかい？ 俺の声、聞こえてる？」

長谷川さんに話しかけられたひなたは苦しそうに眼を開き、弱々しい声で答える。

「だい……じょうぶ、だよ？ おにいちゃん」

すると長谷川さんが俯き、急にプルプル震えだした。

「そうだ、保健室に………いやそれじゃだめだ。救急車を呼ばないと！」

「は、長谷川さん。ひなちゃんは疲れてるだけですからそこまでしなくても大丈夫ですよ」

愛莉にたしなめられて長谷川さんは落ち着いたようだった。

「すばるんもさっそくヒナの無垢なる魔性の餌食かー」
イノセントチャーム

「俺もああなってたんやな」

長谷川さんの取り乱しっぷりをみて、俺も傍から見たらあんなにだったのかと反省する。

とりあえず、安全をとってひなたを長谷川さんが保健室へ連れて行くことになった。その間、長谷川さんが一時不在になるのでAチームも俺が見ることになった。とりあえず真帆と紗季には、引き続き同じようにシュートを練習するように伝え、Aチームの練習を伝えに行く。と、言っても智花は昨日の話し合いにいたので内容を知っているから、主に愛莉に説明をする。

「まずは愛莉、そこらへんに立って。そうゴールの近く。それから両手をあげて腰を落として。それで今から智花が全力で突っ込んでくるけど、とりあえずなにもしないでいいから。ちゃんと、そのままいるのが今日の練習」

「う、うん。このままの格好でいればいいんだよね」

愛莉はすでに若干怯えていた。大丈夫かなと思いつつも追い打ちをかける。

「知っての通り智花のドライブは相当速い。それが体スレスレまでくるけど、ちゃんと目を開けてその体勢でいること。それで智花も覚えてると思うけど愛莉を気遣わずに全力でいくことと、毎回にか1つフェイントをいれること」

「大丈夫、ちゃんと覚えてる」

智花から力強い言葉が返ってくる。愛莉はひどく怯えていたけども、ここは心を鬼にして智花を促した。

「じゃあ愛莉、行くよ」

「……う、うん」

そうして智花がボールを構え、愛莉に向かっていく。『全力を出す』というのをしっかり守り、相変わらぬドライブのキレだった。

「きゃあ！」

案の定、愛莉は智花が目前まで来たときに、目をギュッと閉じて尻もちをついてしまった。智花はそのままレイアップを決め、愛莉を心配そうに見ていた。

「愛莉、がんばれ。智花は絶対ぶつかってこやんから大丈夫。もう1回やってみよ」

「ひゃい」

それから何回かやってみるけども、肩を抱いて座り込んだり、尻もちをついたり、なかなか慣れることができないでいた。そうしているとき長谷川さんが保健室から戻ってきた。早速、AチームBチームの練習をざっと見て俺の方へやってきた。

「歩、ありがとう。やっぱり愛莉は難しいかな。……それじゃあこっちは俺が見るからBチームの方を見てやってくれ。あれなら第2段階にあけてもいいよ」

「わかりました」

長谷川さんから指示を受け真帆たちの方へ戻ると、俺と長谷川さんの会話を聞いていたのか真帆が質問してくる。

「第2段階ってなんのこと？」

「練習がレベルアップするってことやよ。それより休憩せんで大丈夫？ 少し休んでもいいよ？」

「全然大丈夫！ それよりレベルアップした練習ってなにをするの？」

どうやら真帆はまだ体力的には余裕がありそうだな。紗季にも聞いてみると、まだ大丈夫という返事が返ってきたので次の練習に移ることにした。

「基本的には今までと同じなんやけど、まず、真帆がそこからシュートを打ったらすぐにゴール下まで走ってボールをひろう。それを紗季にパスをして元の位置に戻る。紗季はパスをもらったら、シュートを打つ。この時になるべくはやく打つことを心がけるけど、フォームはしっかりとしたままにすること。シュートを打ったら、すぐ拾いに行って真帆にパスして戻ってくる。真帆はパスをもらったらすぐシュートを打つ。あとはこれの繰り返し。どう？ わかった？」

説明が長くなってしまったけど、なんとか2人は理解してくれたようだ。

「うへー、大変そう」

「そうね、難しそうね」

そう言いながらも2人とも、やる気十分な感じで自分のポジションにつく。

「あと、最初は難しいかもしれんけど、なるべく相手のシュートを見て悪いところがあれば言ってあげてほしい。もちろん俺も言うけど、2人で気付いたところを指摘し合って」

2人から了解の返事をもらったので練習を開始する。これはさすがにずっと続けるのはきついので、10分やって3分休む、を1サイクルにして練習を行う。

最初の方は2人ともまだ元気なので、戻ってくるのが速いのでフォームの指摘もできていた。けど段々とその余裕もなくなってきたらしく、自分のシュートを打つのが精一杯になってくる。

「ほら、真帆。完全に手打ちになってるぞー、紗季は右手が上がりすぎ」

「ハアハア。く、くそー」

「りよ、了解」

結局これをずっと続け、練習終了の声がかかったのは6時半ギリギリだった。終わるや否や、2人はひどく疲れた様子でへたり込んでしまった。

「ふいー、つーかーれーたー」

いつも元気一杯の真帆ですら大の字になって寝転がっている。紗季に至っては、タオルを顔にかぶせてしゃべる元気も残ってなさそうだ。

「お疲れ様、よく頑張ったな」

がんばった2人に労いの言葉をかけに行く。その途中にBチームの方を見てみるけども、愛莉にはあまり進展がなかったようだった。

「ねーあゆむん、レベルどれくらい上がった？」

「めっちゃ頑張ったから5は上がったんとかやうかな」

それを聞いた真帆はパアと笑顔になった。

「なんだよー。あるんじゃない、一気にレベル上げる方法」

まあシュートに限って、それも同じ位置からっていう条件がつくけど、とは嬉しそうな顔をしている真帆に言う必要はないな。真帆のレベルを聞いていたらしい紗季が、疲れきっているであろう体を起して自分のレベルはどれくらいか聞いてきた。

「うーんと、紗季は6くらいやな」

「えー、紗季の方が上なのー？」

紗季のレベルを聞いた途端、真帆の顔が不満そうになる。反対に紗季の顔は得意げだ。

「紗季の方がフォームの乱れが少なかったし、シュートが決まった数も多いからな」

俺が紗季の方がレベルが高い理由を言うと、

「くそー、紗季なんかには負けないんだからな」

「ふふ、追いつかせないわよ」

前から思っていたけども、2人はお互いにライバル視してるよな。
この2人なら抜きつ抜かれつで、すぐうまくなりそうだな。

そうしている間にスクールバスの時間が迫っていたので、すぐに
片づけを済ませみんなで家路についたのだった。

09. 本格始動（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

この小説も書き始めて早1ヶ月が過ぎ、PV3万超え、お気に入りも60件とたくさんの方に読んでいただいて嬉しい限りです。

これからがんばって書いていきたいと思えますのでよろしく願います。

10. 豪邸拝見（前書き）

早くも10話になってしまいました。まだ男バス戦すら終わらないとは……。

内容的にはいらなかなって思いましたけどなんとなく書きたかったので書いてみた的な第10話です。

それでは……どうぞ。

10. 豪邸拝見

〃 交換日記（SNS） 〃

まほまほ 「うー、からだがおもいー。うごけないー」

紗季 「私もさっき、お風呂で溺れかけたわよ」

ひなた 「おー？ そんな練習、きつい？」

湊 智花 「ひなたは今日みたいにあんまり無理しないでね」

ひなた 「おー、大丈夫。気をつける」

まほまほ 「そういや、アイリーンは？」

湊 智花 「……今日のこと、だいぶ気にしてたからまだ落ち込んでるのかも。ちよっと電話
してみるね」

次の日の朝、教室に入るとすぐにドヨンと愛莉が落ち込んでいるのがわかった。

「おはよう。愛莉はどうしたん？」

真帆や智花が慰めていたけど状況がよくわからなかったので紗季に聞いてみる。

「昨日の練習で全然できなかったのを気にしてるのよ。歩からもなにか言ってあげてよ」

確かに昨日の練習では、結局最後まで目を開けていることすらできなかったようなので落ち込むのも無理はないな。けど、あんなに怖がっていたのにギブアップせずに最後までやっていたのは胸を張っていいことなだけだな。

それを伝えてあげるべく愛莉に話しかけた。

「愛莉、まだ時間はあるから段々慣れていけば大丈夫だよ」

「ううう、頑張りたいのに……」

まだ元気がでない様子の愛莉に続けて話しかける。

「昨日は、あんなに怖がってたのに最後までやれたんやから大したもんやよ。それに本気の智花は鬼気迫る感じが怖すぎるから仕方ないよ。俺もあんなのが迫ってきたら目くらいいつむってしまいかもしれやんしな」

「あーひどい。私そんなに怖くないもん」

俺が智花が怖すぎるとフォローを入れると、当の智花が頬をプクーとふくらまして抗議してきた。それを見た愛莉が、まだ陰が少しあるものの「ふふ」と笑ってくれた。

愛莉の件が1段落したので、みんなに今日の予定を聞くことにした。

「ところで、今日はみんなはどうするん？」

今日は火曜なので体育館は使えないけど、試合まで日がないので遊んでる訳にはいかない。

「おー、ひなは走る。おにいちゃんが、がんばって走れって言ったから」

「私もひなちゃんと一緒に走るよ。長谷川さんから言われてるの」

「どうやら長谷川さんから指示をちゃんと受けているようなので一安心だ。」

「私は昴さんのところに言って作戦会議なの。試合のルールとか教えたり、当日の作戦を考えたり」

「あれ、そうなん？　なら、俺も行くよ」

智花が長谷川さんのところに行くというので、コーチ補佐としては行くべきかと思っただけでも思わぬところから反対意見がでてきた。

「なに言ってるの、あゆむん。あゆむんはあたしん家に集合すんの！」

「そうよ、歩には私たちの練習を見てもらわないと」

真帆と紗季がそう言ってくるけど、俺は初耳だったはずだ。けど、そういうことなら喜んで真帆たちに付き合うことにする。決まった内容はまた明日にでも聞けば大丈夫だろうしな。

「ふふ。それにせつかく、トモと長谷川さんが2人つきりなのに邪魔しちゃうでしょ」

「な、なに言ってるの紗季。そそ、そんなじゃないんだから」

紗季にからかわれて必死に弁解している智花は真っ赤な顔をしていた。それをみんなで笑って、俺はオールコートがあったり、メイドがいたりする真帆の家がどれだけすごいのか、を考えて始まった授業を過ごしていた。

そして放課後となり、朝に話していた通り、紗季と一緒に真帆の家に向かうことになった。他のみんなとは一緒にスクールバスで駅まで行き、そこでそれぞれの行き先へと別れた。なので今は、真帆と紗季の3人で真帆の家に向かっていく最中という訳だ。

「それにしても真帆ん家ってすごいんやろ？俺なんかが行ってもいいんやろか？紗季は行ったことあるん？」

「そりゃ、あるわよ。まあ、私も久しぶりなんだけどね。別にそんなに緊張しなくてもいいんじゃない？廊下の壺とか割ったら知らないけど」

さらっと怖いことを言う紗季を置いて、真帆にも話しかける。

「なー真帆、まだつかんの？」

最寄駅だという駅を降りてから、それなりに歩いているので周りを見渡しつつ聞いてみる。周りは一軒一軒の敷地が広く、道路から見える車は外車ばかりだ。俺ん家の周りとは比べるまでもなく高級住宅地という雰囲気が出ている。

「んー、家は見えてるんだけどなー。歩くとやっぱ結構かかるなー。ほら、あれが家だよ」

そういつて真帆が指差した方を見て、俺の想像はまだまだ甘かったことを思い知らされる。真帆が指差した家は小高い丘の中ほどにあり、リゾートホテルかなにかかと思ってもおかしくないような大きな家だった。

「あ、あれなん？」

驚き半分、呆れ半分になって呆然と立ち尽くす。しかし真帆はもちろん、紗季も俺みたいな反応に慣れているのかスタスタ歩いて行ってしまう。置いて行かれないように走って追いつく。しばらくして、丘の麓にある薔薇の模様の門までたどり着いた。そこで1人のメイドさんが俺らを出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ、真帆さま」

そう言ってお辞儀をしてくるメイドさんは、以前真帆たちが着ていたのと同じデザインの服を着ていた。真帆が用意したメイド服は自分の家のメイド服をモデルにしたようだ。

なんて思っていると真帆がメイドさんと話始める。

「おー、やんばる。出迎えごころう」

「いえ、むしろ駅までお迎えに行けず申し訳ございません。それで、そちらが？」

「そ、今日来るって言ってあった友達のあゆむん！ と紗季」

紗季がまるで俺のおまけのように言われている。まあ紗季は初めてではないから仕方ないのかな。けど、隣の紗季を見るとムスっとした顔をしていた。

「はじめまして、あゆむんさま。私、真帆さまの専属メイドを務めさせていだいております、久井奈聖^{ひじり}と申します。本宅において御用の際は私にお申し付けください」

「こ、こちらこそ、はじめまして。園田歩です。今日はお邪魔させてもらいます」

本物のメイドさんを目の当たりにし、たじろいでしまう。自己紹介をしてくれた久井奈さんは真帆の専属ということだけど、真帆の

世話を見るならかなりの重労働なんじゃないだろうか？ 凜とした佇まいからは真面目そうな印象を受ける。

けど俺の聞き間違いかもしれないけど、さっきの自己紹介でかしなところがあったので改めて聞いてみる。

「あ、あのー、俺のことなんて呼びました？ 『あゆむん』さまっ
て言いませんでした？」

「それでいいじゃん。あゆむんはあゆむんなんだから」

久井奈さんに聞いたのに答えたのは隣の真帆だった。

「はい、あゆむんさまとお呼びさせていただいております」

そう言って、にっこりと笑う久井奈さん。

前言撤回。このひとなら真帆の世話もできるかもしれない。むしろ一緒に遊んでそうなイメージに変わった。

「ふふ、久井奈さんは真帆の付けたあだ名でみんなを呼ぶのよ。トモも『もっかんさま』だしね」

そんなやり取りをして、門のそばに停めてあったリムジンに乗っ

て家の方に向かうことになった。ちなみに運転は久井奈さんがやってくれている。普段も真帆の送り迎えは久井奈さんがやってくれているそうだ。俺はと言えば、リムジンという高級車に緊張してしまい、真帆たちとの会話でも生返事しか返せなかった。

実際には数分なのだろうけど、俺には1時間にも感じた道のりを過ごして本館に到着した。さっそく1階の部屋に案内され、そこで着替えるように言われた。真帆と紗季は別の部屋に案内されていた。着替えはすぐに済んで部屋の前で待っていると、着替えを済ませた真帆と紗季がやってきた。

「じゃあコートにいかがか。こっちだよ」

真帆の案内でコートに向かう。本館をでて、庭とはいえない森を歩くこと数分、開けた視界の向こうにテニスコートに隣接してバスケットコートが見えた。すでに久井奈さんがいて、タオルやスポーツドリンクの準備をしてくれていた。

「じゃあ、さっそく練習しようよ!」

「いやいや、ちゃんとストレッチしてからや」

真帆が「えー」と不満そうな顔をしてるけどこれは譲れない。ケガをしたら元も子もないだろ、と真帆を説得しストレッチを始める。確かに真帆も紗季も結構、体が柔らかいけどしっかりと体をほぐしておくのは大切なことだ。

ストレッチを1通り終え、いよいよ練習を始める。

「じゃあ、まずは定位置から打つやつで昨日のおさらいからやな。ちゃんとフォームを覚えてるか確認や」

「はい」

2人は元気に返事をして、きちんと昨日と同じ場所に立ってシュートを打ち始める。さすがに昨日の今日なので、2人とも重要なところは忘れておらず、しっかりとフォームを自分で確認しながらシュートを打っていく。

「真帆も紗季も直接ゴールを狙うんやなくて、バックボードの四角の枠の中を狙う感じで」

「了解！」 「わかったわ」

何回かシュートを打って感覚を思い出したようなので、早速第2段階の練習に切り替える。

「じゃあ、走るやつをやるか。今更やけど筋肉痛とか平気？」

朝から普段通りだったのであまり気にならなかったけど、昨日の

練習が終わった時のことを考えれば十分なついてもおかしくないけど、そこは若さの勝利か、ケアがよかったのか、若干足に違和感があるくらいで済んでいるらしいので練習を続ける。昨日と同じように10分やって3分休憩を繰り返す。

1時間ほどそれ続け、2人がかなりバテてきたので一旦休憩にする。すると待機していた久井奈さんが、全員分のタオルとドリンクを持ってきてくれた。

「真帆さまも紗季さまも、たいへんお上手なんです」

久井奈さんはタオルを渡しながら、みんなに話しかける。褒められた2人はうれしそうにしている。確かにシュートが決まる数も増えてきて、うまくなっていく実感があるんだろう。

「それにしても、真帆さまがこんなに真剣になれるのはネトゲ以来ですか？　このコートを買ってもらうために旦那様に頼んでいた時も――」

「も、もう、やんばるうるさい！ ほら、あゆむん休憩終わり！」

正直、まだあまり休んでいないのできついんじゃないかと思うけど、真帆があまりに必死に久井奈さんに続きをしゃべらさないようにするので練習を再開することにした。紗季も呆れながらも、再開することに頷いてくれた。それにしても、あんなに必死に隠そうとされると逆に知りたくなるのが本音なので、あとで聞けそうなら久

井奈さんにも聞いてみるかな。

「じゃあ始めよっか。次はさらにレベルをあげて、俺がディフェンスに立つわ。まあディフェンスと言っても、ただ前で両手をあげて突っ立ってるだけやけどな。やから、シュートを打ったら俺を避けてボールを拾ってパスをする。パスを受けたらすぐシュートを打つけど、その間に俺がディフェンスにつくから」

2人から了解の返事があったので、早速練習を再開させる。やはりただ立っているだけのディフェンスでもやりづららしく、さっきまで入っていたシュートがあきらかに入らなくなっていた。

「くっそー、やりづらい」

「ただ立ってるだけなのに」

真帆も紗季も苦戦している。けど、試合ではフリーで打てることの方が少ないのだからこれに慣れておかないと話にならない。

「ほら、フォームが崩れてるぞ。俺を意識しすぎや」

それからしばらくして、慣れてきたのか2人ともシュートが決まり始める。しかし、もうそろそろ時間も遅くなってきて辺りが夕方というには暗くなりすぎてきていた。まだまだ練習を続けたそうな

2人だけど、さすがにナイター設備はなく、2人の疲労もかなりあるようなので今日の練習はここまでにすることにした。

そう告げると、2人は若干不満そうにしたけどもやはり疲れが相応あるらしく大人しく片づけを始めた。もちろん、俺も片づけを手伝っていると途中からどこかへ行っていた久井奈さんが戻ってきた。片づけが終わり、一息ついていると久井奈さんが近くまでやってきた。

「では、お風呂の準備ができていますので、どうぞこちらへ。そのあと、ご夕食の準備もしておきますので食堂の方へご案内します」

今日は俺も動いたので汗だくだったし、真帆たちは言わずもがなで久井奈さんと俺を置いて先に行ってしまったている始末だ。俺も遠慮なくお風呂を使わせてもらうため、久井奈さんに浴場に案内してもらった。

着いたところは案の定、銭湯くらいの広さのお風呂で思わず泳ぎたくなってしまうほど広かった。ともあれ、広いお風呂を満喫し楽しんで食堂に案内してもらう。

食堂も予想通りに広く、結構このゴージャスぶりに慣れてきている自分がいた。案内されたテーブルに所在無げに座っていると、風呂上がりでさっぱりした感じの真帆たちが食堂に入ってきてテーブルについた。2人が座ると料理が運ばれてくる。料理はフランス料理のフルコース……などではなく見た目は普通のハンバーグが出てきた。味は母さんが作ってくれるものより断然おいしく、きつと材料の差なんだろうなと思った。

デザートまで食べ終え、しばらく真帆たちと今日の練習のことなどを話しているとトイレに行きたくなったので席をたった。

「トイレは部屋を出て、左にいった、つきあたりを右に――」

トイレまでの行き方を真帆に聞いてみるも、説明が長かった。なんとか覚えて部屋を後にする。

「さて、どうしたもんやろ」

トイレにはなんとか着いたものの戻る時に迷ってしまった。

家の中で迷子になるなんて、なんてマンガ的お約束をやってるんだ……。

落ち込んでいても仕方ないので、ひとまずうろ覚えながらも歩き始める。しばらく歩いていると扉が半開きになった部屋があった。悪いことをしているとわかっていたけど気になったので覗いてみる。するとそこには、PSSをはじめ各種TVゲーム、将棋やオセロなどのボードゲーム、さらにはバランスボールや縄跳びなど雑多なもの部屋に散らかっていた。

なんかごちゃごちゃした部屋だな……と思っていると背後に人の気配を感じた。

「この部屋は真帆さまのおもちゃ部屋です」

思わず、「ひっ」と小さく悲鳴をあげ振り向くと、そこには久井奈さんがいた。

「ここにおいででしたか、探しましたよ」

帰りが遅い俺を心配して探していてくれたらしい。「ありがとうございます」とお礼をいい、この部屋について聞いてみる。

「ここは真帆の部屋なんですか？ 結構いろんなものが置いてありますね」

「はい。真帆さまは飲み込みが早くなんでも器用にこなしますが、その半面すぐに次のことに興味を示されるのでこのようにいろいろなものがある状態になっております」

なるほど、なんでもある程度はすぐにできるようになってしまいうから飽きっぽいんだな。たしかにこのシュート練習もすでに形にはなってきたもんな。

久井奈さんがそう小声で付け足したのを、すっかり自分の世界に入っていた俺は気付かなかった。

このことは秘密ですからね、と再度念押しされ、食堂へと戻った。戻ると真帆から「遅い」と叱られ、紗季からは「仕方ないわね」と呆れられた。そして少しおしゃべりをしてから、久井奈さんの運転するリムジンで紗季と一緒に送ってもらって家に帰ったのだった。

10. 豪邸拝見（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想等書いていただければ嬉しいです。

11. 決戦前夜（前書き）

今回は試合当日まで駆け足でいく感じになっております。
それでは……どうぞ。

11. 決戦前夜

〃 交換日記（SNS） 〃

紗季 「やー、今日も練習きつかったわ」

まほまほ 「あゆむんもけっこう、スパルタだよな」

あいり 「そんなに練習したの？」

まほまほ 「ひがくれるまでやったよ。それよりもつかんはすばるんとイチヤイチヤした？」

湊 智花 「してません！ ただルールの確認と作戦を話してただけ」

ひなた 「おにいちゃんち、いいなー。ひなもいきたい」

次の日は朝からみんなどことなく疲れている感じで、いつもなら

元気にあいさつをしておしゃべりを始めるところだがあまり会話が進まなかった。そういう俺も、昨日そんなに激しく動いていないのに疲れが残っていて、かなり眠たい。その日の授業はほとんど睡眠学習状態になってしまい、結果一日の授業がものすごく早く終わったように感じた。

そうして放課後になり体育館に向かう。朝は疲れたようにしていたみんなも現金なもので、練習の時間になると元気になって体育館に走って行った。

長谷川さんも時間通りにやってきたので練習を始める。

みんなでストレッチをしていると長谷川さんが話しかけてきた。

「やー愛莉、なんか背が縮んだんじゃないか？」

「ちょ、長谷川さん。それは……」

いきなり愛莉にとって禁句である背のことを話し始める。それを聞いた愛莉以外のメンバーも息を飲んで驚いていた。また泣き始めるんじゃないかと恐る恐る愛莉の方をみると、

「ほ、本当ですか!!」

「は?」

愛莉の反応が予想外だったので、思わず間拔けな声を出してしま

った。いやいや愛莉さん、そう簡単にこの成長期に背が縮むことはないですよ、とツツコミたいのを寸でのところで抑えた。

「あ、ああ。なんか気持ち目線が下がった気がするよ」

言った張本人の長谷川さんも驚きを隠せずにいた。しかも、ウソをついているという罪悪感からか目が若干泳いでいる。

「えへへ、嬉しい。もうあのベットの効果がでてきたんだ。よし、今日も頑張るぞー」

いつもはどちらかと言うと大人しい愛莉がハイテンションになるというのは、なかなかレアなんじゃないだろうか。みんなもまだ戸惑いが残っている感じだが、それは置いて残りのストレッチを終わらした。練習の準備をしている間に、俺はさっきのことを長谷川さんに聞きにいった。

「なんでさっきは愛莉にあんな見え透いたウソをついたんですか？」

「いや昨日さ、智花から愛莉は背が縮むっていう話には疑いもなく飛びつくってという話をきいてホントなのかなって試したんだ。結果は予想以上だったけどね」

確かにあれなら悪徳商法にだって引っかけりそうな雰囲気だった

な。

そうしていると準備が終わったようなので、月曜と同じ2チームに分かれて練習を始める。

「おっしゃー、今日もやるぞー」

「今日こそは成功率7割を達成するんだから」

2人ともやる気は十分みたいだった。真帆と紗季のシュート練習はフォームのおさらいから始め、俺のディフェンス付きの練習に切り替える。

休憩の合間にAチームの方の練習に目をやると、今日の愛莉はへたり込むことはなくなり、目もまだ多少びくつきながらも目はしっかり開けていられるようだった。月曜からしたら格段にマシになっていた。2回目ということで慣れたのか、それともテンションの高さゆえかわからないけど、もし後者ならあともうひと押しあればポストプレーもこなしてくれるようになるかもしれない。これは長谷川さんと要相談だな。そんなことを考えつつも、真帆たちの練習に集中する。

結局、今日もひたすらシュート練習をしていた。けど、真帆も紗季も飽きたの一言も言わずしつかりとお互い問題点を指摘し合い、確実にうまくなっていた。練習が終わり、片づけをしているときに少し離れたところでモップをかけていた紗季がポツリとつぶやいたのを聞いてしまった。

「はあー。今日も5割くらいだったな。しかも真帆の方がよく入ってたわよね」

そんなことをつぶやきながら少し落ち込んでいるようだった。Bチームコーチとしては、ほっとけないので励ましに行く。

「紗季」

「な、なに、歩。もしかしてさっきの聞いてた？」

びっくりさせるつもりはなかったけど、ちょっとボーとしていたのか話しかけた途端に驚かれてしまった。

「ごめん、聞こえてしまったわ。それより、そんなに気にせんでいいよ？ まだ本格的に始めて3日やのに成功率5割もあるなんてむしろ胸を張っていいことやよ」

「そうかしら？ でも真帆の方がよく入るよね？」

やっぱり真帆のことが気になるらしくそんなことを聞いてくる。

「まあ、たしかに今日は真帆の方がよく決めてたかな」

「やっぱり……」

いつもならここで「明日こそは負けない！」みたいになるのに、意外と深く気にしているようなので周りに聞こえないように手を添えて耳の近くで小声で付け足した。

「……でも、真帆はフォームが崩れる時が多いからまぐれなところもあるよ。その点紗季は安定したフォームやから、入るフォームを覚えたら真帆よりもすぐに上手になるよ」

「！ 本当に！」

やっと元気になってくれた紗季に笑顔で答える。すると、俺たちが話しているのに気付いた真帆が近づいてきた。

「なにやってんっの！」

「うわっ」

「きゃっ」

真帆が「っの」のところで軽くジャンプし、俺と紗季の肩に腕を回す格好で飛び込んできた。なんとか踏ん張ると真帆は素直に離れてくれた。

「さ、紗季にワンポイントアドバイスをやってたところやよ」

「えー、ずるい！ あたしにも教えてよ」

真帆のことを若干でも悪く言っていたので、本当のことを言えず困ってしまった。

「おーい、みんなちよっと集まってくれ」

するとタイミング良く長谷川さんが集合をかけたので、真帆を促して長谷川さんのところへ向かう。真帆は少し納得していない感じだけど大人しくついてきてくれた。みんなが集まったのを確認して長谷川さんが話し始める。

「実は明日のことなんだけど……——」

「おっしやー、決まったー」

日付が変わって木曜日の放課後。俺たちはみんなで長谷川さんの家に来ていた。昨日の練習後に長谷川さんから提案があったからだ。明日（金曜日）が祝日で休みなので、今日の放課後は長谷川さん家で夜まで練習する計画に真帆を始め、みんなすごい乗り気だったので速攻で了解の返事をして、今に至るという訳だ。

それで今は、長谷川さん家で練習中で、パスをみんなで回してから真帆がシュートを決めたところだ。

「じゃあもう一回ね。……智花」

そう言って智花にボールを渡す長谷川さん。

「はい。……愛莉」

パスを受けた智花はふわりとした感じで両手を挙げたくらいの高さでパスを出す。

「……と、とと。……ひなちゃん」

危うく落としそうになった愛莉だけど無事パスを受け取り、ワン

バンさせてひなたに渡す。

「おー、よいしょ。……真帆」

しっかりとボールを抱えたひなたは真帆にパスを出す。

「オッケー！ 紗季、決めろよ」

ひなたからパスをもらった真帆は、シュートを打つために例のポジションに走りこんでいる紗季にハッパ付きでパスを出す。

「言われなくても！」

紗季の放ったシュートはしっかりと決まった。

「紗季も真帆すごいね。ほとんど入るようになったんじゃない？」

「へへーん。楽勝だね」

「なに言ってるの。まだまだ練習しなきゃ」

智花が2人の練習成果を見て驚いていた。実際はまだ五分五分く

らいなんだけど、2人が褒められるとなんか俺まで鼻が高い気分になってしまう。

「でもホント、小学生って最高だな」

俺の隣で、一緒に真帆たちのやり取りをみていた長谷川さんがポツリとつぶやいたのが聞こえた。

「ハハ、長谷川さん。今のセリフだけ聞いたらヤバイ人に聞こえますよ」

「な、なに言ってる?! そんな意味じゃないからな」

「わかってますよ。言ってみただけです」

そうして、パス回しからのシュートや昨日から始めたディフェンスの練習、さらには愛莉の特訓など日が暮れるまでいろいろなことをやっていった。そんな感じで練習を続けていると、窓から2人の女性が顔を出した。

「みんな、お風呂の準備ができたわよ」

「さっぱりしたらご飯にしようね。今、特製グラタンを焼いてるところだから」

グラタンを焼いていると言った方は言わずとした七夕さんで、もう1人はと言うと今日俺が長谷川さん家でお世話になると言ったらついてきた俺の母さんだったりする。

「なゆっち、マイマイ、サンキュー！　もうあたしお腹ペコペコ」

「こら真帆、失礼でしょうが！」

真帆が「ご飯ですよ」発言にバンザイのように両手をあげて答えると、紗季からお叱りを受けていた。真帆にかかれば大人も関係なくあだ名で呼ぶらしい。なゆっちというのは長谷川七夕さんのことで、マイマイというのが俺の母さんの方のあだ名みたいだ。本名が『園田舞』なのでマイマイ何だろうけど自分の親があだ名で呼ばれるのはかなり恥ずかしい。しかも、2人とも「あらー若いころみたいね」なんて満更でもなさそうだから余計困る。長谷川さんの方を見ると、長谷川さんも微妙な顔をしていた。

「ま、まあそろそろ暗くなってきたしこれで練習は終わろうか。順番にお風呂に入ってご飯にしようか」

長谷川さんが俺たちの方を向いて聞いてきたので、みんなで「はい」と返事をした。

「じゃあさ、じゃあさ。みんなでいっぺんに入ろうよ」

真帆がそんなことをいいだし、女性陣はお風呂の広さに若干の不安を抱えつつ全員で入ることになった。俺たち男性陣は隣の俺の家のお風呂を使い、シャワーでさっと汗を流した。長谷川さん家に戻ってきて当然女性陣はまだ入浴中だったので、長谷川さんとリビングでくつろぐことになった。

「歩、明後日の土曜は夕がたくらいヒマ？ 当日の作戦の最終確認でもしたいけど」

キッチンの方から漂ってくるいい匂いにまったりしていると長谷川さんが話しかけてきた。

「それで、どうせなら男バスのDVDとかも見て確認したいから泊っていかないか？」

「俺は全然大丈夫ですよ。いいよね、母さん？」

すると、キッチンの方で「かまいませんか？」「ぜひ、泊って行ってください」というようなやり取りが聞こえた後、母さんからお許しがでた。

「……真帆、……恥ず……服……」

後は他愛ないことを話しているとバタバタと廊下を走る音が聞こえてきた。

「あゆむん、すばるん！ あたしともつかんの胸どっちがおっきい？！」

「なっ！！」

「うわああ！！」

いきなり扉を開けて入ってきた真帆はなんとバスタオルを1枚体に巻いただけの格好だった。そんな真帆を止めようと追ってきた智花も同様の格好だった。思わず2人のすらりと伸びる細い手足、それに風呂上がりで少し上気した肌に目を向けそうになるのを必死でこらえる。

「あらあら、湯冷めしちゃうから早く服を着ましようね」

「まだ見てもらってないよー」

かなり混乱している男性陣を置いて、七夕さんが2人をお風呂場に連れて行ってくれた。

……ナイスです、七夕さん。真帆はもっと羞恥心を持ってください。

そして祝日の金曜日。

今日は篁先生の計らいで1日体育館を使えることになった。午前中は今まで通り2チームに分かれての練習をやった。もちろん俺は真帆たちBチームの指導にまわる。とはいっても、もう2人ともかなりフォームも安定してきたので後は体が覚えるまで練習を繰り返すしかないので俺の仕事はディフェンスとして立っていることくらいしかなかった。

昼休みを挟んで午後からは、五人での攻撃練習とディフェンスの練習をやった。ディフェンスは時間がなかったのでかなり歪なものになってしまったけど、現状でできる最善だと思う。やっぱりこの辺は長谷川さんのコーチとしての力がでていて、とても俺だけではないつかない陣形だった。ディフェンスが弱い分点は取られるだろうけど、その分取り返せばいい。そのための2つの砲台であり、今回目指すバスケットはそういうバスケットだった。

そして、試合前日の土曜日。

この日は昨日の内に長谷川さんから休んで明日に体調を整えるように言われていたので練習はなかった。夕がたに長谷川さん家に泊りに行く予定だったので準備をしていると、昼過ぎに真帆から電話があった。やっぱりじつとなんてしてられないから練習したいの

で家にきてほしいという連絡だった。紗季にもすでに連絡済みで紗季も来るということで俺が断る理由もないので2つ返事で了解して、真帆の家に向かった。家を出るときに長谷川さん家に向かうであろう智花とすれ違った。

「あれ？ 智花も練習？」

「も？ てことは歩君も？」

「そ、今から真帆ん家に行くところ」

お互いがんばろ、と励ましあい別れた。

真帆の家に着くと紗季はすでについており、2人とも体操服に着替えて準備万端だった。とはいえ明日に疲れが残ったら意味がないので軽めに練習をすることにする。フォームの確認やディフェンスの時の役割なんかを確認していると気付けばもう夕がたになるうかという時間だった。

「じゃあ今日はこれくらいにしとこうか。今日はあとはゆっくり休むんやよ。それで明日は2人のシュートで男バスに勝とうな」

「あったりまえだ！」

「絶対勝つわ」

それから約束通り長谷川さん家にお邪魔し、夕ご飯と一緒に食べ（メニューは明日のことを思ってたかとかだった）お風呂に入ってから長谷川さんの部屋で作戦会議をはじめた。

「――と、まあ明日の作戦はこんな感じかな。なにかおかしいところはあるかな？」

DVDを見てから、明日の具体的な作戦を話し終わったあとに長谷川さんが聞いてきた。

「問題ないと思います。というか、これしかないってくらいのいい作戦だと思います」

「ハハ、ありがと。ただ心配なのは愛莉のことだね」

この作戦の最大の不安要素は、試合前に愛莉のことを騙さないといけないということだった。これに失敗すると勝ち目はなくなってしまう。

「それに関してはもう出たところ勝負しかないですよ。でも、この前の反応を見る限り成功する方が高いんじゃないですか？」

「そうだいいんだけどね。でも、終わったらちゃんと謝らないとな」

「その時は俺も一緒に謝りますよ」

そのあともしろいろ明日のことを確認して、時間も遅くなってきたので寝ることになった。そのまま、長谷川さんの部屋に布団を敷いてもらい一緒に寝る。

電気を消して1時間後、俺はまだ寝つけずにいた。明日のことを思うと、もつとできることがあったんじゃないかとか考えてしまい、不安でなかなか寝れないのであった。やれるだけはやったつもりだし、真帆たちもすぐくがんばった。けれどもそれでももし届かなかったら……なんてループする思考が余計に不安を駆り立てる。

「歩、眠れないのか？」

俺が寝ていないのを気配で気付かれたのか長谷川さんが話しかけてきた。

「はい。情けないですけど明日のことが不安でなかなか……」

「俺も歩も教えられることは全部教えた。あとはあの子たちを、あの子たちの努力と想いを信じよう。大丈夫、きっと勝てるよ。そのために俺と歩がコーチをしたんだから」

そうだ、みんなを信じよう。愛莉を、ひなたを、紗季を、智花を、そして普段は無茶ばかりするけど元気いっぱい、本当は友達思

いの真帆を。

そうしていると次第に不安はなくなっていき、眠くなってきた。

「……勝とうな。絶対」

うつらうつらとしていて意識が途切れがちだった俺は、長谷川さんがそう呟いたのに気付かなかった。

11. 決戦前夜（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回はいよいよ男バス戦です。オリジナル分は少ないかもしれませんが
んが勘弁してください。

感想お待ちしております。

12. VS男バス(前半) (前書き)

更新が遅くなってしまいました。

今回は長くなったので2つに分けました。

まずは男バス戦前半をお楽しみください。

それでは……どうぞ。

12. VS男バス(前半)

〃 交換日記(SNS) 〃

湊 智花「いよいよ明日だね。もうみんな寝ちゃったかな？　なんか寝付けないから日記を最初か

ら読んでたけどいっぱいあるね、みんなとの思い出」

まほまほ「あほ、なんじだとおもってた！　もっかんがちょうしわるかったらゼッテーかてないんだからな」

紗季 「そうよ、トモ。いくら私たちが少しくらいうまくなったからって最後はやっぱりトモが

頼りなんだから体調不良なんて許さないんだからね」

あいり 「えへへ、寝れないのはわたしだけじゃないんだね」

ひなた 「ともか、寝れないならミルクのめばいい。ひなものんだ」

湊 智花「みんな、返事早すぎだよ………ありがとう」

そしていよいよ試合当日の朝。

いつの間にか眠っていた俺が目を覚ますと、もう長谷川さんの姿はベットになかった。若干重いまぶたをこすり、いい匂いのするリビングに降りて行く。

「おはよう、歩君。あらあら眠そうね。あっちで顔を洗ってらっしゃい。もうすぐご飯ができるから」

おはようございます、と挨拶をして言われた通り洗面所に顔を洗いに行く。顔を洗ったおかげで幾分目が覚めて戻ってくると、朝ごはんの準備ができていた。

「悪いんだけどすばるくんを呼んできてもらえないかな？ 庭にいると思うから」

「わかりました」

ダダダ ダン パス 「ふう……」

庭に行くと長谷川さんがレイアップを決めたところだった。けど、朝練にしてはなんか汗をかきすぎているように思うけど……。

「いつもそんなに朝から練習してるんですか？」

「ハハ、そんなことないよ。……今日はただ早くに目が覚めちゃってじっとしてられなかったから、かな」

そう言って苦笑いをする長谷川さんに朝ごはんができたことを伝え、一緒にリビングに戻る。朝ごはんを食べ終え、しばらくすると箕先生が迎えに来てくれたので学校まで送ってもらった。

集合時間である9時より15分も早く着いたのにもうすでにみんな集合していた。

「遅いぞ、あゆむん、すばるん」

「ごめん、ごめん。でもみんなが早いんやよ？」

会うなりダメ出しを真帆からもらってしまい、謝りつつも他のみんなにあいさつをしていく。一通りあいさつをすますと向こうからカマキリがやってくるのが見えた。

「箕先生、やっと到着ですか。私たちは8時半には集まっていたのに女バスは余裕ですね」

カマキリに話しかけられた当の本人は一瞥もくれることなく真帆たちと話していた。完全無視とは朝から絶好調だな。

「ふん、まあいいでしょう。今日は機嫌がいいですから。なんとつて、明日からどこかのお遊びを見ることなく練習できるんですからね」

憎たらしい捨て台詞を残してカマキリは去って行った。その後ろ姿に真帆、紗季、さっきまで無視を決め込んでいた篁先生が親指を下に向けるポーズをやっていたけど自業自得だ。むしろ俺も一緒にやってやりたい気分だった。

「さて、今日の作戦を伝えたいから体育倉庫に集まってもらえるかな」

みんなが一気に顔を真剣なものに変え、頷き体育倉庫に集合する。篁先生は作戦を知ったら面白くないと言ってついていた。そうして倉庫に集まり、いよいよ長谷川さんから今日の作戦が伝えられる。

……さて、今日の最初にして最大の難関が突破できるか試してみようか。

そして、今日の作戦のすべてを伝えコートに戻ると竹中と目が合

った。

「むぎむぎ負けにくるなんてな。逃げりゃあよかったのに」

「勝てる相手に逃げる理由なんてないわな」

しばらく2人でにらみ合っていると先に折れたのは竹中だった。

「ふん、どんな練習してたかしらねーけど叩きつぶしてやる」

「そっちこそ俺らの力をみせてやるよ、覚悟しとくんやな」

最後にそう言いやってそれぞれのベンチに向かう。ベンチに着くとこれからウォームアップを始めるところだった。10分くらいウォームアップを行い、10時になったので審判から集合がかかった。センターラインに選手が集合し、礼と握手をかわしいよいよ試合が始まる。

審判からジャンプボールの指示があり、ジャンパーとして立ったのは打ち合わせ通り智花だった。

「ふっ」

そんな呆れ笑いが相手チームから聞こえた。あきらかに愛莉じゃなくて安心した声だった。安心するのは早いんじゃないかな、カマキリさんよー。そしてボールが高く上げられ、最高点を超え少し落ちてきたところで先にボールに触れたのは智花だった。

<フェーズ1>

智花がはじいたボールはまっすぐ真帆のところにわたった。

「真帆っ」

「あいよっ」

すかさず智花にリターンする。そのままドリブルで敵陣まで乗り込んでいく。フリースローライン付近まで一気に踏破しストップする。

「いくよっ!」

そして放たれたのはシュートではなく、ふわりとしたパスだった。しかし、普通にジャンプしたんじゃ届かない高さの、だ。そしてこのコート内にただ1人だけ、このパスに対応できる選手がいる。

「は、はい」

そう、愛莉だ。練習通り、ゴール下まで走りこんでいた愛莉が高く上げた両手にパスがすんなり通る。そのままシュートし、無事に初得点は女バスが先制した。

「よし、予定通り！」

思わず、ガッツポーズをとるコーチ2人だった。隣を見るとカメラキリは口をあぐり開けていて、かなり驚いているようだった。驚いているのは男バス選手も同じらしく試合を再開させるも動きがぎこちなかった。当然、そんな隙を智花が見逃すはずもなくあっさりパスカットに成功し、さっきと同じように高いパスを愛莉に通し、またもやシュートを決める。

これで 4 対 0 になった。

「くそっ、1本だ。1本集中!!」

まだ驚きから回復していないだろうに、そこはさすがにキャプテンらしくチームを鼓舞する竹中。さて、今度はディフェンスだ。

この2日で教えたのはゾーンディフェンス『みたいな』ものだっ

た。真帆、紗季、ひなたでゴール下に三角形をつくり、フリースローラインとセンターラインの間あたりに愛莉が立つ。そして残った智花はと言うと……。

「4番OK」

「――湊」

そう竹中のマッチアップだ。1番やっかいな竹中だけは智花が責任もって抑え込む。そういうディフェンスだ。

無理に抜こうとして竹中がファウルをとられて、攻守交替。さつきとまったく同じことが繰り返されて、これで 6 対 0 になる。

「っしやー！ やるなアイリーン」

「すごいじゃない、愛莉」

自陣に戻る途中で真帆と紗季から賞賛の言葉をもらった愛莉は今まで見た中で一番いい笑顔だった。そしてここでタイムアウトを知らせるブザーが鳴った。もちろん男バス側のタイムアウトだ。それぞれの選手がベンチに戻ってくる。

「みんないい感じやで。次はさっき長谷川さんが言ってたように男

バスが動いたらフェーズ2やからな」

「了解。にひひ、ナツヒの驚く顔が楽しみだ」

戻ってきたみんなに長谷川さんの作戦の確認をすると、各々頷いてくれて真帆だけは悪戯っ子みたいな笑いをしていた。

「あ、あの長谷川さん。わたし、ちゃんとできてますか？　まだスモールフォワードでいられますか？」

「あ、ああ。よくがんばってるよ。その調子で頼むよ、愛莉」

若干バツが悪そうにした長谷川さんに気付かずに愛莉は嬉しそうな笑顔になった。愛莉が絶好調な理由、それがこれだった。

つまり俺たちは、試合前のミーティングでそれぞれのポジションを発表した時に愛莉にスモールフォワードと伝えたのだ。そう、愛莉にとって魅惑の言葉である『スモール』が含まれているポジションを。当然、愛莉はポジションの役割なんて知らないでどんなことをすればいいのか聞いてきた。そこで本当のスモールフォワードの仕事を教えずにセンターの仕事を教えた。しかも、無理そうだったらセンターに返るという忠告付きだった。背が一番高い人がセンターをやるというのは、今まで何回も言われてきてそれだけは知っていた愛莉はすごい食い付きでスモールフォワードの仕事を聞いてきてさっきの働きぶりという訳だった。

作戦は予想以上の成果を見せたけども、やっぱりウソについてい

るという罪悪感が消えない。試合が終わったらちゃんと謝ることを贖罪にして無理矢理納得する。

そうしてタイムアウトも終わり、男バスの攻撃から試合が再開になった。今度はあっさりとゴール下まで切り込まれ、そのままシュートを決められ4点差になる。そして、こっちの攻撃になり今まで通り愛莉がゴール下に走る。

「ひゃう?!」

すると、さっきのタイムアウトで指示があったのだろう。智花と愛莉にダブルチームでマークがついた。よし、長谷川さんの読み通りだ。なら作戦を次に移行させる。ボールを持っている智花にアイコンタクトを送ると智花も頷いてくれた。

<フェーズ2>

「いくよ、真帆」

「よっしゃー、まかせろ!」

今までと違って鋭いチェストパスが真帆に通った。パスを受けるなり、練習通りにシュートを打つ真帆。シュートはゴールに吸い込まれるように入った。

「うっし！ あゆむん、やったぜー」

そう言って、右手を突きだして喜ぶ真帆に、俺も右手を突きだして答える。教え子が活躍するのを見るのはやっぱり嬉しいものだ。そして再び男バスの攻撃になり、またシュートを決められすぐに点差を縮められた。

「マークは三沢につけ。あれはマグレじゃない！」

こっちの攻撃になるやカマキリから指示がとぶ。確かにマグレじゃない、この日の為に必死に練習したんだから。でも、必死に練習したのは1人じゃない。

「紗季！」

「はい……よっと」

マークが真帆についてフリーになった紗季に智花からパスが通り、紗季もきちんとシュートを決めた。

「そりゃ、真帆が1発でシュート決めたんやから外すわけにはいかんよな、紗季」

まるで「当り前よ」とでも言いたげな感じで自陣に戻ってくる紗季を見てポツリとつぶやく。

智花と愛莉にダブルチームをつけるのだから必然的に真帆か紗季のマークはいなくなる。そのスキについて智花がパスを出す。もしシビレを切らして2人にマークがつけば、ダブルチームから解放されたどちらかがシュートを決める。そうしてこちらは得点を重ねて行く。

逆に男バス側は、格下だと侮っていた女バスに劣勢なこと、エースの竹中が完全に抑えこまれていることで戸惑い、度々シュートを外していった。

そうして前半終了の合図があった時、女バスは 16 対 10
と6点のリードだった。

12. VS男バス（前半）（後書き）

ということで前半終了です。

引き続き後半も読んでいただけるとうれしいです。

13. VS男バス（後半）（前書き）

連続投稿です。

ほぼ原作通りの展開なのは勘弁してください。
それでは……どうぞ。

13. VS男バス(後半)

「にやはは、みんな絶好調じゃん！ いけるいける」

「みんな、やるやん。このまま男バスなんてやっちゃまえ」

「おう、まかせろ！ あたしのシュートがあれば余裕だね」

ハーフタイムになりベンチに戻ってきたみんなを、篁先生と一緒に
になって出迎える。みんなも6点差で勝っていることがよほど嬉しい
様子で、あたしのシュートがよかったとか、トモのパスがいいの
よとか、愛莉が頑張ってるとか、ワイワイと話していた。

そんな輪の中にいた俺はすっかり忘れてしまっていた。昨日の夜、
長谷川さんが前半で10点差は欲しいと言っていたことを……。

俺は気付けないでいた。今、長谷川さんがカマキリの方を気にし
て暗い表情になっていたことを……。

俺は気付くべきだった。今、みんなの息が異様に粗いことを……
……。

そして、後半戦がスタートした。

最初の1分程は前半と同じ展開になった。真帆、紗季、愛莉の3人で男バスのマークを翻弄し得点を重ねていった。点差は最大8点もついた。

……そして、それはやってきた。

まずは、愛莉に異変が現れた。オフエンス時にゴール下まで行くのが間に合わなくなってきたのだ。ローポストから締め出され、愛莉のシュートは打てなくなってしまうことが多くなる。

「長谷川さん……………」

その時になって、俺はやっと長谷川さんが言っていたもう1つの不安要素を思い出した。

それは『スタミナ切れ』だ。1週間の練習ではどうすることもできない問題だった。俺がコーチを引き受けてからランニングはやっていただけ、それでも足りない。しかも、みんなは真剣勝負の試合はこれが初めてだろう。そんな試合は練習と比べても消耗具合は段違いなはずだ。いくら普通より短い試合時間だからって、スタミナ切れを起こすのは必然だった。……くそっ、俺が忘れてなかったらハーフタイムにあんなに騒いだりせずにみんなを休憩に専念させてあげられたのにつ。

愛莉が激しく肩で息をするようになり、ゴール下で仕事ができなくなるダブルチームはすぐ解除された。そうして空いたマークは

当然、2つの砲台に使われた。まだ執拗につくマークを振り切つてまで打てる技術がない2人のシュートは目に見えて入らなくなった。マークを振り切ろうと無理に動き回ったせいだろう、ついに紗季も動きが鈍くなる。2人目のスタミナ切れだ。

こちらが1点も入れないうちに、相手は得点を重ね、ついには同点とされる。と、ここで長谷川さんがタイムアウトをとった。

「智花、フェーズ3だ。なるべくパスで時間を稼ぐんだ。30秒をもうくらいの感じで」

「でも、それだけじゃ！　せめて」

「……智花」

長谷川さんが戻ってきたみんなに指示を出していく。俺も長谷川さんが用意していた酸素ボンベをみんなに配りながら、励ましていく。

「大丈夫か真帆？　まだいけるか？」

「へへ、あたしを誰だと思ってるの。まだまだ楽勝だね」

「そんだけ威勢が良ければまだいけるな」

一目見て空元気だとわかる真帆の軽口に付き合って頭をなでてや

ると嬉しそうにするも、すぐに苦悶の表情に戻ってしまふ。

……あと少し頑張ってくれ。それまでの辛抱だ。

<フェーズ3>

タイム明けからは悲惨な状態だった。完全にバテてしまった真帆たちは、男バスが4本のシュートを決める間に1度もネットを揺らすことができなかった。

そして、男バスの5本目のシュートはリングにはじかれた。そのリバウンドをとったのは必死に走った愛莉だった。

「……とった」

目に涙を浮かべながらもリバウンドに成功した愛莉は最後の期待を込めてパスを出す。……我らがエース、湊智花に。

後半残り3分。この時間までは智花の個人技は封印し、パスやボール運びに専念すること。試合前に長谷川さんが智花に出した指示がこれだった。智花しかできる人がいないから仕方ないとは言え、本来は攻撃専門と言ってもいいくらいの勝ち気の強い智花がよくここまで我慢できたもんだ。でも、もういいんだ。ここからは思う存分見せつけてやれ！

愛莉からボールをもらった智花は、一瞬だけ時計を見て、長谷川さんが頷くのを確認すると、キッと視線を鋭くした。

ここからは智花の全力を解放。エースの時間だ。

<フェーズ4>

コート内に一陣の風が吹いた。1人、2人とディフェンスをもともせず抜き去り、あっという間にシュート決める。今までアシストに徹していて温存されていた智花のスピードに、疲れの見えてきている男バスはなすすべもなかった。

あまりのスピードに呆氣にとられていたのだろう、再開されてだされたパスは必要以上にゆるく、そして長くだされた。今の智花はそれすら見逃さず、すぐさまパスカットし攻めに回る。男バスもさすがに地区大会優勝だけあって戻りが速い。しかし、本気の智花はそのさらに上に行く。

「……マジかよ」

その光景を目の当たりにし、思わずそう呟いてしまった。智花のスリーポイントかという位置から放ったシュートはとても高く、とても柔らかい軌道で垂直にネットを揺らした。……おいおい俺ですらあんなところからあんな軌道で打つのは難しいんじゃないか？ 智花のシュートレンジはどれほどなんだ？

「おい、マーク外れたぞ。俺によこせ」

そう、智花が攻撃に専念するために竹中のマークが空いてしまうのがこの作戦の弱点。なら、その穴を埋めるのはこの子の仕事だ。

「おい、竹中いかせない」

ひなたが小さな体を精いっぱい広げて竹中の前に立ちはだかる。
竹中は予想通り躊躇するそぶりを見せる。

「タケ、いそげ！」

見かねたチームメイトからの声でドリブルでひなたを抜くべく脇を通り過ぎようとする竹中。

「あう」

「……あ」

抜かれる瞬間、ひなたが倒れ、それを見て竹中が立ち止まる。そしてホイッスルが鳴らされた。竹中のファウルだ。

「ホントにひっかったよ、あいつ」

もちろん本当にひなたがファウルをされたわけではない。わざと倒れこんでファウルに見せかけたただだ。これは対竹中専用ファウルトラップで、長谷川さんがこの1週間でひなたに教えたのはこの『敵の前で尻もちをつくこと』だけだった。俺は全然気付かなかったけど、竹中はひなたのことが好きらしく、そこを突いた作戦だった。

こちらのオフェンスになるが、男バス側はエースの失態に動揺していてスキだらけだったので、またもや一陣の風が吹きシュートを決める。これで2点差まで縮めたことになる。

パン

すると大きな音が体育館に響いた。竹中が自分の頬を勢いよく叩いた音だった。

「わりい。この借りは点をとって返す」

「頼んだぜ、エース」

……くそ、ひなたのファウルトラップはもう使えないか。竹中の目がそう言っていた。

それからは点を取って取られてのシーソーゲームだった。智花が

ダブルチームをものともせずシュートを決めれば、竹中がこちらのゾーンもどきのディフェンスを容易く突破し点を取る。点差が縮まらず時間だけが過ぎて行った。そうして我慢が出来なくなった智花が無茶を始める。オフENSEの手を緩めることなく、竹中のマツチアップもこなそうとしたのだ。つまりオールコートで竹中と1対1を仕掛けたのだ。

それが功を奏し、シーソーゲームが崩れたのは残り1分を切ったあたりだった。竹中からスティールを決めた智花がファウルをもらいつつもシュートを決め、バスケットカウントワンスローをもらう。気力でフリースローを決め、これで逆転に成功する。

女バス 31 対 30 男バス

しかし、智花もここまでだった。オールコートのせいで体力が底をつき、竹中についていけなくなったのだ。ただでさえこの試合で智花の負担は、想像を絶するほどに重かったに違いない。それに加え、最後にあのオールコートをやったのだから仕方ないことだった。

智花のマークも外れ、フリー同然になった竹中は、必死に追いつかるこちらのディフェンスをものともせずシュートを決め、再逆転される。

残り25秒。

最後のチャンス、と疲れ切った智花が攻撃を仕掛ける。智花も激しく肩で息をしているような状態だったが、他のみんなはもつと疲れているのだから智花にまかせるしかない。男バスもこれが最後の攻撃だと確信し、容赦なく智花を止めるべく手を打ってくる。すなわち、智花に対してトリプルチームを仕掛けてきたのだ。いかな智花とて、バテた今の状態ではボールをキープすることが精いっぱいだった。ゴール下はおろかスリーポイントラインより遠くに離された智花はなすすべもなく時間だけが過ぎて行った。

残り5秒。

「俺たちの勝ちだ。……湊！」

「私が負けるなんて……！！！」

竹中がトリプルチームの真ん中で勝ち誇った顔で智花に告げる。対する智花は最後の抵抗として、マークを外せていないままジャンプしボールを手放した。それはシュートと呼べないような軌跡を描き、宙を舞って……………。

13. VS男バス（後半）（後書き）

途中で終わってしまった感じですが原作を読んでもうの方はここで終わる意味をわかってくれるでしょうか？
感想をお待ちしております。

14. 決着、そして……（前書き）

原作9巻を読んでいたら更新が遅くなってしまいました。

いやはや原作を読んでいても、ここで歩が……とか考えてしまいました
すね（笑）

まあ、あそこまで行くとなるといつまでかかるかわかりませんが……。

とりあえず男バス編最後をお楽しみください。

それでは……どうぞ。

14. 決着、そして……

〃 交換日記（SNS） 〃

まほまほ「できた！　ここがきょーからあたしたちのにつきちようだ」

紗季「読みづらいからちゃんと変換しろ」

湊 智花「この度はこのような場所にお誘いいただきありがとうございます」

紗季「智ちゃん硬いつて。こんなの普段と同じように書けばいいよ」

まほまほ「アイリーン、ヒナもなんかかけー」

ひなた「ひなもいるよー」

紗季「その返しは変じゃない？　それと愛莉はもう少し待ってあげな。今、電話でやり方教えてるところだから」

まほまほ「なんだアイリーン、バスケだけじゃなくてキカイもよわいのか」

紗季「真帆、いい気になるなよ。今日の試合でそっちのチームが勝ったのは智ちゃんがいた」

からで、別に真帆の手柄じゃないからな」

まほまほ「そんなことねーよ。シュートもきめたもんね。ピンチのときは、あたしにくれたらぜっ

てーきめてやるからまかせろ！」

湊 智花「ふふ、わかったわ。じゃあ私がピンチの時は絶対真帆にパスするからお願いね」

あいり「かけてますか？」

紗季「これで全員そろったね。まあこれからこの5人で仲良くやっていきましょう。みんなよろしくね」

まほまほ「おー！　って、さきがしきんな」

湊 智花「おー！　こちらこそよろしく」

あいり「お、おー！　……これでいいのかな？」

まほまほ「ヒナ、ヒナもおーってやれ！　やればなんかたのしくなるから」

ひなた「おー？　おー。おー！」

残り25秒

「私が負けるなんて……………!!」

智花が放ったのはシュートだと誰もが思っていた。俺はもちろん、長谷川さんや男バスのやつらでさえもそう思っていたはずだ。なぜならボールを放った時の智花はしっかりとゴールを見据えていたのだから。しかもトリプルチームのせいで味方の位置なんてろくにつかめない様な状態なら、なおさらシュートしか選択肢がない。

「そんなの些細なことっ。だって今は、1人なんかじゃない!!」

そう言って智花は、やりきった表情をして自分の放ったボールを見ていた。智花が放ったボールはシュートと呼ぶにはおかしい軌跡を描いていた。

それは当然だろう、それはシュートではなかったのだから。

それはブロックをかわすためにシュートに見せかけたパスだったのだから。

智花にはわかったいたのだ。自分がピンチの時は助けてくれる人がいることを。

その子は必ずここにいることを。なぜならその子はそこからしかシュートを決めることができないのだから。

距離、3 m。角度、リングから右に45度。その位置に智花は何も確認せずにパスを出したのだった。

絶対にここにあの子がいると信じて……………。

「ハアハア、っしやーまかせろ!!」

疲れ切った体を無理やり動かし、パスが届くと同時にその場所にたどり着く。そしてラストシュートが——真帆の手から放たれた。ここまで来る時には足をもつれさせたりと、あんなに大変そうにしていたのにパスを受け取り、シュートを打つ時には疲れを感じさせない練習と全く同じフォームになっていた。まるで、5人……いや、俺や長谷川さん、篁先生を含めて8人の祈りを力に変えたみたい。に。まるで、俺との練習を体が覚えていたみたい……………。

ボールは往生際悪くリングで2回跳ねた後、ネットを揺らした。そして試合終了の笛が響きわたったのだった。

女バス 33 対 32 男バス

しばらくの間体育館は静寂に包まれた。誰もが状況を把握するのに時間を要したためだ。

「やっつたー!!!」

一番最初に声をあげたのは両手を力いっぱい広げた真帆だった。

「真帆ーっ!」

「ふう、勝ったのね」

「や、やったー!」

「おー。ひなたたちのかちー!」

智花、紗季、愛莉、ひなたと続いて、喜びをそれぞれコート上で抱き合ったりしながら噛みしめていく。俺はと言うと、もちろん嬉しくて今にも真帆たちのところにいって一緒に喜びを分かち合いたいと思っていたけど、ふと男バスが気になってそちらに目を向けてみた。すると、「ふう、やれやれ」といった感じで呆れ気味の竹中と目が合った。目が合ったのに気付くとプイッとそっぽを向いてベンチの方へ行ってしまった。……どうだ、すごかったやろ真帆たちは。なんて竹中に届くはずもないのに心の中でつぶやいていたので『それ』が近づいてくるのに気付かなかった。

「あゆむーん！！ やったよー！！！！」

「うわっ！」

興奮冷めやらぬ真帆が抱きついてきたのだった。

「あたしすごかったよね！！ あゆむんのおかげだよ！」

腕を首にまわしたままで、顔をこちらに向けた状態で真帆がそう言ってくる。そんな状態なので必然的に真帆の顔がものすごく近くて顔が赤くなってしまう。

「めっちゃめっちゃカッコ良かったで。真帆のガンバリの成果やな」

赤くなる顔はとりあえずほっておいて、そう答えつつ真帆の頭をなでる。すると真帆は、ヒマワリのような眩しいくらい笑顔を見せてくれた。

「おほん、そしてそのまま2人はキスでもするのかしら？」

紗季が突然話しかけてきて、反射的にお互い体を離す。

「そもそも、そんなことあるわけないだろ。こ、これはあれだ。あたしたちの勝利をあゆむんといっしょにだな……」

顔を真っ赤にした真帆が紗季に弁解？をしていた。そういう俺は今更さっきまでの体勢を思い出し、恥ずかしさでたまらなくなっていたので弁解すらできずにいた。

「はいはい、わかったから。それはそうと最後の整列があるから行くわよ、真帆」

まだあれこれと紗季に言っている真帆を連れて2人でセンターラインに向かっていく。後ろの長谷川さんと笹先生がやけにニヤニヤしているのは無視を決め込む。

そして、最後に一礼をして女バスの勝利で試合は終わったのだった。

「なんでって言われてもなー。あそこは絶対あたしにパスがくるってわかってたと言えないよ？　なーみんな？」

質問の意味がわからないと言うように首をかしげてしまう真帆は、みんなにも聞いてみた。

「確かにあそこは真帆にパスだと思ったわね」

「私も真帆ちゃんにパスだって思ってた」

「おー、ひなもわかった」

なんと、みんな真帆にパスするのがわかってたと言い始める。最後に智花の方に視線を向けると、

「シュートはトリプルチームのせいでも無理だったし、なら真帆にパスするのが当然かなって。だからあそこへパスをだしたし、確認する必要もなかったかな」

まだなんとなく腑に落ちないけども、これが真帆たちの絆の強さなんだと思うことにして納得する。

「は、長谷川さん、私はちゃんとスマールフォワードできてました

か？」

愛莉がオズオズとしながら長谷川さんに今日の仕事ぶりを聞いてきた。それを聞いた長谷川さんは俺の方に視線を向け、俺も頷き返す。そしておもむろに2人して席を立ち、愛莉のそばにいく。突然の行動に愛莉をはじめ、他のみんなも呆氣にとられていた。愛莉の目の前まで行くと最後に2人で頷きあい、そして……………。

「「ごめんなさい」」

2人同時に土下座した。

いきなり男2人に土下座され、アタフタする愛莉に本当のことを話していく。話していくにつれ、愛莉の目に涙がたまっていくのがわかった。

「やっぱり私にはセ、センターしか、デカ女専用のポジションしかできないんだー！」

いつかの時みたいに泣きじゃくる愛莉を長谷川さんがなだめにかかる。

「騙したことは悪かった。ごめん。でも背の高さは愛莉の素晴らしい魅力の1つなんだ。俺はわかってるから。愛莉が外見だけじゃな

く内面も繊細で可愛い女の子なんだって」

「は……長谷川さん……」

それを聞き、愛莉が頬を赤く染め、もじもじしだした。

「こ、これは急展開だわ」

「おにいちゃん、ひなはー？」

長谷川さんが愛莉を口説き文句スレスレで慰めているのを、俺はまだ土下座しながら聞いていた。なぜなら俺はその時真帆に「ウソツキ禁止ー」といわれながらボカボカと殴られている最中だったからだ。俺が殴られていることに紗季が気付いてくれ、真帆を止めてくれた。すると、ちょうどそこへいい匂いをさせる土鍋を持って七夕さんがやってきた。

「にぎやかねー。はい、お鍋できたわよー」

「おおー！」

真帆はあっさりと鍋の方へ興味をうつしてくれたので、俺もこれ幸いと便乗した。ちらりと長谷川さんの方を確認すると、頬を赤く染めてもじもじしている愛莉と、ほっぺたをプクーとふくらませて不機嫌顔の智花を相手に四苦八苦しているところだった。

お鍋の登場で、雰囲気がよくなりそこからはみんなでワイワイ騒ぎながら進んでいった。締め雑炊まで食べ、一息ついていたところで真帆が俺と長谷川さんを見ながら口を開いた。

「ねーねー、明日からはどんな練習するの？」

「それなんだけど俺はコーチを辞めようと思う」

「「「「「！！！！」」」」」」

突然の長谷川さんの告白に全員が驚きを隠せなかった。

「すばるんも一緒に守った場所なんだから最後まで責任とってコーチしてよ！」

「私からもお願いします。まだまだ昴さんからいろいろ教わりたいです」

みんなが長谷川さんの引きとめようと説得を始める。けど、長谷川さんの表情は硬いままだった。

「やっぱりみんなには俺なんかより、ちゃんとしたコーチから教えてもらった方がいいと思う。それに俺も、なんとなくやりたいことが見えてきた気がするんだ。だから……………ごめん」

そう言って謝る長谷川さんにみんなは掛ける言葉を見つけれないでいた。

「あゆむんは?! まさか、あゆむんまで辞めるとかいわないよね?!」

今まで黙って聞いていた俺に真帆がすごい剣幕で聞いてきた。俺はしばらく考えた後、出した答えを伝えるべくゆっくりと口を開いた……………。

そうして話し終わると、ちょうど簗先生がやってきたのでこの前と同じようにみんなを送っていてもらった。それにしても、簗先生がリビングに入ってきた時に背筋が凍るような感じがしたのは気のせいだったかな?

その後、長谷川さんが腹ごなしに1on1をしないかと言ってくれたので、今は喜んで相手をさせてもらっていたところだ。しかし

当然ながら、俺では到底長谷川さんにはかなわないので軽くあしらわれているような状態だ。

「ところでさっきのことだけど、歩までコーチを辞めなくてもよかったんじゃないのか？」

lon1の片手間だろう、長谷川さんがそんなことを聞いてきた。そう、俺はコーチの話を断った。なぜなら……………。

「長谷川さんが言ってた通り、真帆たちはちゃんとした人から教えてもらった方がいいですよ。……それにあんな熱い試合見せられたら、やっぱりやりたくなっちゃいますよ、バスケ」

「そっか」

そう言って笑いかけてくる長谷川さんに、俺は苦笑で返す。

「まあもつとも、やる場所が問題なんですけどね。これで男バスには入りづらくなっちゃいましたし、他のチームかなんかを探さないと、です」

「はは、確かに男バスには入りづらいわな」

2人で笑いあい、もうしばらくlon1を続けて俺も帰ることし

た。結局1on1では長谷川さんから1本もとれずに終わった。だから、プレイヤーとして長谷川さんを超えることを目標として頑張っていたこうと決めた。智花は目標というよりライバルって感じだからな。

途中、ふと上を見上げるときれいな満月がでていた。いつかの日みたいに手を握り締め、がんばるぞと気合いをいれてみるのだった。

その夜、隣の家から悲鳴が聞こえ続けていたことを、俺は知らなかった……。

14. 決着、そして……（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想を頂けたらうれしいです。

15. 告白？（前書き）

今回から球技大会編の始まりです。

でも、今回はラブ分多めの展開になっております。

真帆がちゃんとかわいく描けていればいいんですけどね……。
それでは……。どうぞ。

15. 告白？

〵 交換日記（SNS） 〵

まほまほ「だい1かいコーチごうだつだいさくせんのさくせんかいぎをはじめます」

紗季 「強奪って……あんた」

まほまほ「だって、やっぱコーチはあゆむんたちにしてほしいじゃん！」

あいり 「私も長谷川さんや歩君にコーチ続けてもらいたい」

ひなた 「おー、ひなもおにいちゃんたちがいい」

湊 智花「わ、私も長谷川さんと一緒に居たい」

紗季 「なんかトモのはニュアンスが違うような………まあいいわ。じゃあみんな」

なで2人をどう説得するか考えましょ」

まほまほ「だから、さいしょからさくせんかいぎだっていってんじやん。でも、やつ

ぱりここはいろじかけしかないっしょ。ということでアイリーン、ふたり

にむねをもませるんだ！」

あいり 「そ、そんなの無理だようう……」

まほまほ 「じゃあぎゃくに、ひんにゆうだいひょうのもっかんのむねで！」

湊 智花 「ふえ！！ わ、私？ でも私のじゃ2人とも喜んでくれないんじゃない……」

紗季 「トモ、どうせ冗談なんだからそんな真剣に悩まなくても大丈夫よ。ていう

か、胸の大きさならトモよりあんだの方が小さいんだから貧乳代表はあ

んたよ、真帆」

まほまほ 「あれはあゆむんたちにみてもらってないからノーカンだ。ということであ

たしはもっかんにまけてない」

ひなた 「おー？ ひなのですか？ ひななら2番」

紗季 「ひな、そんなこと簡単に言っちゃダメって前にも言われたでしょ。もう、こ

こじゃ埒があかないから明日学校で話しましょ」

劇的な勝利を収めた次の日、登校してきた俺は教室のドアの前で固まっていた。

「気まずい……」

コーチを辞めても当然、席は真帆と紗季の間なのは変わるはずもなく、どんな顔をしてみんなに会えばいいのかわからない。そんなことを考えて、かれこれ5分はドアの前で悩んでいた。

「まあコーチを辞めても友達まで辞めた訳やないから今までどおりに行こっ！」

なかば自分に無理やり言い聞かせて教室に突入する。

「——それじゃあ——かな？」

「お、おはよう」

「「「「——っ?！」」」」

ヒソヒソとなにやら固まって話していた真帆たちの後ろから挨拶

をただけで、みんなに飛び上がるんじゃないかと思うくらい驚か
れてしまった。

「歩、お、おはよう。今日はちよつと遅かったわね」

「ちょ、ちよつとヤボ用でね……」

最初に挨拶を返してくれた紗季とお互いにぎこちなさを残しつつ
も話していると、隣の真帆から落ち込んでいることがありありとわ
かる声で上目づかいで質問が来た。

「ねえ、あゆむん。やっぱりコーチ辞めちゃうの？」

「――っ。……昨日のみんなの試合を見て、やっぱり自分でバスケ
をしたって思っちゃったし、それで中途半端になってしまいうんな
ら辞めてしまったほうがいいとちゃうんかなって思うから……無理
やわ」

真帆の上目づかい攻撃に思いのほか動揺してしまったけど、正直
絶対聞かれるだろうと思っていたことだったので考えていた通りに
答えることができた。

「……ちっ。これでもダメか」

すると、後ろの紗季がなにやらブツブツ言っていたけども、聞こえるかどうかといったすごい小声だったので俺にはなんて言ったのかよくわからなかった。

「そうそう、智花にちょっと聞きたいんやけど、この辺で俺でも入れそうなクラブって知らんかな？」

「え？ う、うーんと。……ごめんなさい。私じゃわかんないよ。竹中君ならくわしいんじゃないかな？」

智花からアドバイスをもらいお礼を言って、早速竹中に聞きにいかうとすると、ちょうど簗先生が入ってきたので休み時間に聞きに行くことになった。

授業が終わるとすぐに俺はさっきのことを聞くべく竹中のところに行く。

「竹中、ちょっと聞きたいんやけどこの辺で俺にも入れそうなクラブって知らへん？」

「はあ？ お前、女バスのコーチはどうしたんだよ？」

当然の質問をしてくる竹中に、コーチを辞めた経緯を簡単に話して説明する。

「ふーん、まあ別にどうでもいいけど。でも、それならクラブじゃなくて男バスに入れよ」

確かに竹中にはあんまり関係ないことだけ言い方がなんかムカつく。なんてことを思っていると意外なことを言われてしまっただけで驚いてしまう。

「え？ 俺が入ってもいいん？」

「確かに昨日の試合に負けたのは悔しいけど、それだからって別にお前に恨みを持つ様なやつはいねーよ。……むしろ俺はたった2週間足らずで真帆たちをあそこまで仕上げたことにすごいと思うよ。……ま、まあ本気で考えてるなら俺から先生に言っというてやるけど？」

途中声が小さくなりよく聞こえなかったけど、最後の竹中の申し出はありがたかったので打診をお願いして、ちょうどチャイムが鳴り先生が入ってきたので席に戻ることにした。

あたしは休み時間になるなりナツヒのところへ行くあゆむんが十分離れたことを確認してから、もっかんを叱るために後ろの席に話しかける。

「もっかん！ なにアドバイスしてるんだよー。あゆむん、ナツヒのところに行っちゃたじゃんか」

「ご、ごめんなさい。だって突然だったから、つい……」

ナツヒのところでは話をしているかすごい気になるけど、ここからじゃ微妙に距離があって聞き取れない。

「そんなにトモを責めないの。元はと言えば真帆が一発で説得できてたらよかったんだし」

「う、うっさいなー。ああいうのはヒナの方が得意なのになんであたしなんだよ」

そう、朝の上目づかい作戦はもととヒナが試す作戦だったのに、紗季がいきなりあたしにやれとか言い出して結局あたしがやる羽目になったのだった。

「だって、歩にはひなの無垢なる魔性は効いても一時的だろうし。」

それにもし、ずっと効くようなことになったらまずいいじゃない、
…ねえ？」

「な、なんでそこであたしを見るんだよ。べ、べつにあたしには関係ねーし」

妙にニヤニヤしている紗季を無視して、次の作戦の相談を始める。

「じゃあさ、次はどんなので行く？ いいアイデアない？」

早く説得しないとあゆむんが本気でクラブに入ってしまうという焦りから、つい急がすような口調になってしまう。

「おー？ ならひなのコアラアタックでノックアウト？」

「それじゃあ脅迫になっちゃうよ」

ヒナがいかにもヒナらしい提案を出すけど、もっかんに却下されてしまう。あたしはそれもいいかなって思ったんだけどな……。

「じゃあもっかん、なんかない？」

「うーんど。……やっぱりバスケットで勝負……とか？」

もっかんに聞くと、あたしも考えたバスケット勝負を提案してきた。けど、それは朝に紗季と話してたときに却下されたんだよね。

「バスケット勝負だと歩は乗ってこないんじゃないかしら。トモ以外に歩に勝てるのはいないし、トモは歩よりうまいんだから歩がコーチをやりたいと思ってない限り難しいと思うわね」

と、こんなふうだね。もっかんが「そんなことないよ。歩君は上手だよ」なんて言ってるけど、ありゃあケンソンだな。

「じゃあ次、アイリーン」

「え、えーと。プレゼントをあげるっていうのはどうかな？」

なんというかこれもアイリーンらしいアイデアだな。……プレゼントかーなにがいいかなー？

……さてよ、あれなら……でも恥ずかしいな……うまくできるかもわからないし……でも喜んでくれるかな。

「どうしたのよ真帆。1人百面相してコロコロ顔変えて、おかしくなった？」

「ふっふー。あたし思いついたもんね。そうと決まれば準備、

準備」

s i d e
o u t

そして放課後になり、俺は帰るために昇降口までやってきていた。靴箱を開けると、俺の靴の上にちよこんと小さな手紙が乗せてあった。

「なんや、これ？」

まさかラブレターか?! なんて甘い幻想を抱くこともせず、差出人を見るために裏返してみる。するとそこには、いかにも急いで書きましたという感じで『三沢 真帆』と書かれていた。

「真帆から? なんやろ?」

差出人は手紙なんて書くようなイメージが全くない真帆からだった。真帆からということ、中身はコーチを続けてほしいとか、そういうのだろうと思って手紙を読んでみると、書かれていた内容はもっと簡単なものだった。

『今日の18時に教室に来てください』

三沢真帆より』

ここにきてようやく、まさかホントに告白なのか、という考えが頭をよぎるが努めて考えないようにした。今それを考えたら、どんな顔をして会えばいいのかわからなくなるし、なんか取り乱してしまいそうになるのが目に見えている。

現在時刻、16・47。

手紙の時間まで約1時間もあるので、時間をつぶすために歩きだす。無意識に体育館の方へ行こうとする自分に気付き、苦笑を浮かべてこのやたら広い学校を探検するべく歩く向きを変えるのだった。

そして約束の18時の5分前。我らが6年C組の教室に、半分開きっぱなしになっていた扉から入る。すると、いつもの窓際の席に腰かけて片肘をついて、哀愁漂う感じで窓の外を見ている真帆の姿があった。もしかしたら他のみんなもいるかなと思っていただけ、

それらしい姿は見当たらなかった。

窓際に座っているおかげで、真帆のサラサラした髪の毛のツインテールが夕陽の光をあびてキラキラと輝いていた。普段見せることのない落ち着いた雰囲気と相まって、一瞬ドキッとしてしまう。

「あゆむん！」

俺が来たことに気付いて、真帆はパタパタと駆け寄ってくる。俺も真帆の近くに行くために教室を進んでいたのも、ちょうど真ん中の教卓の前で向き合う形になった。

「で、来たけど、どうしたん？」

「え、えとね……。用事っていうのは……」

話せる距離に近づいたので呼び出しの理由を訊ねると、真帆はそう言っただけ俯いてしまった。いつも元気一杯で、はつきりとしやべる真帆にしては珍しい反応だった。両手を後ろで組んで妙にモジモジしているし、俯いているせいで顔は見えないけど耳まで真っ赤に見えるのは夕日に照らされているから、だけではないようだ。

もしかして、もしかするのかな……。なんて考えが脳裏をよぎり、俺まで緊張してきてしまう。

「……やっぱり、あゆむんにコーチを続けてほしいってお願いしたくて」

「……なんや、やっぱりそれか。何回も誘ってくれるのは嬉しいし、別にコーチするのが嫌になった訳じゃないけど、今はまだ返事はかわらんよ?」

体感的には1分にも感じた5秒ほどの沈黙の後に俯いたままの真帆が紡いだ言葉は、甘い幻想通りではもちろんなく、やはりというべきコーチ復帰へのお願いだった。現状、選手としてがんばってみたい気持ちが強いので、心苦しく感じながらも断ることを告げる。すると、弾かれたように顔をあげた真帆が放った次の言葉は、俺の思考回路をショートさせるのに十分だった。

「あたしの……女の子にとって大切なものをあげるって言っても?」

「……………へ?」

なにを言われたか理解するのに一瞬では足りなかった。音としては脳に届いているけど意味までは認識できていない、そんな感じになっってしまう。

「…………た、大切なものって?」

ようやく理解が追いついてきたところで新たな疑問がでてくる。
それは『大切なもの』がなにを指すのか、ということだ。この雰囲気と言う『大切なもの』といえは、……まさかキ――。

「あ、あたしも初めて……だし、うまくで、できるか心配だったけど……ううう。そ、それともあたしのじゃ……いや？」

俺の質問には若干的外れな答えだったけど、俺の混乱に拍車をかけるのには十分だった。真帆は、もうこれ以上赤くならないんじゃないかというほど顔を赤くし、最後の方ではうるんだ瞳で見上げてくるし、ほのかに甘いい匂いもしてきたので、俺の頭はパニック状態だ。

「お、俺も初めてやからお、お互いさまやし。俺は真帆がいいなら、というか、真帆がいい、というか……」

自分でもなにを言っているのかわからないほど、俺はゆでだこ状態になってしまっていた。2人でオロオロしていると、真帆がついに俺を見つめる瞳に決意を灯して口を開いた。

「じゃあ、受け取って……！ あたしの初めての………手作
りチョコ！」

「……………チョコ？」

そうして真帆が俺の目の前に差し出したのは、手のひらサイズのかわいくラッピングされた袋だった。ポカーンと口をあけて間拔けな顔をしている俺に気付かずに、真帆は1人で話続ける。

「お菓子なんて作ったの初めてだし、やんばるに教えてもらいながらだけど1人で作ったから、うまくできてないかもだけど……。でも、あたしの好きな味にしたし、おいしいはずだから……。もらって！！」

「えっと、女の子にとって大切なものって……。これ？」

やっと話せるくらいまで回復した俺は、思わず真帆に聞き返していた。

「ん？　そうだよ。だって、お菓子は女の子の必須アイテムだもん」

なにを言ってるの？ 的に首を傾げる真帆を見て、俺は1人で盛大に勘違いしていたことにやっと気付いた。膝から崩れ落ちそうになるのをなんとかこらえるけどもさっきまでとは違う意味で、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になってしまう。

「ちょ……………そんなに押さないでよっ」

ドタタタタ

ドアの方からなにかが倒れた音がして振り返ってみると、他の女バスの面々が折り重なった状態で倒れていた。

「ハハハ…………お邪魔します。で、受け取るの？ 受け取らないの？」

1番下の紗季が苦笑しながらも、なにかつつこまれる前にと俺に真帆への返答を迫ってくる。すると、上の他のメンバーも口々にしゃべり始めた。

「そうだよ。私たちは歩君にもコーチを続けてもらいたいって思ってるんだよ？」

「おー。あゆむー、チョコはだいじー」

「わ、わたしも長谷川さんと一緒にコーチを続けてくれたらうれし
いな」

みんなの声を聞き、改めて真帆の方に視線を戻す。

「そ、それで、もらってくれる？」

改めて心配そうに聞いてくる真帆に、俺はにっこり笑って今決めたことを告げる。

「ああ、もらうよ。ありがとう」

「!! じゃあ……」

俺が受け取ることを伝えると、真帆はパーと今までの曇っていた顔を一変させて、いつもの元気な明るい笑顔になった。

「ここまでみんなに思ってもらってるなら、やらんなんて言えんよ。でも、選手としてもがんばってみたい気持ちは変わらんから、それでもいいかな？」

「それでもいいよ! あったりまえじゃん!!」

「じゃあこちらこそ、これからよろしくお願いします」

真帆からチョコの入った袋を受け取りつつ、コーチを続けさせてもらうことを一礼してお願いした。

「どうやらうまくいったみたいだし、私たちはさっさと帰りましょうか？」

「まあ、待ちーや」

立ち上がった紗季が智花たちを連れて帰ろうとするのを見逃すほど、今の俺はお人好しではない。帰るのを阻止するために紗季の肩をしっかりと掴む。

「どこから見てたか、ゆっくり吐いてもらうか」

「ハハハ、やっぱり？」

低くドスのきいた声を出して迫る俺に、紗季は引きつった顔をした。見ると他の2人も苦笑いしていて、ひなただけはいつも通りのほほんとした顔だった。

入口付近でそんなことをやっている俺たちから離れて、真帆はまだ頬をちよっと赤く染めて教卓の前に立っていた。

「今日はチョコだったけどいつか、きつと……」

真帆がポツリとつぶやいた一言は誰にも聞かれることもなく、入口付近の喧騒にまぎれたのだった。

その日の夜、園田家では激辛チョコという世にも不思議なものを食べた俺の絶叫が響き渡ったのだった。

15. 告白? (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

早々にコーチに復帰した歩ですけど、男バスにも入部させようかなとも考えています。

そこで、選手として頑張る歩を描くためにバスケット初心者の作者にも参考になるようなマンガや小説を教えてもらえないでしょうか？

友達からは、言わずもがなの『スラムダンク』、それと『あひるの空』なんかがいいんじゃないかと進められています。

他にも参考にできそうなオススメがあれば教えてもらえるとありがたいです。

では、感想ともどもお待ちしております。

16. とある休日の過ごし方（前編）（前書き）

ロウきゅーぶのPSP買ってしまいました……。

当分更新が遅れてたらすいません……。

まだ合宿にもいかない展開ですけど、本編ではスルーされてたGW中の日常を書いてみました。

それでは……どうぞ。

16. とある休日の過ごし方（前編）

（ ） 交換日記（SNS） （ ）

紗季 「歩がコーチ続けてくれる気になってくれてよかったわね、真帆」

まほまほ 「ほんと、めちゃくちゃはずかしかったんだからな」

あいり 「みてただけなのにあたしもすごくドキドキしちゃった」

紗季 「ところであんた、あのチョコ、自分好みの味にしたって言ってたけど」

ど何味にしたのよ？」

まほまほ 「そりゃあもちろん、とうがらしたつぷりのげきからチョコだってば」

ひなた 「おー？ チョコなのに辛い？」

湊 智花 「ハハハ、……………大丈夫かな、歩君」

真帆からのありがたい贈り物をもらってから数日が経ち、今日は5月3日すなわちゴールデンウィーク初日である。

俺は朝日と言うには若干高くなりすぎている太陽の光をあびて目を覚ました。半分覚醒した頭で枕元の時計を見ると10…52を指していた。連休初日とはいえいつもに比べるとかなりの寝坊だ。

「ふあああ。起きるかー」

まだ重い瞼をこすりながら机の上に置いてある携帯に目を向けるとメール受信のランプが光っていた。

「メール？ 誰からやろ」

なにげなく見たメールの内容は、昼からの予定を決定づけるものだった。

ピ。ピ。ピ。

「う、うーん」

7時にセットしいる目覚まし時計の音で目を覚ます。鹿威しの、……カコン……カコンと一定のリズムで響く音以外聞こえるものがない静寂な朝の庭にでて、深呼吸を1つ。そうすることでスッキリと眠気を払うことができる、いつもの日課をこなす。

「おはよう、智花。今日も朝から練習かしら？　なら、ご飯はたくさん食べるわね」

「おはよう、お母さん。うん、今からランニングにいきます。ご飯は帰ってきてから食べるから、たくさんでお願いね」

途中でお母さんに会って、顔を洗ってジャージに着替え、朝練のランニングをやるために走り出す。

男バスとの試合に勝ったあの日から、私は朝に長谷川さんのお家にお邪魔するのを辞めていた。もちろん、すぐく行きたいとは思っているのだけれども、コーチに教えを請うという大義名分をなくした私なんかが行ってもいいのかわからない。けれどみんなと

話した結果、明後日からまた昴さんのお家に朝からお邪魔することを決めていた。……そう、コーチ復帰をお願いするのに賭けを持ちかけるために。

シュート連続50本成功。

それが昴さんに持ちかける賭けの内容だった。正直、今の私じゃ達成できるかどうか怪しい、という内容だったのだけれど、真帆も頑張って(?)歩君を説得したんだから私が諦めるわけにはいかないよね。なにより、私自身が昴さんにコーチを続けてもらいたいと強く思っているのだから諦めるつもりもないんだけど……。何日かかってでも達成させるつもりでいる。

「でも、なるべく早く成功しなくちゃ、だからいっぱい練習しなくちゃいけないよね」

そう思うのとは裏腹に今日の午前中はお稽古の予定が入っちゃってるから、あんまり練習できないんだよね。お父さんの茶道と、お母さんの舞踊があるから練習は昼からになっちゃうな。

「智花ー、帰ってきたなら早くご飯食べちゃいなさい。お父さんが呼んでたわよ」

「はーい」

帰ってくるなりお母さんからそう言われ、朝食を素早く済まして

(でも、しっかりとご飯はおかわりした) お父さんの待つ茶室へと急ぐ。それが終わると、次はお母さんの日本舞踊の稽古が始まった。

だから、私が『それ』に気付いたのはお母さんの稽古が終わって一息ついていたら時だった。

side 紗季

私の朝は結構早い。たとえ休みの日でも6時には起きる。いえ、休みの日だからこそ6時に起きないと間に合わない。店の、我が家『なが塚』の仕込みはもっぱら私とお父さんでやってるようなものだもん。

「紗季ー、裏行ってえびとか、5つ持ってきていてくれ」

「わかったわ」

私はそれまでやっていた山芋の仕込みを中断させて、早速お父さんから頼まれたものを取りに行く。お父さんは相変わらずの手際の良さで次々と仕込みを終わらせていく。

お母さんと言えばこの時間はひたすらキャベツの千切りをやっている。普段は自分の足に躓いて転んじゃうような人だけど、キャ

ベツの千切りだけはめっちゃ上手なのよね。いつもニコニコと笑ってるお母さんが無表情に黙々とキャベツの千切りをやっているってかなり不気味なんだけどね。

「あら？ これじゃキャベツまだ足りないわね。とってこないと」

お母さんがそう言って私の後ろにある冷蔵庫に行こうとする。私は経験からくる直感でサッと体を避ける。

「ふにゃん！」

間髪いれず、お母さんが転んだ。

「亜季……」

「お母さん……」

お父さんと2人同時にため息をつく。いつものこととはいえ、これをお客さんの前でもやるのだからほんと勘弁してほしい。

「あいたたたた……」

起き上がりつつ、鼻を抑えているお母さんを見て私はいつも思う。
このドジっぷりが遺伝しなくてよかった、と。

『ピロリロリン』

そんないつものやり取りを交えつつ、仕込みも順調に終わったころ、私の携帯からメールの受信を知らせる着信になった。

「メール？ 誰からかしら？」

side ひなた

コンコン

「姉様？ 起きてください。もう10時ですよー」

「んー？」

なんだか外がさわがしい。でも、ひなはまだねむいのでおやすみなさーい。

コンコン

「姉様？ ……もう、入りますからね？」

ガチャとドアがひらく音がして人が入ってくるかんじがした。

「もう、やっぱりまだ寝てらしたんですね。そろそろ起きてください」

ユサユサとゆすられるのといっしょに、近くからかげの声がする。

「ぶー、ひなはまだねむいのです。なのでまだおきないのです」

「またそんなこと言って、姉さまは。あまり私を困らせないでください」

かげがあきらめずにひなのことをゆすってくる。……まだねむいけど、これはこれできもちいいかも。なんて思っていると、ひなのけいたいさんがブーブーと音をたててふるえはじめた。

「ほら、メールきてますよ。起きて、見ないと」

「ぶー、かげ、よんで」

ふとんからでるのがいやだから、かげによんでもらうことにする。

「もう、しかたないですね。……えーと、読みますよ?」

Side 愛莉

「はーい、みんな。ごはんですよー」

一通り掃除の終わった水槽にみんな（私の飼っている熱帯魚）を移して餌をあげる。我先にとあげた餌に飛びつくみんなを見て、思わず笑ってしまう。

私の休日は、まずこの子たちの水槽の掃除から始まることが多い。今日は連休初日ということでもいつもよりも丁寧に掃除をしてあげたので、ピカピカなお家になってみんな嬉しそうだった。

「ジムが使えるのは夕方くらいからだから、ひとまずは走ってこよ

うかな……」

この前の試合でも私が1番最初にバテちゃったから、もっと体力
つけなきゃ。早速ジャージに着替え玄関に向かう。

「あ、愛莉？　どっかでかけるのか？」

「お、お兄ちゃんっ?!」

玄関で靴を履いていると後ろからお兄ちゃんに話しかけられた。
思わず体がビクッてなってしまう。

「い、行ってきます」

まだ靴もちゃんと履けてないのに玄関を飛び出す。ドアを後ろ手
で乱暴に閉めた私は、ちよっと走ってすぐ立ち止まった。

「ううう。また逃げちゃった。私って嫌な子だな……」

家の方へ振り返り、あんな態度を見せてしまっただけで、
どうして私ってこうなんだろう、と自分が嫌になってきてしまう。

昔みたいに仲良くしたいんだけど……、と落ち込んでいるとポケットに入れている携帯が鳴ったので、とりあえず見てみる。

「メール？ 真帆ちゃんから？」

side 真帆

「これで、ラストっと」

いつもの朝のシュート練習200本を済ませて一息つく。すると、近くで控えてたやんばるが近づいてくる。

「お疲れ様です、真帆様。お水とタオルです。どうぞ」

「お、サンキュー」

やんばるから水とタオルを受け取りながら、ふとゴールの方を見上げた。

「しかし、他のところからも打てるようにならないとなー」

今日も試しにフリースローのところからもやってみたけど、やっぱりうまくいかなかったんだよね。今度、あゆむんに教えてもらわないとな。

「でしたらまた、あゆむん様をお呼びして『2人つきり』で秘密特訓すればよろしいのでは？」

ちようにど考えていたことをやんばるに言われてしまう。

「そうだよねー。ちようにどもうすぐ球技大会だし、今年こそD組に勝つためにまた特訓しないと」

あたしが、フンっと両手を握りしめて気合いを入れていると、前に居るやんばるはどこか、期待していた反応を見れなかったことを残念に思っているような顔で落ち込んでいた。

「まあそれはともかく、これからのご予定はいかがなさいますか？」

やんばるが落ち込んでいたのも一瞬で、すぐに立ち直ったらしく今日の予定を聞いてくる。

「うーん、どうしょっかなー？」

朝練も終わったし、とくにこれといってやりたいこともないんだよねー。みんなはなにしてるかなー。と、考えているとピンときた。

「そうだ！ やんばる、昼からはあたし、出かけるから」

「了解しました」

そうと決まれば早速みんなに連絡しないと。そうして携帯を取り出し、メールを一斉送信したのだった。

『おはよー、ってもうこんにちわかな。ゴールデンウィークしよにち、みんななにしてる？ ヒマしてる？ ヒマしてるよね？ っていう訳でみんなであそぼーよ。えきまえのふんすいに13じしゅうごうね。みんなちこくしないように！！』

まほまほ』

16. とある休日の過ごし方（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

後編はなるべく早く更新したいと思いますがゲームの進捗具合によりますね……。

バスケの参考になるマンガもまだまだ募集中ですのでよろしく願います。

17. とある休日の過ごし方（後編）（前書き）

やっと後編の更新です。

もつというろいろ遊んでいるところを描きたかったですけど尺的に無理でしたね……。

それでは……どうぞ。

17. とある休日の過ごし方（後編）

〃 ガールズトーク（噴水前にて） 〃

まほまほ「おい、アイリーン！ こっちこっち」

あいり「あ、真帆ちゃん。良かったすぐ見つかった。私が最後？」

ひなた「おー？ あゆむーがまだだよ」

湊 智花「と、言ってもまだ1時まで10分あるから、もうすぐ来るんじゃないかな」

いかな？」

紗季「このバカがなんにも確認せずに、いきなりあんなメール送ってくる」

もんだから多少遅れても仕方ないわよ」

まほまほ「なんだよー。別にいますぐ来っていうメールじゃなかったじゃ

ん。それに結局みんな来れるんだからブツブツ言うなよ

ー」

あいり「あつ、歩君来たみたい」

約束の5分前に噴水の前に行くと、もう既に他のみんなは揃っていた。

「遅いぞ、あゆむん。罰としてみんなにジュースを奢るように」

「いやいや、1時にまだなってへんやん。遅刻じゃないって」

「1番遅かったらダメなの」

着いて早々、開口一番に真帆が実に理不尽なことを言ってくる。
まるで某ラノベの団長みたいだ。

「バカなこと言っていないで行くわよ。歩も真に受けなくていいわよ」

紗季がそう言ってくれど、真帆も遅刻を怒っていた顔を笑顔に変えた。

「あはは、この前見たアニメでやったのを言ってみたかったんだ。
じゃあ、あたしたちも行こ、あゆむん」

そうして俺たちが向かったのは、駅のすぐ隣にあるアミューズメント施設『オールグリーン』。ここはカラオケ、ボーリング、ゲームセンター、その他もろもろ、と遊ぶ施設がたくさんあり、このあたりの子が遊ぶといったらここを選ぶ、とは先頭をズンズン歩いている紗季の言葉である。

「今日は屋上で面白そうなイベントをやってるみたいだから行ってみましょ」

1階の掲示板のところでチラシを見ていた紗季が、みんなを連れてエレベーターへ向かう。俺は屋上で一体なにがあるんだろうと不思議に思い、紗季が見ていたチラシを見ようと掲示板に近づいてみた。すると、ちょうどエレベーターが来たらしく真帆が大きな声で俺を呼ぶ声が聞こえた。急いでエレベーターに向かう時にチラリと見てみるとそこには『バスケ』の3文字があった……ような気がした。

そうして屋上に着いた俺たちを出迎えてくれたのは、やたらと元気な司会の人の声だった。

『さあ！！ 本日開催のイベント、バスケ企画第2弾『バスケビン

ゴ』。今回は私たちも頑張りました。特製ゴールを使ったこの企画。3×3に並んだゴールに4回のシュートで縦、横、斜めのいずれか1列に揃えることができれば景品GET!! 今までまだ成功者は高校生1人だけという難しさ。腕に覚えがある方、彼女にいいところを見せたい彼氏など、ふるってご参加ください』

紗季の言っていた面白そうなイベントってこれのことかー、と思ってゴールの方を見てみると確かに、ゴールが9つ付いていて、3段のうち1番下がミニバスの高さ、1番上が普通の高さ、真ん中がその中間といった具合だ。ちなみにゴールにはそれぞれ上段左から1番、2番、3番、中段に4、5、6番、下段に7、8、9番と番号がふつてある。2番のゴールが高さと位置が普通のゴールと同じになっている。

「おっしやー、あたしたちもやろうよ!」

「まあ、初めからそのつもりでここに来てるんだし」

「おー、ひなもがんばる」

初めにこういうイベントが好きそうな真帆が、続いてチラシでこれを知っていた紗季が、さらに正直ボールが届くかすら怪しいひなも参加を決める。

「どれを狙えばいいのかな? やっぱり真ん中?」

「あ、あんまりシュートの練習はしてないけど私もやってみようかな」

やる気満々の様子で攻略法を考えている智花に、参加するの意味があると思っていそうな愛莉が続いて参加を決める。俺も、もちろん面白そうなので参加することを決めていたけど、何となく言いそびれて黙っていると紗季が近づいてきた。

「歩も参加しなさいよ。スパッと成功させて良いところ見せたらいいじゃない」

「そんなん考えなくても面白そうやからやるよ」

妙にニヤニヤして言うてくる紗季に若干きつめに聞こえるように返事をする。ここで「誰にだよ」と聞こうものならさらにめんどくさいことになるのは目に見えている。

みんな参加することに決まったのでコートのある受付に向かう。

『おおっと、ここでなんともかわいい参加者の登場です。なににな、えー六人とも小学6年生とのことですが中々侮れません。この子たちは全員バスケット部ということで、もしかするともしかするかもしれない。しかし、女の子5人に囲まれてうらやましい限りの黒一点ですね。両手に花どころかハーレムですね』

受付を済ましてコートに入ると司会の人が登場を盛り上げるために紹介を始めた。黒一点とかかなり恥ずかしいし、ちょっと気にしてるんだからそつとしという欲しかった……………。

「じゃあ誰から行く？」

「はいはい。あたし行きたい」

気を取り直して、順番を決めてなかったのでみんなを見ながらきいてみると、案の定真帆がピョンピョン跳ねて名乗りでる。

『まずは元気いっぱい三沢真帆さんの挑戦です。一番手でいきなりの成功なるか!!』

この企画はフリースローラインからシュートを打つので、真帆が得意とする位置ではないけどフォーム自体は変わらないのだから、位置の違いをうまく補正できるかがカギになる。

「真帆ー、ガンバレー」

「真帆ちゃん、ファイトー」

真帆がシュート位置に移動すると、智花や愛莉をはじめ周りのお

客さんからも声援がきた。それに手を振って応えた後、ボールを2、3回ついて集中する。

そうして放たれた1投目はしっかりと練習通りのフォームで放たれ、1番のゴールに見事決まった。

「おっしゃー、やっぱあたしって天才」

狙い通りの位置に決まったらしく、ガッツポーズをして真帆が喜んでいる。

それにしても、たぶん真帆にとっていつもと高さも違うし、向きも違って狙いにくい1番から狙って決めるなんて、やっぱり勝負強さはすごいな。まあ本人はきっとそんなことは考えてなくて、ただ単に1番だから1番最初に狙っただけなんだろうけど……。

「その調子よー真帆」

「おー、まほ、がんばれー」

紗季やひなた達からの声援を受け、続く2投目は6番のリングに跳ねるものなんとか決まった。

「お、おっしゃー。真ん中狙ったんだけどまあいいや」

どうやら5番狙いだったらしいが右にズレて6番に入っただけ。おしくもリーチにならずで3投目に賭けることになった。

後がなくなった3投目。これも5番のリングに弾かれるも8番のゴールに偶然入った。けど、この時点でビンゴの可能性はなくなってしまう。みんなや周囲からため息がこぼれた。チャレンジは失敗が決まってしまったけど、最後まで投げるルールらしく真帆は4投目を投げるために位置につく。

周囲はすでに興味を失くし、俺しか見ていない中、それでもめげずにやるからには決める、という眼でゴールを見つめ、投げた4投目は見事5番のゴールを揺らすことに成功した。

「ちえー、あとちょっとだったのに。あそこからも練習してたからいけると思ったのになー」

真帆は4本全部決めたのに不貞腐れながら戻ってきた。

「でも、4本とも全部決めるなんてすごいよ、真帆」

「そ、そうだよ。お疲れさま、真帆ちゃん」

智花と愛莉が真帆を励ましているそばを、次の挑戦者の紗季が通る。

「まああんたにしてはよくやったじゃない。私が仇をとってきてあげるわよ」

紗季が褒めてるのか貶してるのかわからないことを言って、ボールを持った司会の人のところへ向かう。

威勢よく向かっていった紗季だったけど結果は、3番と6番、8番に入っただけでチャレンジ失敗に終わった。続いて、愛莉とひなたもチャレンジするけど、この前の練習であまりシュート練習をしていない2人は2本決めて終了となった。

「ううう、こんなはずじゃ……」

「ぶー、むねん」

「やっぱり、わたしには難しかったよ」

真帆が自分より成績が悪かった紗季を指差して笑っていたり、愛莉やひなたが「惜しかったねー」と慰めあっていると、いよいよ我らがエースの番になった。

「じゃあ、私行ってくるね」

「おう、もっかん。あたしたちの仇をとってきてくれー」

みんなの声援に手を振って応えてポジションにつく智花は、ボールを受け取る時にはバスケをする時の真剣な顔に変っていた。

「智花ちゃん、ガンバレー」

「トモ、決めちゃえー」

声援を受けながら放った1投目は危なげなく2番に決まった。

「よしっ！ 狙い通り」

2番に無事決めた智花は小さくガッツポーズをして喜んでいる。でもまあ、智花の実力ならこれくらいは簡単なはずだ。それで智花が俺と同じように考えてるなら、次に狙うのは……。

続く2投目は、8番のリングに弾かれ惜しくもリーチにはならなかった。

「あーあ、やっぱ、もっかんでも無理なのかなー」

「おー？　ともかもむり？」

2投目を外してしまったので真帆がそんなことを言い始める。

けどそれは間違いのはずだ。おそらく、あれで試したんだろう。いつもと距離が違う5番と8番への力加減を……。俺も全く同じことを考えていたので、そうだという確信がある。

距離をしつかり覚えたであろう3投目は、狙い変わらず8番のゴールを射抜いた。

「おっしゃー、これでリーチだ」

真帆の言うとおり、最後の4投目を5番に入ればチャレンジ成功となる。智花の実力なら、ほぼ確実に決めることができるだろう。けど、ボールを受け取った智花は緊張しているのか、なかなかシュートを打てないでいた。チラチラと紗季や俺、真帆を見てなにか迷っているそぶりを見せている。

しばらく迷っている様子だったけども、なにかを決めたのかゴールを見据えて構えをとった。

そうして放たれた4投目は、いつもより高い弧を描いていた。そ

して、向かった先は5番………ではなく6番のゴールに突き刺さったのだった。

「えへへ、ごめんね。失敗しちゃった」

苦笑いをして戻ってくる智花は、思いのほか落ち込んでいるようには見えなかった。

「どんまい、どんまい。じゃあ最後はあゆむんだな」

「さあ、バシッといいところ見せてきなさい」

紗季に背中を思いっきり叩かれ、送り出される。叩かれた背中をさすりながら、シュート位置に立つとみんなの応援や周りの声援が一際大きく聞こえる。ボールをもらい、どれを狙うかを考える。

さっきの智花は失敗したけど方法としては間違っていないはずだから、いつもと左右のズレがない真ん中のラインを狙おう。そうすれば距離の調整だけでいいんだから簡単はずだ。そうと決まれば、ここは2番を狙って様子を見てみよう。いくらミニバスより高いといってもバックボードがある分多少のミスはしても大丈夫はずだ。

狙うゴールが決まったので、早速呼吸を整えてシュートを打つ。

放ったシュートはバックボードに当たって跳ね返って、きちんと2番のゴールに決まった。真帆たちの応援が大きくなるのを聞きながら、次のボールを受け取る。

次は5番を狙おう。それなら、もし距離が足りなくても8番に入るかもしれないし。

そんなことを考えながら放った2投目は、往生際悪くリングで1周回った後5番に決まってくれた。シュートが決まって安心したのか、思わず深いため息をついてしまう。自分が意外と緊張していることに今更気付いた。

一際声援が大きくなるの聞きつつ放った3投目は、しかし観客の声援を祝福の声にすることはできなかった。8番のリングに弾かれテンテンと転がるボールを見て、もう後がないことを自覚する。

「歩ー、外したら承知しないんだからね！」

「歩君ならいけるよー。自信持ってー」

みんなの声援を聞いて、最後のボールを受け取る。

ここまできたら絶対にみんなの期待に応えたい。そのために集中するんだ。周りの声が聞こえなくなるくらいに、8番のゴール以外が見えなくなるくらいに……。

ボールをつきながらリズムをとり、集中力を研ぎ澄ましていく。そうして段々と次第に周りの音が遠ざかり、世界に自分とゴールしかない状態になる。やけにゆっくりに感じる時間の中で最後のシュートを放つ。

「あゆむん、いっけー!!」

シュートを放つ直前、真帆の絶叫が響いた。こんな状態でも真帆の声だけは聞こえるんだな………と、驚きよりも安心感を感じて俺はそのままボールを手放した。

綺麗な放物線を描いたシュートはそのまま8番のゴールに突き刺さった。

わずかな間、周りは静寂に包まれた。しかしその一瞬後には今までの比じゃないほどに割れんばかりの歓声が鳴り響いた。

「いいいっよっしゃー!!」

「すごいよ、歩君。やっぱり私の思った通りだった」

みんなのところへ戻ると、真帆や智花をはじめ、みんな大喜びし

てくれた。

『見事本日2人目の成功者となりました園田歩君には、景品として当施設で使える食事券3000円分をプレゼントします。ぜひハーレムの主として女の子たちを喜ばせてあげてください』

くそ、まだそれを言うか……。でもまあ、せっかくだし景品が食事券ならこのままなにか食べに行くのも悪くないか。

「じゃあなにか食べに行こか？」

成功させた俺よりも、興奮冷めやらずな女バスマンバーに聞くと二つ返事で行くという返事が返ってきたので、下のフードコートに移動することにした。と、その前に智花に聞いておきたいことがあるんだった。

「智花。智花の最後のシュートの時、なにを迷ってたん？ チラチラとこっち見てたよな？ もしかして俺、なんか気になることしotta？ それでシュートミスったとか？俺にできて智花にできん、なんておかしいもんな」

「ふえ？ え、えっと……それはね」

少しバツが悪そうにして智花が話してくれたのはお節介極まりな

い紗季のことだった。なんでも、智花がチャレンジする前に紗季に、智花がやってみて俺にできそうだと思ったらわざと失敗してあげてほしいと頼まれたそうだ。それで実際やってみて、俺も成功させることができそうだと思って、迷ったけど結局6番を狙った、ということらしい。

「ご、ごめんね。なにか騙したみたいで」

「べつに智花は悪くないんやから気にせんでいいよ。むしろ、変な気を使わせてしまってごめんな。まあ1番悪いのはあいつやけどな」

そう言って、腰まである青い髪を揺らして前を歩く元凶を睨みつける。

「あはは、でも紗季もべつに悪気があってやったわけじゃないはずだから、あんまり怒らないであげてね」

「まあそれはわかってるんやけど……」

それがお節介なんだよなー、というのは言わないでおく。実際うまくいったんだし、よかったと思うことにして少し離れてしまったみんなに追いつくために智花と一緒に小走りで走り始める。けどフードコートでちょっとした仕返しくらいいいよな……と、なにしていやろうかと考えながら追いかけるのだった。

そうして、フードコートでなににしようかと見て回っているときに、残り1000円になった食事券を持って悩んでいる長谷川さんとバッタリ出くわしたり、長谷川さんを交えてボーリングをしたりして、日が落ちるまで遊びつくしたのだった。

17. とある休日の過ごし方（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次からは合宿に入っていきますので安心？してください。

せっかくみなさんにアドバイスをもらったマンガをまだ読みに行けてないんですね。この週末にいたらいいなあ。

18. 意地っ張りな2人（前書き）

ちよっと短めの更新です。
あのコスプレの回ですね。
それでは……どうぞ。

18. 意地っ張りな2人

〳〵 交換日記（SNS） 〳〵

湊 智花「みんなやったよ！ 昴さんコーチ続けてくれるって」

ひなた 「おー？ おにいちゃんくる？ げんきかな？」

あいり 「長谷川さん来てくれるんだ。よかったー」

まほまほ「でかした、もっかん！！ これでせんそうのじゅんぴはととのったわけだ」

紗季 「戦争ってあんた……。それにしてやっぱりトモはすごいわね。それってつまり

シュート50本連続で決めたってことよね？」

湊 智花「そんなことないよ。結局10日もかかったし。それと真帆、ごめんね。ま

だ昴さんにそのこと話してないの」

まほまほ「ぜんぜんだいじょうぶ。ならこんどこそ、すばるんをろーらくして、すんごいさ

くせんをかんがえてもらわなくちゃ」

紗季 「いや、待て。あんたにまかせるとまたロクなことになりそうもないから今度は私が考えるわ」

みんなで遊んだ日から数日が経った水曜日、登校してきた俺を迎えてくれたみんなは、どこか上機嫌で朝からテンションが高かった。

「おはよう、なんかいいことあった？　なんかみんなうれしそうやな」

「聞いてよ、あゆむん！　それがさー……」

意気揚々と話してくれた真帆によると、なんでも今日から長谷川さんがコーチとして復帰してくれることになったそうだ。ゴールデンウィーク最後の日から始まった智花の挑戦が成功したらしかった。

「おー、さすが智花やな。こんなに早く成功させるなんて」

「そ、そんなことないよ。球技大会までギリギリになっちゃったし……」

智花はそう言って少し頬を染めて、俯いてしまった。

「まったく、俺やったら球技大会どころか夏休みを使っても無理やっというのに」

「ほんとよねー」

さらに追い打ちをかけるように言う。と紗季も乗ってきてくれたので、智花はますます照れてしまった。

「みんな、和み過ぎだー！　これからまた来週ある球技大会に向けて猛特訓なんだから。またあゆむんにいっぱい教わって、すばるんを誘惑してすごい作戦考えてもらうんだから！」

今まで上機嫌で話していた真帆が、どこで熱血スイッチが入ったのかいきなりそんなことを言い出した。

「ふふふ、長谷川さんの誘惑ならこれで大丈夫っよ」

眼鏡をキラッと光らせて、紗季は1つの鞆を机の上に持ち上げた。なんだかデジャブを感じるし、正直嫌な予感しかない。けど、一応聞いておかないといけないよな。

「紗季、こ、これは？」

「長谷川さん誘惑用アイテムよ。あーでも歩の分はないの。悪いわね」

やっぱりか……と思うと同時に、今回は俺は関係ないらしいので安心する。

「さ、紗季のアイディアなら大丈夫……だよね？」

「ううう、一体なんだろう」

後ろで、ものすごく不安そうな2人の声が聞こえてきたので、俺は心の中で愁傷様、とつぶやいた。

「「「「お帰りなさい、あなた！！」」」」

結論から言おう。紗季はアホなんじゃないだろうか……。

今、みんなは学校指定の紺色の水着の上にエプロンをつける、という裸エプロンならぬ水着エプロンという実にブツとんだ格好で長谷川さんを出迎えているところだ。

「さ、とりあえず座って、あなた」

「おらー、ポッキー食べ！　あなた」

「おー、おにいちゃんもたべる？」

ノリノリの紗季にコロコロと笑っている真帆、それになにげに呼び方を間違っているひなたが、逃げ腰になっている長谷川さんを引きとめるべく近寄っているいろいろと接待？　をやっている。愛莉と智花に至っては初めこそ5人で並んでいたけど、すぐさま体育館の隅に隠れて恥ずかしさのあまり小さくなってしまっている始末である。

俺はと言えば、朝に言われた通りこの件に巻き込まれずに済んだので、コートの中真ん中でみんなの様子を見ている状態だ。まあ紗季のことはアホなんじゃないかと思う反面、Good Job　と言いたい光景ではあるけども、もしこれで長谷川さんがデレデレになっってしまったら長谷川さんの人生は終わってしまうことをわかってないんだろうか……。

「着替えて来てください。お願いします」

そして、長谷川さんが二度目となる本気土下座を披露して、この騒動はお開きになった。

「球技大会？」

長谷川さんの土下座によってみんなが着替えている間に、長谷川さんに水着エプロンという暴挙にでても頼みたかったことを簡単に説明しておく。

「来週にあるんですけど、なんでもD組にちよつと因縁があつて、そこには絶対勝つてクラスで盛り上がっちゃって。主に男子が、なんですけど真帆もあの性格なんで男子側なんですよ」

5年生の頃からなにかにつけて張り合っているらしいD組には男バスのメンバーがいて、そう簡単には勝てないのでまたしても俺と長谷川さんに白羽の矢がたったというわけだ。

「それにしても、歩はあんまり勝ちにこだわってるようには見ないけど？」

「ああ、俺は正直まだ来たばかりなんでピンときてなくて乗り遅れてる感じはありますね。けど、ライバルにみんなで戦うっていうのにはやっぱりワクワクしますよ」

そんな風に話していると、着替え終えたみんなが戻ってきた。と思ったら真帆が俺の前まで来て指をビシッと指して仁王立ちになった。

「甘い！ 甘いぞ、あゆむん。そんなことではダメだ！」

こんな感じですよ、という意味を込めた視線を長谷川さんに向けると長谷川さんも苦笑いだった。

「あははは。でも、作戦なんかいるの？ 竹中……だっけ？ あいつと同じクラスだったよね？ なら、あいつと協力すれば勝てるんじゃない？」

まあやっぱりそうなりますよね……、と半ば予想していたことを言われてしまう。そして、気まずい雰囲気が漂う中でその元凶となる真帆を見ると、案の定不機嫌そうな顔をしていた。

「竹中はバスケには出ないんですよ。先週の出場種目を決めるときにサッカーにエントリーしてましたから」

「へえー、あいつならバスケに出そうなものなのになんでまた？」

竹中が無理なことを説明すると、続いて質問が返ってきた。さらに気まずい雰囲気が出る中、長谷川さんにちゃんと説明するため先週の出場種目を決めたときのことを話し始めるのだった。

「はい、じゃあ今度の球技大会の種目決めをやるぞー。種目は去年と同じで、ソフト、サッカー、バレーに卓球、それにバスケだ。じゃあ10分したら希望を聞くからそれまでに決めるように」

先週のHRの時間、笹先生からそう言われてクラスが騒がしくなる中で俺たちも集まって（と、言っても初めから席は近いので向きを変えるだけだけど）話し合いを始めた。

「やっぱりあたしたちはバスケで決定っしょ！」

「うん、私もバスケに出たいな」

真帆が最初にしゃべりだし、智花がそれに続いた。周りを見れば他のみんなもバスケに出ることに賛成みたいだ。もちろん、俺もどうせならバスケに出たいと思っているので反対なんかしない。

「じゃあ、メンバーは補欠2人で合わせて7人だから、あと1人どうしようか」

智花が規定人数が書かれている黒板の方を見ながら、みんなに訊ねる。けど、そう言いながらも視線はチラチラと、ある人物の方を見ていた。

このクラスにはバスケ関係者が、それも大のバスケ好きがもう1人いるので当然そいつもバスケ希望のはずなので声をかけてみる。

「おい、竹中。お前もバスケやよな？」

「……………」

即答で返事が来ると思ったのに、誘われた竹中の反応は俺……ではなく、その後ろの真帆を睨みつけるというものだった。

「フンっ」

「なんだよっ、その反応は!!」

しばらく真帆とにらみ合っていた竹中はそっぽを向いて立ち去ろうとする。それを見て真帆が怒って怒鳴りつけた。すると、竹中は立ち止まり真帆の方を向いてはつきり言った。

「俺はでない。真帆とバスケするなんて死んでもごめんだ」

そういう竹中の顔は真帆を睨みつけたままだ。

「なにおー！ こっちだってあたしに負けた弱っちいやつの力なんて必要ないね、フンっ」

売り言葉に買い言葉で真帆が言い返すから、2人の言い合いが段々とヒートアップしてくる。

「はあ？！ あんなマグレで勝ったくらいでいい気になんな。それに別にお前に負けたわけじゃねーし」

「いーや、あたしの勝ちだね。あたしの方がいっぱいシュート決めたし」

2人とも徐々に近寄っていき、ガルルルと唸り声が聞こえてきそうな剣幕で言い争いになってきた。

「ほら、2人ともそこまでしておけ」

さすがにそろそろ止めないとまずいと思って席を立つと、同じタ
イミングで簗先生が2人の仲裁に入った。それでもしばらく睨み合
っていた2人だったけど、先に折れたのは竹中の方だった。

「とにかく俺はバスケにはでないからな!!」

「と、いう訳です」

「なるほど、そんなことがあったんだ」

事の顛末を話し終えて、竹中がバスケに参加しないことを説明し
終える。

「うがー、思い出したらムカついてきたー。あいつのことなんかどうでもいいでしょ？ それよりまたすごい作戦考えてよ」

「うーん、そう言われてもなー」

話を聞いていてあの時の怒りを思い出したらしい真帆が、長谷川さんに八つ当たり気味にくっつかかる。当然そう簡単に作戦なんて思い浮かぶ訳はないので長谷川さんも困り顔だ。

「こら、いくら長谷川さんだっていきなりじゃどうしようもないでしょ。それぐらいわかれ！」

長谷川さんに向かって駄々をこね始めた真帆を、紗季が後ろから羽交い絞めにしてなんとか落ち着かせる。

「まあなんとか考えてみるよ。だから今日はもう練習しよ」

長谷川さんがそう締めくくり、渋々真帆も頷いたので久しぶりとなる長谷川さんを交えての練習を始める。この話でかなりの時間を使ってしまったので、今のみんなの実力を見るために残りの時間で俺を入れての3on3をすることになった。

あの試合から大した練習はしていないのでレベルアップはしていないけど、大幅なレベルダウンもしていない状態を長谷川さんに見てもらう。前ほど切羽詰まっていなかった中で試合形式なので、みんな

和気あいあいと楽しそうにしている。真帆も次第に元気になってきて、最後の方ではすっかりいつも通りに戻っていた。

そうして時間一杯まで試合形式で楽しんで、今日の練習はおしまになった。

みんなでワイワイと帰る中、この時はまだ誰一人として週末に大イベントが待ち構えているなんて知る者はいなかったのだった……。

18. 意地っ張りな2人（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

そういえば日曜にあひるの空を読んでみようとマン喫行ったら1〜5巻が持っていかれていたらしく、なくて読めなかったorz
結構人気マンガなんですな。

19、 決闘（前書き）

今週2回目の更新です。

なかなか合宿に突入しないのはご容赦を……。

それでは……どうぞ。

19, 決闘

〵 交換日記（SNS） 〵

湊 智花「美星先生からメール来た?！」

紗季 「来てるわよ。もうみんなのところにも届いてるんじゃないかな
かしら」

まほまほ「あたしのところにもきたー!! さすがすばるんだな。こ
んなおもし

ろそうなおもいつくなんて」

あいり 「あたしのところにもきたよ。ふふふ、私もすごく楽しみ」

ひなた 「おー、ひなはいま見た。ひなは楽しすぎてねむれそう
にない、ど

うしよう」

次の日、昨日ちょっと夜更かししたおかげで寝不足気味な俺は、あくびを連発しながら登校してきた。

「ふぁー、おはよう」

あくびを隠そうともせずに挨拶をして席に着く。

「おー？ あゆむーも楽しすぎてねれなかった？」

「え？ 楽しみってなんのこと？」

すると、同じくあくびをした後なのだろう、若干涙目になっているひなたが話しかけてきた。

「なに?! あゆむんにはみーたんからメールってないの?!」

真帆がそれはたいへんだ、と言わんばかりに身を乗り出して聞いてくる。けど、俺には心当たりがないので首をひねるしかない。

「昨日の夜にみーたんから、明日から2泊3日で学校で合宿をしようって長谷川さんから提案があったんだけどどうしようかっていうメールがきたのよ。歩にはいってない？」

「いや来てないよ。それにしても長谷川さんが？」

見かねた紗季が説明してくれるが、俺には初耳な上に少しおかしいことがあった。

それは俺は昨日の夜は練習の後、長谷川さんと会っていたからだ。帰る途中にちょっとこれからのことについて話し合わないかと言われて、特に断る理由もなかったので長谷川さん家にお邪魔していた。と言っても、話していた内容は球技大会のことよりも世間話の方が多くて、俺が長谷川さんの普段のトレーニングの内容を聞いていたりしていただけなんだけど。それでそこそこ遅くまで話していたから、もしそんな話があればその時にしてくれてるはずなんだけどな……。

「だったら、その……歩君は来ないの？」

「え？！ あゆむんもくるよね？ ね？」

愛莉がオズオズと俺に参加するかどうか聞いてくると、それにつられて真帆がさらに身を乗り出してきて、絶対参加するよねと言いたそうな顔で俺をみてきた。

「おもしろそうやし、俺も参加したいな。あとで篁先生にきいてくるわ」

俺がそういうと真帆は安心したのか、乗り出していた体を元に戻して改めてしゃべり始めた。

「それにしても楽しみだよねー、合宿。もう昨日早速、荷物の準備始めたもん」

「あんた、荷物は自分で持てる範囲にしときなさいよね。メイドさん同伴は禁止だからね」

待ちきれないほど楽しみにしている真帆に、紗季が注意をしている。紗季の言い方からすれば、メイド同伴になるほどの荷物を持ってきたことがあるみたいだから驚きだ。

「おー、ひなも準備してた。けど、カバンに入りきらなかった。荷物へらさないといけない。パンツ6枚にしたらへらしすぎ？」

「まだまだ多いよ。上下で3組くらいと予備に1組でいいんじゃない?」

真帆のセリフを聞いて、ひなたが持っていく下着について聞き始める。その手の話は俺のいないところでやってほしいとつくづく思う。気恥ずかしさに周りを見てみると真帆、紗季、智花の3人はなんだか複雑そうな顔をしていた。

「ねえ愛莉……、自慢？」

「え?？」

なんで真帆達がそんな顔をしているのかわからず不思議に思っている、紗季が苦虫を噛んだような顔をして愛莉に尋ねるが、当の愛莉も質問の意味がわからないようでキョトンとしてしまっている。

「なあ、もっかん。あたしたちは何枚持って? 主に上の方……」

「0枚でいいんじゃないかな……。必要、ないもの……」

かなり落ち込んで自分の体の一部分を見て話す智花と真帆の話聞いて、俺も愛莉も3人の表情の意味を悟った。

「ち、ちがうの。そういう意味じゃなくって」

あたふたして愛莉が真帆たちに弁解しているそばで俺は、言葉には気をつけようと改めて思ったのだった。

そうして昼休み。

早々にお弁当を片付けて、俺は1人で合宿のことを聞きに職員室

に向かった。

「篁先生、ちょっといいですか？」

「はいよー、どした？」

篁先生を呼んで、合宿のことを聞いてみる。

「あー、わりいわりい。そういや園田には連絡してなかったっけ。まあそういうことだから」

案の定、俺への連絡は素で忘れていたらしく、あっけらかんと言われてしまう。まあそれほど気にしてもいないので連絡の忘れはいとして、別の気になっていることを聞いてみることにした。

「ところで、これってホントに長谷川さんが考えました？」

「にゃふふふ、バレちゃった？ ホントは私が思いついたんだけど、あいつのアイディアにしといた方が都合がよくてね」

そんなに強く聞いたわけでもないのに、あっさり白状されてどこか小悪魔的な笑顔で言われてしまう。

「まあ、俺も真帆たちも楽しみなのは変わらないですからいいですけど……」

「にやはは、まあそういうことだから。大変だと思うけど頑張ってるな」

これで話は終わり、と箕先生はクルリと回って職員室に戻って行った。

「大変って練習内容のことかな？」

最後に言われた言葉が妙に引っかかったけども、考えても答えは出そうにないので俺も教室に戻ることにした。

……この時もっと深くまで聞いておけばよかったと、放課後に箕先生から爆弾を落とされた時に心底思ったのだった。

「という訳で、すまん。竹中のエントリー間違っちゃったから明日からの合宿に竹中も参加な」

「えー?! なにそれ!! なんでコイツも」

帰りのHRの後、女バスメンバーと俺、竹中が前に集められて、
箕先生から衝撃的（真帆にとって）なことを聞かされる。

「だから間違っちゃったんだよね、竹中の競技。サッカーじゃなくてバスケットにしちゃってさ。それで明日からの合宿はバスケットプレイヤーでやるもんだから、竹中も参加ってこと」

真帆は当然、箕先生にくっついてかかっているけど、対する竹中は事前に知らされていたのか真帆ほど慌てた様子はなく真帆をケンカ腰に睨んでいるだけだ。

「話はそれで終わり? なら俺は部活あるから」

そう言って竹中が帰ろうと踵（きびす）をかえす。当然、怒り心頭の真帆がそれを黙って見過ごす訳もなく……

「こら、まてナツヒ! あたしはまだナツヒの参加、認めてないんだからなっ」

「……………フン」

間髪いれず真帆が竹中に向かって啖呵を切るけども、竹中の方は真帆を一瞥しただけで相手にせずに部活へ行ってしまった。

「なんだよっ、あの態度っ！！ あったまくるー」

ダンッダンッと地団駄を踏んで怒りをあらわにする真帆はだんだんと手がつけられなくなってきた。

「まあ真帆、そう怒るなって。間違っちゃったのは謝るけど、もうどうしようもないし」

笹先生が全然感情のこもってない説得をして、そそくさと教室を出て行った。まさか、この状態の真帆を放置していくとは思わなかったのも、呆氣にとられて先生を見ていると教室を出るときに目が合った。すると、頑張れよ、という意味だろうウィンクを残して出て行った。

「もう、間違ったものはないんだし、いい加減あきらめなさい。それに、夏陽が来るくらいで合宿が楽しみじゃなくなる訳でもないでしょ」

「そ、そうだよ。むしろ人数が増えてもっと楽しくなるよ？　きつと」

紗季たちがなんとか落ち着かせようと説得しているけども、なかなか真帆の怒りは鎮まる気配をみせない。すると、今までワーワー騒いでいた真帆が急にピタリと動きを止めた。

「おー？　まほ、どうしたの？」

ひなたがいきなり俯いてしまった真帆を、下からのぞきこむようにして様子をみる。

「ふ、ふふふふ……」

すばらくすると真帆が、堪えきれなくなったかのように肩を震わせて小さく笑い出した。なにか不気味な感じがするので真帆を囲んでいた俺を含め、みんな一斉にバツと距離をとる。

「……決めた。やってやる。そして、ひやくぱー楽しい合宿を取り戻す！！」

突然顔を上げ右手を握りしめて、そういう真帆を見てめんどくさいことになりそうだと、まだまだ終わりそうにないこの事態に深い

ため息をつくのだった。

そして次の日の放課後。

帰りのHRが終わるや否や、それまで何事もなく平穏な日常を送っていた俺に物騒なセリフが聞こえてきた。

「ケットーだっ、ナツヒ！」

「はあ？」

言ったのは確認するまでもなく真帆で、言われた方も間違えるはずもなく竹中だった。まあ言われた当の本人は、何言っただこいつみたいな顔をしているんだけど。

「だから、ケットーだ、ケットー！！　それで負けた方が合宿をあきらめる」

「へー、そりゃ好都合だ。そっちから出て行くことになるようなことを言ってくるなんてな」

ギャーギャー騒いでいる真帆と不敵に笑う竹中を見て、なんか物騒なことになりそうだという思いが強くなる。

「あ、あんまり危ないことはやめた方が……」

「無駄ね、あんなったら止める方が大変よ。やりたいならやらせた方が無難ね」

愛莉が2人を心配そうに見ていると、紗季が2人の幼馴染としての経験からアドバイスをしている。

「場所は体育館でいいよね？　その方がおもいつきりやれるもんね」

「上等だ。自分の負けるところはあんまり他の奴には見られたくないもんな？」

なにをー、と2人してにらみ合い、ロッカーからそれぞれ銃を取り出す。

……いやいや、おかしことがあったよ？　なんで2人とも当たり前のようにロッカーに銃が入ってて、みんなもそれを当然のようにみてるのかわからない。いや、……違った。智花だけは驚いている様子で目をまんまるにしているから、智花も知らなかったんだな。隣で成り行きを見ている紗季にこっそりと聞いてみる。

「なあ、なんであの2人は銃なんてロッカーに入れてんの？」

「え？ 私も持ってるわよ？ そんなに不思議かしら、ここはあの『みーたん』のクラスなのよ？」

……うーん、なんか納得できてしまう自分は十分このクラスに馴染んでるってことなんだろうか。

銃を取り出した2人はそのまま体育館に向かうようなので一緒についていった。

「じゃあ、紗季が10数えるまでお互い離れて行って、数え終わったら振り向いて先に当たった方の勝ちってことでいいよね？」

「ああ、それでかまわねーからさっさと始めるぞ」

体操服に着替え、背中あわせに立ち、ルールを確認しあう2人。審判を任された紗季が、いかにもめんどくさそうに2人の間に立っている。俺を含めて、他のメンバーは壁際に並んで観客状態だ。

もうこの事態を止めるのは諦めたので大人しく観客でいようと思いい、せっかくなので2人の銃を観察してみた。まず真帆の方は、ゴチャゴチャといろんな装備をつけた抱えなければいけないようなアサルトライフル、対して竹中は小さなハンドガン1丁だけという軽装備だ。あきらかに、この対決方法なら竹中に分がある装備の違いだ。

「なに……これ？」

するとちようど長谷川さんが入ってきて、第一声がこれだった。そりゃあ、体育館に入っていくなり銃を構えた2人が険悪な雰囲気でしたら誰だってそんな感じになるよねー。

入ってきた長谷川さんに気付いていないようで、困惑している長谷川さんを置いてけぼりにしたまま紗季がカウントを始めた。

「いーち、にー、さーん……」

紗季のカウントに合わせて1歩、また1歩と離れていく2人。自信満々な表情で不敵に笑っている真帆と、やけに落ち着いた表情で静かに時を待つ竹中の間に緊張が膨らむ。

「なあ、紗季。ところで今何時？」

「ろーく。……なに？ 時計みなさいよ」

紗季が6を数えたところで真帆が、勝負に全然関係がなさそうな時間を紗季に聞く。あまりカウントするのを重要に思っていない紗季は律義に時計を確認して時間を教えてあげようとしている。

「えーと、今は4時17ふ……」

「10だ!!」

すると紗季が時間を言い終わる前に真帆が振り返り、フルオート
の弾幕を後ろにいるはずの竹中にお見舞いする。

「あれ？」

けれども、真帆の攻撃は竹中に当たらなかった。なぜなら……

「……思った通りだぜ。どうせお前は下らねーこと考えてるだろー
と思ってたぜ」

竹中は真帆が振り向くのと同時に振り向いていて、真帆の振り向
く反対側にスライディングしてかわしていたのだった。

「じゃあな、真帆」

真帆の攻撃をかわしきった竹中がハンドガンの照準を真帆に合わ
せる。絶対絶命のピンチに真帆は、それでも不敵な笑みを崩さな
かった。

「————それはどうかな？」

「なっ!!！」

本命はこっちだ、という顔をして真帆の2つ目の銃口、つまりア
ンダーバレルグレネードからピンポン玉くらいの大きさの球が打ち
出される。

完全に虚をつかれた竹中は、顔の付近で炸裂するグレネードにな
すすべもなかった。炸裂したあとにはモクモクとなにかの粉が2人
を包んだ。

「ぐえほっ。なんだこれ!？」

「あーははは。どーだ、まほまほ特製きなこ爆弾の威力は!!！」

粉まみれの姿になり盛大に咳き込む竹中を見下ろして、真帆が攻
撃のネタばらしをしつつも銃を突きつけトリガーを————

「……じゃあ、消え失せろ!!！」

「いい加減にしろっ。バカ真帆!!!!!!！」

引く前に紗季に脳天チョップをくらい、頭を押さえて悶えることになった。

「えーと、ケンカ両成敗……………やな？」

19, 決闘(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

次こそ合宿に入るわけですけど、あまり内容を考えていないという
悲しい現実……。

さて、パンツ事件をどう描くかなー。

20. 竹中の思い（前書き）

ちよつと短めの内容となつてしまいました。
今回の主役は題名通り竹中です。
それでは……どうぞ。

20. 竹中の思い

〃 ガールズトーク 〃

紗季 「もうホントにろくなことしないんだから、あんたはっ！」

まほまほ 「だから、わるかったって何度も言ってるじゃん」

湊 智花 「あはは。でも、真帆も竹中君もすごく戦略っていうのかな？ そんなの

考えてたね。感心しちゃった」

ひなた 「おー、きなこばくだん、あれはよかった。いいにおいがした」

あいり 「ひなちゃん、そこはあんまり関係ないと思うな……」

紗季 「それに、今まさに掃除っていう後始末が大変だって思い知らされてると

ころなんだから、あきらかにダメダメでしょ」

紗季の一撃により没収試合になった決闘の後始末として、真帆命名きな粉爆弾の掃除をみんなで作っているという現状。

始めは紗季が掃除は真帆が1人でするべき、と言っていたが、このあとに控えている練習に早く移りたい俺、持ち前の優しさで手伝おうとする智花と愛莉、さらにおー？ おー！ ときなこ爆弾の爆心地でクルクル回って舞い上がるきな粉で遊んでいるひなたの申し出を止めることができず、結局みんなで掃除をすることになった。

ちなみに竹中はチラチラとこっちを見て気にしているようだけど1人でドリブルの練習をしているし、長谷川さんは決闘が終わったのを確認してからどこかへ行ったしまったので今はいない。

「待たせてごめんね。おっ、ちゃんと掃除は終わってるね」

「あっ、すばるんやっとなってきた」

ちょうど掃除が終わったくらいに長谷川さんが戻ってきて、真帆たちが駆け寄っていく。俺は反対に竹中の方に寄って行った。

「なあ、長谷川さんも戻ってきたし、練習やるやろうから一緒にしよや？」

「フン、ごめんだね。まあ、俺がいねーとD組に勝てないだろうから帰らないでいてやるけど真帆のやつとだけは、ぜってーやらねー。

俺は外走ってくる」

練習に誘ってみるも相変わらずそっけなく断られてしまう。そのまま体育館を出て行こうとする竹中に、真帆がまたしてもケンカをふっかけようと口を開いた。

「待て、ナツヒっ！ 今度はバスケで勝負だ。これなら文句ねーだろ？！」

しかし、言われた竹中は振り向きもせず拒絶を示すのみで、

「やる価値ねーよ、お前となんて」

そう言って体育館を出て行った。ふーん、やる価値……ね。

「長谷川さん、俺も外走ってきていいですか？」

みんなが飛びかかろうとする真帆を抑えている間に、長谷川さんにそう提案した。

「ああ、いいよ。どうせ今日はしっかりとした練習はしないつもりだから、いっというんで」

長谷川さんから許しをもらったので、竹中に追いつくために急いで体育館を飛び出した。

「もうあんなどこにいるんか、なかなか早いな」

体育館を出てキョロキョロと竹中を探すと、姿が小さく見えるくらい向こうを走っているのを見つけた。なんとか追いつこうと俺も速度を上げたのだった。

「なんだよ、ついてくんなよ。練習はいいのかよ？」

ようやく追いつくと竹中は若干ペースを落として話しかけてきた。

「まあそんなつれないこと言うなって。少ない男同士一緒に走ろうや」

さっきよりも幾分かやわらかくなった言葉に、こちらも少し碎けた感じで答える。しばらく無言で走りつづけ、先に口を開いたのは俺の方だった。

「ところで昨日、放課後に篁先生から合宿の話があった時、あんまり驚いてなかったやんな？ あれって事前に聞いてたから？」

「はあ？ なんだよ今更。まあそうだよ、あれより前に間違ってた話は聞いてた」

やっぱりか……。またひとつ考えていたことが確信に近づいた。さらに近付くためにもう1歩踏み込む。

「じゃあさ、合宿のことも聞いたんやろ？ 反対せんかったん？」

「反対は……したさ。でも美星がお役所仕事だから変更は無理とか言うし、バスケ参加者は強制だと言うし……仕方なくだ」

ふむふむ、と頷きつつも走る速度は変わっていない。そうして作った間で次の質問を考える。

「真帆とはいっから知り合いなん？ この前気付いたんやけど、真帆が普通に名前で呼ぶのって竹中と紗季だけやんな？」

「あいつとは1年からずっと同じクラスだ。紗季も一緒。腐れ縁ってやつだな」

そんなに長いのかと感心する一方でそれなら、と続けて話す。

「なら、真帆の性格だって知ってるんやろ？　ちょっと言い過ぎる時もあるけど根はすごくいい奴だって」

「……………違う」

違うって何が？　と聞く前に、先に竹中がもう1度『違う』と繰り返した。

「違う。別に俺はあいつになにか言われたから怒ってるんじゃない。ただ許せないだけだ、……………あいつがバスケをやっていることが」

「はあ?!　なんやそれっ」

今聞いたことが到底我慢できず、つい声を荒げてしまう。隣を走る竹中の肩を掴み、足を止める。

「なんで？　なんで真帆にだけそんなことを言うんや?!」

「あいつは……………どうせ、あいつはまた途中で辞めちゃうんだよ！」

竹中はムキになって言い返してしまったこと、つい自分の胸の内

をもらってしまったことに恥じるように、チツと舌打ちをしてまた走りだそうと体の向きを変えようとする。

「待てって、どういうことなんやって？ 真帆のなにがそんなに気に入くわんの？」

そうはさせじと、もう1度肩を掴んでこっちを向かして問い詰める。さっきはカツとなって頭に来ていたけども、逆に竹中がキレて少し落ち着くことができた。竹中の方も一瞬キレただけで、今は俺のしつこさに呆れたか、少しとはいえ本音をもらしたことを失敗だと思っているのか、どこか諦めた顔をしている。

「なあお前、あいつ……真帆の家には行ったことあるか？」

しぶしぶと言った感じで話しだす竹中の話の前後がかみ合わないことで戸惑ったけども、あまり間をあげずに答える。

「ああ、あるよ。それが？」

「なら、あいつの部屋見たか？」

真帆の部屋？ 正直部屋がいっぱいありすぎて覚えていない。いやでも待てよ、たしかトイレの時に見た部屋が真帆の部屋だって久井奈さん言ってたような……。

「散らかった部屋のことなら見たけど？」

「ああ、たぶんそれだ。その部屋、やたらいろんなものがあつただろ？ それ全部、あいつがハマって、そして途中で飽きたやつなんだよ」

そういえば、あの時久井奈さんもそんなことを言ってた気がする。記憶が曖昧でずいぶん前のことのように思うけども、実際はまだ1カ月も経っていない。

「あいつはなんでも興味持って、すぐ上手くなって………それですぐ飽きる。昔からそうだ」

それも久井奈さんが言ってたことだ。確かに真帆は飲み込みが早いというか、コツを掴むのが早い。それはシュートを教えていた時から思っていたことだった。

「1輪車や逆上がりだってそうだった。あいつはすぐできるようになって、俺も悔しいからいっぱい練習して後からだけどできるようになる。けどそのころには、もうあいつ別のことに夢中なんだよ。『そんなのもういいよ、それよりこれ見てよ』てさ」

苦笑いを浮かべて話す竹中がどこか疲れているように見えるのは、

ここまで走ってきたからというだけではないはずだ。でも、なんとなくわかった気がする。竹中が真帆のなにが許せないのか……。

「まあ鉄棒とかならまだいいんだ、我慢できる。けど、それをバスケットでやられたらたまったもんじゃない。俺はバスケットが好きだ。大好きなんだよ。それをまた、ちょっとやったくらいでチョロいもんだってコケにされたら許せない。我慢できない。でも、どうせまたそうなるだろうから、その前にこっちから絶交するんだ」

そういう竹中は悔しさと憤りを混ぜたような顔をして、奥歯がギリッと音が鳴るくらいに噛みしめる。

「確かにあいつは上達が早い、それは認める。けど、シュートが入るようになっただけじゃまだまだだ。まだほんの少ししかできてないのに極めたみたいなことって辞めちゃうんだ。俺を負けっぱなしのままで………リベンジもさせてくれないままで………俺の1番大事な場所です！」

だからだったんだ。確かに今回は真帆の言い過ぎがキツカケで、けどそれだけじゃなくて。ホントは怖かったんだ。こっちが本気になっても、向こうがスルリと土俵から降りてしまうことが。

最後には泣きそうな顔になって胸の内をさらした竹中は、気まずそうにして目線をそらした。

「……………すまん、変なことグチった」

そう言って今度こそ走りだそうとする背中に、今言っておきたいことを伝える。

「おい、竹中。確かに俺はお前に比べたら全然真帆のことしらんやろうし、今までの真帆はそうやったかもしれんけど。でも、少なくとも俺の知ってる真帆は、バスケやってる真帆は、そんな軽い気持ちでやってないって言える！ まだまだ上手になりたいって思ってるはずや！ だから、やる価値ないなんて言わずに1回向き合ってみよや、真帆のバスケに」

俺の呼びかけに立ち止まりはしても振り向かないまま、竹中は言う。

「何もわかってねーくせに……、お前もあんまり入れ込むと後悔するぞ」

それだけ言って走り出す竹中を見送り、しばらくそのまま立ち尽くす。

「俺はやらないで後悔するより、やって後悔したいタチなんでね」

誰に聞かせるでもなく1人呟いて俺も走り出したのだった。

20. 竹中の思い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

先週にあひるの空読んできました。といっても、7巻までなんですけど……。

みなさんがオススメしてくれてる通りすごくおもしろかったです。

7巻まで夢中で読んでしまいましたね。マン喫で読んだんですけど自分で買うか真剣に悩むレベルでしたね。

でも、内容に夢中で歩の新技にまで考えが及ばなかったという残念な結果に……。

もう少し本作の話数的に余裕があると言ってもそろそろ決めないとなあ。

21. 確かめる気持ち（前書き）

最近描くペースが上がってきたので今週2回目の更新です。
今回はアイスエイジ君臨？ な回です。
それでは……どうぞ。

21. 確かめる気持ち

〃 ガールズトーク 〃

まほまほ「よっしゃー、れんしゅうもおわったことだし、みんなでゲームしようよ」

紗季「なに言ってるの。ごはんの準備が先でしょ！」

ひなた「おー、ひなはおなかペコペコ」

湊 智花「ふふ、私もお腹減っちゃった」

あいり「ごはんはどうするんだろうね？」

紗季「やっぱり自分たちで用意するんじゃないかしら？」

まほまほ「それでこそがっしゅくだよねー。じゃあそうときまれば、いそげー」

あのあとは俺が竹中の後ろを走り、けども会話はないままですいぶんと走り続け戻ってきたのは、ちょうど真帆たちの練習も終わったところだった。

「ちょうどよかった。こっちも終わったからこれからみんなでごはんにしよう」

戻ってきた俺達をみて長谷川さんがそう言ったので、みんなで宿泊小屋へ向かう。

「ごっはん、ごっはん」

「おー、ごっはん、ごっはん」

と、なにがそんなに楽しいのかスキップしているのは真帆と、そのマネをしているひなただ。

ざっと宿泊小屋の説明をすると、宿泊小屋は平屋で玄関を入るとまっすぐ廊下があり、左側に炊事場、トイレ、お風呂があり、右側に10畳の板間と5畳の和室がある。今回は人数的に板間が女子で、和室が男子という割り振りに決まっている。

荷物を置いて、さっそく炊事場にみんなで集合する。そこにはすでに食材が並べてあり、食材の置いてあるテーブルを挟んで、さながら調理実習の授業みたいに長谷川さんと他に分かれた。

でも、もしかしてこの食材だと今日のごはんは……。

「じゃあ、今日の夕食はお好み焼きにしたいと思います」

長谷川さんの発表を聞いて、確かに俺を除くみんなの動きが一瞬止まった。それは緊張のような、畏怖のような感じで場の雰囲気が変わった。

俺と長谷川さんはどうしてこんな反応なのかわからず、2人してハテナマークを浮かべていた。まあ、その理由はこのあとすぐ嫌というほどわかったのだけでも……。

「なにしてんの、あんたは！」

突如と響いた怒声は紗季のものだった。いや、今はこう呼んだ方がいいんだろう『氷の絶対女王政』^{アイス・エイジ}のものだった、と。この呼び名は、紗季の二つ名としてあとで智花に教えてもらった。いかななく二つ名の迫力を発揮している紗季は、向こうで真帆に山芋がどうの、さらにあっちで竹中にだしがどうの、と次々と手厳しい指導をして、しまいにはみんなに戦力外通告を出す始末だった。

「なんで歩はお米を洗おうとしているのかしら？　まさかご飯を一緒に食べる気じゃないでしょうね？！」

そして、半ば呆然と成り行きを見ていた俺アイス・エイについて氷の絶対女王政ジの矛先が向いてしまった。

「え？　お好み焼きにはごはんやろ？　普通やん」

「ぜんっぜん、普通じゃないわよ！　なんで粉もののご飯と一緒に食べるわけ？　炭水化物の取り過ぎでしょ！？」

みんなに戦力外通告を下した勢いそのままに、『女王様』が怒りになっていた。けど、大阪とか関西はご飯と一緒に食べるのが普通なんだけどなあ、と思い説得を試してみる。

「いやいや、お好み焼きの本場の大阪では、逆にご飯と一緒に普通やよ？　まさか知らんとはいわんよな？」

「そ、それくらい知ってるわよ。けど、ここの地域やあたしの家ではお好み焼きが主食なの」

よし、ちょっと揺らいだ。このままもうひと押し。

「えっ？　じゃあもしかして一緒に食べたことない？　それはもっ

たいたないなー。それは本場の食べ方をしてみるべきやで」

本場というのを強調してたたみかける。すると、「うぐっ」と言
って紗季がひるんだ。

「あれはおいしいよー。アツアツのご飯の上に一口サイズに切った
お好み焼きを乗せて一緒に頬張る。するとソースとマヨネーズの濃
い味付けがマッチして、ご飯がすすむこと間違いなしやで。あれを
食べたことないなんて、損しとるで」

「おー、おいしそう。ジュルリ」

ナイスフォローひなた。ちょうどいいタイミングで言ってくれた
ひなたを心の中で褒める。ちなみに「ジュルリ」は口で言ってるだ
けでホントによだれが垂れていたわけではない。天使のビジュアル
を持つひなたにそんなことはあってはならない。

まあ実際、ご飯はなくても全然かまわないんだけどノリでここま
で来てしまったので最後まで行くことにする。

「それに、ここまで細かいことまで気を配って作ったやつなんて単
体だけでもすごいおいしいのに、ご飯もつけばさらにおいしさ倍や
で」

「くうう、もういいわよ。認めるから炊きなさいよ、ご飯」

そしてついに女王の説得に成功した。後ろの方で「すげー、あの状態の紗季を打ち負かした」とか呟いているやつがいたりするけど、びっくりしているのは俺も同じだ。

そんなこんなで、出来上がったお好み焼き十ご飯をみんなでおいしくいただいた。

「これもありかも……」

そんなつぶやきが小さく聞こえ、後日とあるお好み焼き屋さんのメニューに定食セットが追加されたとかされなかったとか……。

ご飯を食べ終え、自由時間になったので真帆が持ってきたゲームで遊ぶことになった。みんなワイワイと楽しんだんだけど、智花のポテンシャルの高さにただただ驚くことになった。

そうしてお風呂に入る時間になり、レディファーストということで女性陣からの入浴に決まった。その間ヒマなので、どうしようかと思っているとトイレに行っていた長谷川さんが戻ってきた。

「ヒマだし、コンビニにでも行かないか」

どうやら長谷川さんもヒマだと思っていたらしい。ちょうど喉も乾いていたのでついていくことにした。

「お、俺も行くぞ」

すると、なぜか竹中が慌てた様子でついてくる。

最寄りのコンビニまで徒歩で20分の距離を、男3人でゆっくり歩く。長谷川さんが少し前を歩き、その後ろを俺と竹中がついていく。しばらく無言で歩いていたが、この機会にと気になっていたことを聞いてみることにした。

「なあ、竹中」

「ん？　なんだよ」

「ひなたのこと好きなん？」

ズザ――

竹中が野球のヘッドスライディングみたいな恰好で見事にずっこける。

「な、な、なんだよ。そ、そんなことあ、あるわけないだろ」

面白いほど動揺をみせる竹中は、紗季たちの言うとおりにバレてな
いと思っっているらしい。この前の試合でもソコを突かれたのに、意
地でも好きなことを認めないなんてある意味すごいと思う。まあ、
なんにせよ話が進まないでコチラが折れることにする。

「じゃあ、仮定の話でいいわ。好きな子がおるってどんな感じ？」

「え？ 仮定の話ならしかたねーな。でもあくまで仮定だからなっ」

そう念押しして、顔を少し赤く染めて話し始める。

「そ、そりゃあ、あれだ。あくまで仮定だけど、やっぱりすごい気にな
るんじゃないか？ ずっと一緒にいたいと思うし、話ができるだ
けでもうれしいしな。それにソイツにはカッコイイところ見せたいよ
な。普段からニコニコしてるやつだから悲しい顔してたら笑顔にし
てやりたいし。って、仮定だからな、仮定」

頑なに仮定なのを強調して話す竹中は、最後にはモジモジしながらだったけども、真面目に話してくれた。

「でも、いきなりなんでそんなこと聞くんだよ？」

「んー、ちょっと……な」

あっそう、と深く追求してこないあたり、竹中の人の良さがうかがえる。ただ単に興味が無いだけかもしれないけど……。こっちはかなり無粋なことを聞いているという自覚はあるから、この反応はありがたかった。とはいえ、もしだれか気になる子がいるのかとか聞かれてもうまく答えられる自信はなかった。むしろ、それを知るための質問だったわけだし……。

そんな俺達のやり取りを聞くともしに聞いていた長谷川さんが俺たちを微笑ましく思っていたり、自分に話がふられないか内心ドキドキしていたとは、俺には知る由もなかった。

そうしてコンビニからの帰り道、校門をくぐってしばらくするとなにやら定期的に聞き覚えのある音が聞こえてきた。それは、この3人では聞き間違うはずもないもので、夜の学校で聞こえるのはおかしい音だった。3人で目配せし、長谷川さんがこっちだと案内する方に静かに近づいていく。

「ひゃく——じゅう——ごっ」

音に近付くにつれ、掛け声も聞こえてくるようになる。『なにを』はもう気付いているので、あとは『誰が』という部分だけがわからなかったが、その犯人を見つけたとき2人は喜び、1人は驚きの表情になった。

そこにはお風呂上がりだろうにも関わらず、汗を玉のように浮かべて壁に向かってシュート練習をしている真帆の姿があった。

ボールが跳ねる音を聞いた時から、もしかしたらと思ってはいた。真帆があの日試合の後、練習がない日はもちろん練習のある日も家に帰ってからのシュート練習を欠かしたことがない、というのを知っていたからだ。でも、実際にこの目で見るとなにかグツとくるものがあるし、見れば長谷川さんも、どこか泣くのをこらえているような表情になっていた。

そして昼にあんな会話をした竹中を見ると、真帆を最初に見た時は目をまんまるにして驚いていたけども、今はジッと真帆の方を見たままでたたずんでいた。

しばらく3人で真帆の練習を木陰に隠れてこっそりと見ていたら、最初に口を開いたのは竹中だった。

「なあ、知ってるか？ あいつって未だにおばけが恐いんだぜ。ホントは暗いところだって嫌なくらいに……」

今、真帆が練習しているところは近くに電灯が1本あるだけで、多少は明るいかもしれないけども夜の不気味さを退けるほどではない。暗いところが恐いならなおさらだ。それでも、ないよりはマシといった程度の電灯を頼りにしてでも自主練をしたかったってことなんだろう。それを竹中も気付いたんだろう。

「俺はもういくぜ」

竹中はそう言って静かに立ち上がり、宿舎に戻っていく。その背中では、認めてもいいのか、それともまたいつもの気まぐれだと決めるのか、そう迷っているのを物語っていた。

「俺もそろそろ戻ろうかな。歩はどうする？」

「俺はもうちょっといます」

長谷川さんも宿舎に戻り、俺1人だけになる。しばらくして200を数えたところでノルマを達成したらしく、真帆の練習は終わったようなので真帆のところへ向かう。

「お疲れさん。ハイ、飲み物」

「えっ、あゆむん？　どうしてここに？」

真帆にしてみたら、突然俺が出てきたも同然でびっくりさせてしまふ。待っている間に買ってきたジュースを渡して、壁に寄りかかりながら腰をおろし、手振りだけで隣に座るように促す。

「コンビニに行った帰りにボールの音に気づいてな。それで来てみたってわけ」

「そっか」

真帆が隣に座り、汗を拭いたりジュースを飲んだりしているのを雰囲気だけで感じ、俺はずっとなんとなく前の方を見ていた。

しばらく無言が続き、そろそろ戻ろうかと思っていたら肩にふわりと淡い重みが寄りかかってきた。隣を見ると、スウスウというかわいらしい寝息とあどけない寝顔があった。

「お疲れ様」

その寝顔にもう1度、聞こえてないだろうけど劳いの言葉をかける。そして、動かずに聞こえてくる静かな音色になんとはなしに耳を傾ける。思い出すのは少し前の竹中との会話。考えるのは自分の

気持ち。

すると、5月らしい爽やかな一陣の風が草木を揺らし、俺の元に隣から汗とシャンプーの香りを届けてくれた。

「もう少しこのままで……」

そう呟いて、俺の瞼も閉じていったのだった。

21. 確かめる気持ち（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回はグラムサイト2さんからの感想にもあった歩VS夏陽を描いてみようと思っています。週末で描く気なので月曜の更新をお待ちください。

22. 一騎討ち(前書き)

予告通り、歩VS夏陽です。

頑張って描いた見たつもりですので楽しんでもらえたらうれしいです。

それでは……どうぞ。

22. 一騎討ち

〃 アダルト？トーク 〃

美星 「およ？ あれは真帆と園田か？ あらら、2人とも寝ちゃってるよ

。 ふふ、2人ともかわいい顔しちゃって……………さてと」

・
・ (昴呼び出し中)

すばる 「いきなりなんだよ、って2人ともあれから寝ちゃったのか。じゃ

あ、呼び出しは連れてけってことか？」

美星 「そう、私が真帆を連れてくからあんたは園田な」

すばる 「了解、よっと」

・
・ (それぞれ寝かしつけ中)

すばる 「で、話ってなんだよ？」

美星 「いや、なに大したことじゃないんだけどな。お前、あの子たちが

あそこにいるの知ってたのか？」

すばる 「？ ああ。途中まで一緒にいたしな。って、いだだだだだ？！」

美星 「じゃあ、お・ま・え・は、こんな遅くに私のかわいい教え子を残

して1人帰ったっていうんだな!!」

すばる 「いだだだだっ! まさか2人とも寝ちやうなんて思わなかったし…

…。ちよ、そこはそっちに曲がらな——」

美星 「天・誅——!!」

すばる 「ぎゃ——!!」

翌日、なにか物音がして目を覚めました。

「んー、あれ? 竹中がいない?」

軽く伸びをして部屋を見渡すと、竹中のふとんだけ空だった。長谷川さんはまだ寝ているみたいで、

「ううう……ミホ姉イタイ、……ミホ姉……こわい……」

一体どんな夢を見てるんだろう。すごい気になる。

あれ？ それはそうと、俺ってなんでふとんで寝てんだろ？ 確か昨日は、真帆の練習が終わるのを待ってたよな。そのあとは………そうだ！ 真帆が寝てしまって、すぐ起こすのもなんだからって待ってたら俺も寝たんだ。うーん、だしたら誰かが連れてきてくれたんだろうなあ。まあ長谷川さんだろうから、あとでお礼言っとかないとな。

ひとまず、竹中を探してみようか。といってもある程度予想はついてるんだけどな……。

「やっぱ、ここやったか」

「なんだ、園田か」

竹中がいたのは予想通り、体育館だった。

「いつもの朝練？ それとも、昨日の真帆の練習に感化されて？」

「ふんっ、どっちでもいいだろ」

プイっとそっぽを向く竹中に思わず笑ってしまう。なんとなく吹っ切れたような表情を見せているので、真帆のことは気持ちの整理はついんだだろう。そして、それはきっといい方に転んだんだと察しがついた。

どうせ朝練してるだろうと思っていたので、俺もジャージを着てきている。なので、便乗して俺も朝練をさせてもらおう。軽くストレッチとウォームアップを済ませる。

その間、竹中はレイアップやセットシュートの練習、ドリブルの練習を繰り返していた。それを横目で見ながら思うことは、やっぱり竹中は上手い、ということだ。セットシュートをとっても智花ほどではないけど、きれいなフォームでどの角度でもほとんどはずすことなくシュートを決めている。

「さてと、ウォーミングアップはこんなところかな」

程よく体が温まったところで俺もドリブルの練習を始める。右手、左手、それぞれで練習をやってシュート練習に移る。すると竹中が話しかけてきた。

「なんかお前のドリブルって、こう……なんていうか柔らかくねえ？
なんかコツとかあるのか？」

「え？ そうなんかな？ よくわからんけどな。まあコツっていうかドリブルする時はヨーヨーをイメージしとるけどな」

ヨーヨー？ と首をひねる竹中に一応さらに説明を重ねる。

「なんていうのかなあ、ボールをつくっていうより引き寄せるっていうイメージ？ まあ実際はそんな無理やからあくまでイメージやけどな」

「ボールが手元に来るときに、手を引いて衝撃を受け流す感じか？」

なんとなくその感じで合ってると思ったので、そうそう、と頷いておく。すると竹中は、こんな感じか、と言ってドリブルの練習をし始める。どうやら今のを参考にしているみたいだけど、さっきまでとの違いはよくわからない。いつまでも見ても仕方ないので、俺も中断していたシュート練習を再開する。しばらくすると、ドリブルの練習をしながら竹中が話しかけてきた。

「なあ、お前って前の学校でもバスケ部だったのか？」

「ああ、そうや、よっ」

シュートを打ちながら返事を返す。

ガッ

くそ、はずした。ボールを拾いに行くと、竹中はドリブルの練習を止めてこっちにきていた。

「なあ、せっかくだし勝負しようぜ。お前がどんな選手か見てみたいいな」

「ええな。おもしろそーや」

竹中からの申し出に断る理由もなかったし、俺も竹中とやってみたいと思っていたので2つ返事で了承する。

ジャンケンで勝ったので俺からの先攻になる。2人でスリーポイントラインに移動し、パスの受け渡しをしてスタートした。

まずは、様子見ということで俺は高めにドリブルをして竹中の出方をうかがう。竹中の方も、つかず離れずの絶妙な距離でタイミングを計っている。

「こいよ」

「言われんでも」

不敵な笑みとともに言われ、こっちも思わず買い言葉的なものを返して、覚悟を決めグツと体を沈める。それを見て竹中も表情を真剣なものに切り替る。

俺から見ても右にドライブを仕掛ける。すかさず竹中がコースを塞ぐので、ターンをかけて向きを左に変える。

「あめーよ」

竹中も予想していたんだろう、抜ききれずにしっかりとマークされたままだ。でも、今ので抜けるほど甘くないのはわかっていた。さっきの攻防で、すでにミドルポスト付近にまでは近付いているので、かまわずにシュートを放つ。初見では多少のマークは関係ないと自信をもっているフェイダウェイシュートを。

「なっ！」

驚きながらもブロックしようとジャンプしてきて、なおかつもう少しで届きそうだったのはさすがだ。でも、ボールは無事にネットを揺らした。

「ふう……。まずは1点リードやな」

転がるボールを拾って竹中に渡し、さっきのお返しとばかりに不敵な笑みでそう告げる。

「フエイダウェイか、やるじゃねーか。けど、今度はこっちの番だ」

再びスリーポイントラインに移動し、今度は竹中の攻撃でスタートする。

ボールの受け渡しをやって、竹中がリズムをとるために2、3回その場でドリブルしてから一気に攻め込んでくる。こっちも油断なく構えていたのであせらずに対処する。

俺よりも断然キレのあるドライブで踏み込んでくる竹中をなんとか抑える。勢いを止めることには成功したけど、すぐさまフロントチェンジで逆をつかれた。少し体勢を崩されたけども、抜かれることはなくしっかりとついていく。すると竹中が急停止し、つづいてさっきよりも鋭いドライブで仕掛けてきた。

「こんにゃろ！」

完全に意表をつかれた俺の抵抗も空しく、抜かれてレイアップを決められてしまう。

「これで同点だ」

そのままボールをこっちに渡してきて、どうだと言わんばかりの顔をしてくる。やられっぱなしは気に食わないので、すぐにラインまで移動する。

「もう1回いくで」

「おう」

またボールの受け渡しをやって、気合いを入れる。今度は抜いてやる気で突っ込む。しかし、しばらくフェイクの応酬をやるけど一向に隙ができない。男バスのエースはディフェンスも上手いみたいだ。このままじゃ埒があかないので勝負にでることにする。

まず、目線と足の動きでフェイントを入れてからレッグスルーで右に、当然抜くことは無理だ。すかさず、フロントチェンジで左へ。

「いかすか！」

これにも少し体勢を崩せたけども抜くには至らなかった。……でも俺もこれで止まるつもりもない。フロントチェンジで受けたボールをそのまま、もう1度右にレッグスルーで揺さぶる。

「なにっ?!」

フロントチェンジですでに体勢が崩れていたので、2回目のレッグスルーに竹中は反応できなかった。そのまま抜き去りレイアウトを決める。

「またリードや」

「やってくれるな」

どうやら竹中の負けず嫌いに火をつけてしまったらしい。顔は笑っているけども、言葉の端々から負けねーぞオーラがにじみ出ている。こっちも元より負けるつもりはないので真っ向から迎え撃つもりだ。

ボールを拾って、スタート位置について4回目のボールの受け渡しをする。やっぱり竹中のドライブは要注意だと思うからさつきよりも少し離れてディフェンスにつく。

「いいのか？ そんな位置で。……………それならっ」

「しまっ?!」

パサッ……

そのままの位置から打たれたシュートは無慈悲にもゴールに吸い込まれていった。

「そら、同点だ。なににも外から打てるのは湊だけじゃねーってことだ」

「にゃろー」

そうして、俺と竹中は入れて入れられて、止めて止められてを飽きることなく続けた。もう何回やったか数えるのも面倒になってきた頃、外が少し騒がしくなってきた。正確には騒がしいのが近づいてきていると言った方がいいか。

「あー！ やっぱここだった。すばるーん、あゆむんもナツヒもいたよーっ」

扉を開けて入ってきたのは案の定真帆だった。するとすぐに長谷川さんたちみんながやってきた。

「ここにいたのか、起きたら2人ともいないから焦ったよ」

どうやらみんなで俺たちを探していたらしい。確かに黙って出てくるのはまずかったかな、なにか書き置きくらい残しておくべきだったか。なんて少し反省していると、長谷川さんが竹中を見ながら、

「今から練習するけど………竹中もやってくか？ みんなと一緒に」

と、竹中を練習に誘った。長谷川さんの顔がニヤつきそうになるのをこらえているように見えるのは、きっと長谷川さんも竹中の心境の変化に気付いたからだろう。

「ナツヒっ。あたしはまだ認めてねーぞ。だからタイマンで勝負だっ！ 今度こそ追い出してやる」

「バカが、百年はえーて、のっ」

竹中をビシッと指差して啖呵を切る真帆に、対する竹中は持っていたボールを真帆に投げ渡してさらに続ける。

「今のお前じゃ相手になんねーよ。そんなの俺が納得できない。ケンカ売ってくるならもっと上手くなってからにしろ」

そう言って真帆に背を向ける竹中に、真帆はさらに突っかかる。

「な、なめんなよ。あたしだって………って、ちょ、離せってー」

なおも竹中に詰め寄ろうとした真帆を、紗季たちが引っ張って更衣室に連れて行った。真帆に背を向けたことで俺の方を向いている竹中は、若干困っているような、呆れているような顔をしていた。

「『今のお前じゃ』『もっと上手くなってから』やって」

「なんだよ」

ニヤつく顔を抑えられずにさっきの竹中のセリフを繰り返す。竹中は、くそっ、と言って後ろ髪を搔いて照れている。それを見て余計にニヤついてしまった。

「それよりっ！！ 勝負は一旦引き分けだな。次は勝つからな」

「こっちのセリフやわ」

同点で引き分けになった勝負の終了を告げる竹中は、照れ隠しの為か少し声が大きかった。

そうこうしているうちに、真帆たちが着替えを済ませてやってきたので練習を開始した。おそらく竹中にとっては普段の練習よりも軽いメニューになってしまったけども文句を言わずに、真帆も竹中のことを意識しつつも追い出したりはしないで練習に励んだ。

おそらく、あとひと押しあれば2人の溝はなくなるんじゃないか

と見えるような時間だった……。

22. 一騎討ち（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

どうでしたでしょうか？

感想が来るのが恐いですね。表現が悪かったり、これおかしんじやね？ 的なところがあれば指摘お願いします。

23. 仲直り（前書き）

いやはお気に入り100件いったー！！　と思っただら徐々に減っていき今や97件に……………。

お気に入り件数が減るのってすごいショックですね。

これからも頑張って描いていききたいと思いますので、よろしく願います。

それでは……………どうぞ。

23. 仲直り

〃 ガールズトーク 〃

まほまほ「すばるん、そといてもいいって！ なあさき、じんじやのこの

ひろばだったらいけるんじゃない？」

紗季 「そうね、あそこならいい木もあるかもしれないわね」

あいり 「じゃあ、私とひなちゃんデコンビニに行くてくるね。買ってくる

のはこのメモを見ればいいよね」

ひなた 「おー、おつかい行ってくる」

湊 智花「でも、みんないいの？ せっかくお休みなのに……」

まほまほ「いいんだって、あたしたちがやりたいんだから」

紗季 「そうよ、みんなちよつでも練習して早くうまくなりたいのよ。も

ちろん、私もね」

湊 智花「みんな……。うん、わかった。なら私も精一杯協力するね」

昼になるまで練習をやって昼食を食べた後、午後からは男バスの練習があつて体育館が使えないということで自由時間になった。真帆たちは長谷川さんから外出許可をもらいどこかへ出掛けている。俺もさそわれたけども断つたので今は宿舎の中だ。なぜ断つたかと言うと……

「まったく、理不尽だ」

真帆たちとは反対に、外出禁止を言い渡された竹中が1人ではヒマだろうと思つてのことだ。男バスの連中に見つかるマズイらしく、本来の練習にすら行かせてもらえてないので不機嫌オーラがにじみ出ている。

「まあ半分自業自得やし、あきらめることやな」

……そうなのである。竹中がこの命令を素直(?)に聞いているのは脅迫を受けているからだ。長谷川さん曰く、もし従わなければ竹中がこっそり捨てたテストを家庭訪問の時に持っていくと言われ

たらしい。それを聞いた時、えげつなねえ！　と戦慄してしまった。

そういうことで宿舎の和室に竹中と2人でいるという訳だ。如何せん既にヒマを持て余してしまつて、なにをしようかと考えてしまふ。

「よしよし、ちゃんと部屋に残ってるな。それにしても園田は別に智花たちと出掛けてもよかったのに」

「いやまあ、かまわないですよ。それはそうとボールなんて持つてどうしたんです？」

どこかへ行っていた長谷川さんが戻ってくると、その手には馴染み深いボールがあった。

「まあヒマしてるだろうと思つてね。これで少し遊ぼうかなつてね」

そう言つて入口の付近に長谷川さんが座つたので、3人でトライアングルを作るような配置になつた。

「そら、パスっ」

窓際で不貞腐れながら外を見ていた竹中に長谷川さんが持つていたボールをパスする。竹中は長谷川さんの方を気にしていないよう

な態度だったのに、そのパスにはしつかり反応した。

「ほら、パス」

今度は竹中へ俺の方へパスするように指示する。

「こんなのやってなにになるんだよ」

文句を言いつつもちゃんと俺にパスをしてくる。竹中からパスをもらった俺は、そのまま手を広げて待ち構えている長谷川さんにパスする。

「こうやってボールに触ってるだけでも地味に意味はあるよ。それに座ってやってたら上半身が安定するしな」

もう1度竹中にパスをしながらこのパス回しの意味を話す長谷川さんが、それから、と後から付け加える。

「くれぐれも備品を壊さないように気をつけてくれよな。もし壊したらミホ姉に何言われるかわからないからな」

それからしばらく他愛ないことを話しながらパス回しを続ける。

何周したかわからなくなってきた頃、竹中が話しかけてきた。

「……なあ園田、真帆は才能あると思うか？」

「うーん、あるんやないかな。あの上達具合はそう言ってもいいんじゃないかな。このままやったら、そう遠くないうちに俺なんて抜かれちゃうかもな」

なんでそんなことを聞いてくるのかわからなかったけども、思っていることをそのまま話した。

「やっぱ、お前の眼から見てもそうなのか。……くそっ、不公平だ」

すると悔しそうにも諦めているようにも見える顔をする竹中を見て、ああ嫉妬してるんだなあ、とわかってしまった。

「確かに真帆は才能あると思うし、俺も抜かれるかもしれんけどそう簡単には抜かれる気はないで？ それに才能なら智花だってバツグンやろうし、その智花にだって俺は追いつくつもりやし、追い越すつもりやよ？」

ニコっと笑ってそう言う俺を竹中は、どこか驚いた顔で見ってくる。

「それに天から与えられた才能を持つ人を『天才』っていうならさ、俺たち凡人は努力に秀でた才能を持てばいいんやよ。……そう、『秀才』になればいいんや」

さらに言い募った俺を見る竹中は呆然としてしまっていた。いいことを言っただつもりになっていただけ、竹中が何も言ってこないの
で段々と恥ずかしさがこみあげてきた。

「園田はいいこと言うな。うん、その通りだよ。でも、智花や真帆の努力を『才能』ってだけでなかったことにするのはダメだぞ。そこはしっかり認めてあげないと」

顔が赤くなっているか心配していると、思わぬところから評価の
声があった。俺も竹中もそろってうなづく。

「じゃあ、秀才を目指すなら練習しないと。外行こうか」

「外出禁止じゃなかったのかよ」

長谷川さんの提案に竹中がジト目で指摘する。すると長谷川さんは、ちよつと考えるそぶりをしてからこう言った。

「ようは男バスの子らに見つからなければいいんだろうし。裏口か

らこつそりであれば大丈夫だろ」

「なら、竹中。このあたりで練習できそうなどこってある？ ゴールがあれば最高やけど、無理やったら広場やな」

そうと決まれば、土地勘のある竹中に練習場所の心当たりを聞いてみる。しばらく考えていた竹中は、心当たりが思いついたみたいで俺と長谷川さんを見た。

「この近くに神社があって、そのそばに広場がある。ゴールはないけどドリブルの練習くらいはできる」

そう言うや否や、玄関の方へ行ってしまう竹中を追いかけて俺も部屋を後にした。

「おい、なにしてんだ。おいてくぞ！」

部屋から出てくるのが遅い長谷川さんを竹中が怒り、やれやれといった顔をした長谷川さんが出てくるのを待って、その広場へ出発したのだった。

「ちっ、しくった。そりゃ学園の外で遊ぶとなったら、まずここだわな。考えるべきだった」

着いて中を見た途端、そう言って帰ろうとする竹中を長谷川さんが引きとめている。なぜ竹中が帰ろうとしているかという、広場には先客がいたからだ。それも見知ったメンツが、だ。

広場にいたのは真帆たちだった。それも今は、真帆が愛莉に肩車をされて、それを下から他の3人で見ていたといった感じだ。もしかして真帆たちのしようとしてることって……。

「なにしてんだ？ あいつら」

長谷川さんの説得により竹中が戻ってきた。どうやら竹中は真帆たちのしようとしていたことがわからないらしい。バスケ好きなら1度はやろうとすることだからわかりそうなものなのに……。もしかして竹中の家にはあるのか？

「アイリーン、もうちょい右。あと1歩」

「わ、わかった」

そんなことを考えているうちに真帆たちの作業は最後の段階に來ていた。底の抜けたバケツをロープで木に結びつけようとするけども1人でやるには難しい作業だ。

「あれ、なにやってるのか知ってんだろ？ 教えろよ」

竹中が長谷川さんに答えを教えろとせがむ。長谷川さんはこの光景を見た時から真帆たちの意図に気づいてたんだろう。だから竹中を説得してまで引き止めたんだろうし。

「あれはな、ゴールを作ってるんだよ。自分たちの手でな」

長谷川さんがそう言った瞬間、バツと真帆たちの方を振り向く。その顔は驚きを隠そうともせず、ただ驚愕に染まっていた。

「なんでだよ、今は自由時間のはずだろ？ なのになんで……」

そういう竹中は表情を困惑に変え、ジッと真帆たちの方を見つめる。その目には、真帆たちの行動がどう映っているのだろうか。確かめる術はないけども、きっと『あと一押し』をやるなら今だろう……。

「好きなんやよ、バスケットが。自分たちでリングを作ってまでやりた
いと思ってしまうくらいに、な」

「……………なんだよ、まだ1カ月くらいしかちゃんと練習してない
くせに。……………にわかにくせに」

認めるか認めないかを迷うことを表すように唇を噛んで、リング
を作ろうと必死になっている5人を見つめる。なかなかロープがう
まく結べずに苦勞している真帆、おぼつかない足取りで真帆を支え
る愛莉、少し離れたところでリングの位置を見ている紗季、肩車の
動きに合わせて首を動かしているひなた、手伝えないもどかしさか
ら愛莉の周りを動き回る智花。それぞれを順番に見つめ続ける。

「それに知っちゃったからな、バスケットの楽しさを。練習して上手く
なる実感や、みんなの役に立てるっていう高揚感、それに試合に勝
つ喜び。これは、竹中のおかげでもあるな」

未だ真帆たちを見ている竹中の背中を押すように言葉を紡ぐ。最
後の皮肉に竹中が笑ったのがわかった。

「それを知ったら……………もう抜け出せんよな？ それは竹中が1番わ
かっとなのじゃない？」

「ふっ、そうかもな」

そう言っただけで呆れながら苦笑する竹中を見て、俺はもう大丈夫だと思えた。だからあとはキツカケだけだと思い、竹中の背中を叩きながら、こういうのだった。

「先行くからな」

「お、おいっ」

ついてこいよ、とは言わなくても大丈夫だろう。現に少し離れてしまったけど、後ろで「仕方ねーな」という声が聞こえた気がした。照れ隠しに頭を掻いている仕草が眼に浮かぶようだ。

「真帆ー、ちょっと左に傾いてるぞー」

「わっ！ 歩じゃないの」

紗季の隣まで行き、早速真帆にリングの傾きを指摘したら紗季に驚かれてしまった。俺の声を聞くなり、勢いよく真帆が振り向いたので危うく愛莉が倒れそうになってしまい、あわや大惨事になるどころだった。

「あゆむん！ 来たんだ。それと……………」

最初は笑顔だった真帆が、後半になるにつれ段々しかめっ面になっていき俺の後ろの方をみるようになっていった。真帆があんな反応をするってことは、ちゃんと来たみたいだな。ニヤけそうになる顔を抑えて振り向くと、長谷川さんの腕を引っ張ってこっちにくる竹中がいた。

「おー、たけなかとおにいちゃんも」

「……………竹中君？」

真帆の視線に気づいて、竹中と長谷川さんに視線が集まる。真帆だけはすぐにそっぽを向いて取付作業に戻ってしまった。そうして、竹中は俺を通り過ぎて愛莉のそばまでズンズン進んでいった。

「おい」

「はいっよ」

愛莉のそばまで行った竹中は、長谷川さんに『何』を言わないまま言葉少ななに促す。何を頼まれているのかわからないほど鈍くはないらしく、その場がかがんで、またすぐ立ち上がった。愛莉のそばに、竹中を肩車をした状態で、だ。

「な、なんのつもりだよ。余計なお世話なんだよ。そんなことしたって許してやらないんだからな！」

そう言って竹中が横にくと、すぐに真帆がそっぽ向いてしまう。竹中が手伝ってくれることを喜ばしく思い、真帆の態度にやれやれといった雰囲気は他のメンバーに広がる。

「あ、謝れ。手伝いたかったら謝ってからだっ！」

「悪かったよ」

「謝っちゃうのかよっ!？」

要求に素直に従った竹中に、真帆は芸人バリのツツコミを披露した。さらに竹中は頭を下げながら続ける。

「シカトして……………悪かった。なんか勘違いしてた。お前のこと」

「……………っ!？ や、やめろよな、そういうの。なんか恥ずいだよ。そ、それに『らしく』ねーし。……………わかった。わかったからもう頭あげろ」

顔を真っ赤にした真帆は、あわあわしながらも竹中を許すと口にした。……………これで一件落着かな。

「ロープ貸せよ」

顔をあげた竹中はそのまま真帆に手を伸ばす。対する真帆はまだ顔は赤く、目線をそらしたまま、それでもしっかりと竹中にロープを渡したのだった。

そうして2人で協力して無事に設置できたゴールを使って日が暮れるまで練習したのだった。

23. 仲直り（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回はパンツ事件の回になる予定です。真帆成分多めになると思いますので楽しみに！。

24. お宝返却大作戦（前書き）

調子にのって描いてたら今までで最長になってしまいました。
結構長いと思いますのでゆっくり読んでください。
それでは……どうぞ。

24. お宝返却大作戦

〃　　〃　　ガールズトーク　〃　　〃

紗季　「そっちにいた？」

湊　智花「ううん。こっちにもいなかったよ」

あいり　「どこ行っちゃったのかな、ひなちゃん」

まほまほ「だだだ、だいじょうぶだって、きっと。ヒナもこどもじゃないんだし、そ

のうちもどってくるって」

紗季　「はあー。真帆、あんた恐いんなら宿舍で待ってたら良かったじゃない」

まほまほ「い、いやだっつーの！　ひとりでいるとかこわいじゃんっ」

紗季　「なら、前にいる歩にでもくっついてたらいいわ。ふふふ」

現在時刻 19・14

俺たちは校内探検隊となっていた。その理由はというと、つい30分ほど前にひなたの姿が見えないと紗季から長谷川さんに話があり、みんなで探そうということになったからだ。長谷川さんと俺を先頭に、後ろから真帆たちが着いてきている形で校内を探して歩き回っている。

夜の学校はやっぱり不気味で、探し始めた当初から約1名はビクビクしっぱなしで、懐中電灯を両手でしっかり持ち、なぜか頭に鬼の角みたいになんか2本バンダナで取り付けるといふ奇妙な格好をしている。

まあ言わずもがな、その1人というのは真帆のことで、しばらく前からは俺のすぐ後ろにいて、俺の服をちょこんと握っているのが自然について歩くような感じになっている。

「ひゃわっ?!」

そして周りの草木が、ガサツと音がする度に驚き、俺の腕にしがみついてきたりするので俺はその度に、

「大丈夫やって、ただの風やから」

と言って真帆を落ち着かせる。ということを繰り返していた。しかし、真帆がしがみついたびに真帆の慎ましい部分が当たったりするので俺の心臓が大変なことになっている。精神的にキツイのになんとか離れてもらおうと説得を試みるも……。

「あのな……真帆。えーと、その……この状態『疲れる』んやけど……」

「ええええ?! 『憑かれる』のっ。いやだああ」

と、勘違いして暴れられてしまつて余計ギュツと握られることになつてしまった。ちなみに後ろでは、

「あれよ、あれ。あれをトモもマネするのよ」

「ふえっ?! む、無理だよー」

と言つたやり取りがされていたりしたそうだ。

一通り中等部の校舎を探し終え、次は初等部の方を探すことになつただけど1つ問題があった。本来は初等部の校舎へ行くには時

計台の下を通るのだが、この時間ではもう閉まっっていて使えないということだった。かといって、行く手段がないという訳でもないのだが、その裏道は非常に暗く、今まで以上に不気味なだった。俺でさえちよつと躊躇ってしまうほどに……。

……ギョッ

そうになると、後ろの恐がり屋が平気な訳もなく、今まで以上に腕に人肌の温もりと柔らかい感触がきた。心臓が早鐘を打ち、体が強張ってしまうのも仕方ないというものだ。恥ずかしくて隣を見れないので視線を長谷川さんの方に向けると、長谷川さんも他の3人にくつつかれている状態になっていた。

「ん？　今なんか向こうで光った気が……」

すると長谷川さんがそんなことを言うので、真帆をはじめ智花たちもさらに恐がってしまう。

「ごめんごめん、じゃあちよつとここで待ってて。見てくるから」

そう言って長谷川さんは1人で奥へ入っていった。しばらく奥へ進むとなにか見つけたらしく、しゃがみこんでなにかを拾っているみたいだった。けど、しゃがんだまま一向に立ちあがる気配がない。それどころかキョロキョロとあたりを見渡して挙動不審になってしまっている。

「どうしたんやろ？　長谷川さん」

「あ、あの私ちょっと行ってくるね」

俺が不思議に思っていると、智花が暗闇に臆しつつも長谷川さんが心配なのだろう、様子を見に行ってしまう。声をはっきりと聞こえる距離でもないため、2人がどんなことを話したのかわからなかったけど、長谷川さんがかなり慌てていたのはわかった。

そのあとすぐに長谷川さんから大丈夫だということで手招きされ、みんなで奥へと進む。道中、やっぱり長谷川さんの様子が少しおかしく感じたけども、気にしてもわかりそうになかったので考えないことにしておいた。

結果から言うとひなたは体育館にいた。それも竹中と一緒に、だ。2人は体育館でシュートの練習をしていた。それはそうと竹中もないことに全く気付かなかった……。友達としてどうなんだ、と俺は1人驚愕の真実に気づいて冷や汗が頬を伝うのを感じていた。そうとはつゆ知らず、他のみんなは中の様子を見るのに必死だった。

「だからさ、ひなたの場合はひざを使っただな……」

「ぶー、シュートなのになんでひざなの？　たけなかのいうことむずかしい」

俺も細かいことは気にしないようにして、改めて中の様子を覗いてみる。ちなみに今、俺たちは特に隠れる気もなく見ているのだが、よほど集中しているのか2人が気付くそぶりはない。まあ竹中に関しては、ひなたしか見えていないと言った方が正しいかもしれないけども……。

俺がそんなことを考えている間も2人の練習は続いていて、

「おー？ ひざをグツてやったらゴールにとどいた」

「そう！ その感じだって。忘れないうちにもう1回やってみろって」

ひなたのシュートはリングに届くかどうかといったレベルで、まだまだ先は長そうだ。けど、竹中がこれを途中で投げ出すとはとても思えない。こと、ひなたに関して竹中はこれ以上ないコーチになるはずだ。

「居場所もわかったし、そろそろ戻ろうか」

長谷川さんがそう提案し、みんな頷いたので竹中たちを残して先に帰ることにした。もちろん帰りも、ガサツ、ビクツ、ギュツと三連コンボは続き、宿舎に着くころには練習したよりも体が重く感じたのだった。

竹中たちが戻ってきてから先に女子がお風呂に入り、そのあと男子が入ることになった。ちなみに2人が戻ってきた時には、みんなしてニヤニヤしながら出迎えてあげたのは言うまでもないことだろう。

3人で他愛のないことを話しながらお風呂に入って1日の疲れを癒す。俺は他の人よりものぼせ易いらしく、あまり長湯をするほうではないので2人よりも早く上がることにした。

「なんや？　これ」

あらかた服を着替え終えたところで脱衣室の籠のところに『なか』が置いてあることに気付いた。気になったので確かめてみると、

「……………」

その物体を手にとって確かめた瞬間、カチーンと効果音がつきそ

うな感じで体が銅像になってしまふ。なんとか理性を保ち、ギギギと音がなりそうな動きで『それ』を裏返してみる。

「『5－C、はかまだ ひなた』か。あとクマ」

裏返すとそこには、丸っこい文字とかわいいクマのイラストが描いてあった。

俺が見つけたものがなにか、もうおわかり頂けたでしょうか？
それでは正解をご一緒に……………さん、はいっ。

「パンツっっ?！」

始めに確かめた時にすでにこれがパンツだとわかっていただけでも、
ようやく理解が追いつき、心の声に合わせて叫んだ。

それにしても、なんで5－Cなのかはおいという……………ひなたのか。
大方さっきのお風呂で忘れたか、なんかかな？ でも俺たちが入る
時にはなかったような気がするんだけどな。

幾分か冷静になった頭で考えていると、ガラッと扉を開けて竹中
がお風呂から上がってきた。

「なんだ、まだいたのかお前」

「どっせーい!!」

俺が上がってからそここの時間が経っていたので、未だに脱衣所に俺がいることを不思議に思いながら竹中が隣に来て着替え始める。思わず変な声をあげて、慌てて『例のブツ』が見えないように隠す。

……そうだ。俺なんかよりこいつに渡した方がいいよな。うんっ、好きな子のものならなんでも欲しいはずだし。

「なあ、竹中。いいものやるよ。そらっ」

あとから考えれば、最善は大人しくひなたに返すことだとわかったのに、この時は冷静になったように思えてまだまだ混乱していたんだと思う。なので、やっかいなものを押しつけるために竹中に『例のブツ』を投げ渡す。

「ん？　なんだよ、これ……………って、えええええ！？　ちょ、おま……………って、いねーし!!」

竹中がパンツに気を取られているうちに、智花のドライブもかくやというスピードでお風呂場を後にする。後ろから竹中の叫び声も聞こえてきたけど一切無視だ。

そうして無事にやっかいものを手放すことに成功した俺は、安堵

する間もなく次の行動に移る。すなわち、この後必ずくるであろう追及を逃れることを考えるのである。と言っても、その手段はもう思いついているので後は実行に移すのみだ。

お風呂場を出た俺は廊下を全力で走り、男子部屋に入って急いで布団を敷く。つまり作戦とは『寝たフリ』だ。なんとか竹中たちが戻ってくるまでに布団を敷くことができたので急いで布団に入る。

「歩君、なにをそんなに急いでたのかな？　おやすみも言えなかったよ」

開けっぱなしの扉から女子部屋にいる智花の声が聞こえてきた。ごめんな、こっちはそれどころじゃないんだよ、……………マジで。

しばらくすると、ダダダダ、と勢いよく廊下を走る音が聞こえてくる。ついに来た、と覚悟を決め、表面上は眠っているように見えるように寝たフリをする。

「おい、園田っ！　あれはいったい……………って、もう寝てるし？　！」

案の定、廊下を走ってきたのは竹中で男子部屋に飛び込んでくる。……………よしよし、ちゃんと騙されてるな。

「……………って、そんなわけあるかー！　！」

「ぶふっ?!」

スースーと寝息をたてている俺（演技）に竹中は思いっきりボデイプレスを仕掛けてきた。

「こんな短時間で寝れる訳ないだろーが?!」

……………ですよねー。

いたたた、とお腹を押さえて起き上がる俺に竹中は質問の雨を降らしてくる。

「さっきのおたか……………じゃなくて、あれはどうしたんだ？　な
んでお前がもってるんだ？　クマさんパンツはかわいいよな？　俺
はどうしたらいい?!」

よほど興奮しているのか質問がおかしい。1つおかしなものも混じっていたし、最後はどうしたらいい、ときたまんだ。

「うーん、俺もお風呂場で拾っただけなんやけど。というか持ってきたん？ そのまま置いといたらよかったのに」

「バカっ、そんなもったいな………じゃなくて、あいつが出てきから慌てて出てきちまったんだよ」

さっきから本音がダダ漏れなのはツツコムべきだろうか。……まあそれはおいといて、やっぱりこういうのは本人に返すのが1番だろうな。

「やっぱり、ひなたに返すのがいいんちゃう？ まあ竹中が持つときたいっていうなら黙っとくけど？」

「バババ、バカヤロっ、いらねー………よ、こんなの」

今あきらかに迷うそぶりをみせた竹中が将来下着ドロにならないように願おう。

「じゃあ、返そうか。直接………は、さすがに無理やから夜中にこっそり荷物に入れとけばいいんちゃう？」

「そ、そうだな。それでいこう」

そんな話をしていると長谷川さんが女子に「おやすみ」と言っているのが聞こえた。程なくして部屋に戻ってきたので竹中が慌てて

パンツを鞆にしまう。

「ん？ どうしたんだ竹中、そんなに慌てて。風呂場でもおかしかつたし、どうかしたか？」

「な、なんでもねーよ」

竹中はあきらかに挙動不審だったけども、長谷川さんは気にしなかったらしくそのまま寝ることになった。

「……………ろ。ひな……………返し……………ぞ」

夜中、隣から声が聞こえてきて目を覚めました。はっきり聞こえなかったけども、この声は長谷川さんだろう。どうやら竹中を起こしているらしい。まだ眠気が勝っているので寝たままの体勢で会話を聞くことにする。

「(どどど、どうしてそれを……………)」

「（それは、俺があそこに置いたからだ）」

女子の部屋に聞こえないように小声で話す2人の会話は聞きとりづらかったけども、どうやら長谷川さんには竹中がひなたのパンツを持っていることを知られていたらしい。しかも、あれは長谷川さんがお風呂場に置いたものだという。つまり……………。

「（じゃあ、なにか？　あれはもともとお前の持ち物だったと？）」

竹中も俺と同じことを考えたらしく、長谷川さんに聞き返す。

「（ああ、全くもってその通りだ）」

あんまり聞きたくなかった答えを聞いてしまった。まさか長谷川さんがそんな人だったなんて……………。

「（この、変態腐れロリコンめっ!!）」

俺の中で長谷川さんに対する評価がダダ下がりする中、パシッという音とともに竹中の怒った声が聞こえてきた。音から察するに、どうやら竹中が長谷川さんに殴りかかるも止められた、というところだろう。

「（人のことは言えんよな？ お前も懐にしまった時点で俺にどうこう言える権利はないんだよ）」

「（ち、ちがう。これは渡されて混乱してるところにお前が来たからバレないように、つい……）」

言い争う2人の声には妙に力がこもっているので、おそらく竹中が殴りかかったままで、力比べみたいな状態になっているんだろう。

「（俺も同じだ。お前たちを探している時に、それを見つけてどうしようか考えていた時に智花が話しかけてきて、それで思わず……）」

ああ、もしかしてあのすごく暗いところでの件かな。そうかあの時は確かに長谷川さんの様子はおかしかったもんな。理由がわかったので長谷川さんの評価は元に戻しておこう。

「（とにかくだ、今は竹中の手にひなたちゃんのパンツがあることが問題なんだ。たとえお前が持っていたって百害あって一利なし！ さっさと返しに行こう）」

「（……わかった、行くよ）」

もともと俺と返しに行くつもりだったので、竹中はあっさりと長谷川さんの言葉に頷く。予定は多少変わってしまったけど、これで無事に返せるなら俺としても楽なので喜ばしいことだ。2、3の打ち合わせを行い、2人の気配がなくなったので隣の部屋に行ったのだとわかった。俺は2人のことが気になったので、寝ないで向こうの音に集中していることにした。

ガラガラガシャーン！！

しばらくすると、何かが大量に落ちる音がして、ガヤガヤと騒がしくなった。

「2人が戻ってこない？　これはやばいか？」

何かしらのアクシデントがあったとみて間違いなさそうなので、静かに隣の部屋の様子をうかがってみる。

するとそこには、たぶん絶対絶命な状況が広がっていた。みんなの荷物が崩れ落ちているロッカーの前に紗季、真帆、愛莉が詰め寄っている、という状況だ。あのロッカーに2人の内どちらか、もしくは2人とも隠れている可能性が高い。

ちなみに、ロッカーを囲んでいない他の2人の内、ひなたはスヤスヤと熟睡中だ。電気もついてるし、これだけ騒がしくしているの

に起きないとは、なかなかの熟睡レベルだ。もう1人の智花は、あと1つ布団が盛り上がっているのがあるので、たぶんあれがそうなのだろう。すっぽりと布団をかぶっていて姿は見えないけども消去法でそうなる。少し盛り上がりが大きい気がするけども気のせいだろう。

「あからさまにここが怪しいわね」

「うーん、……………とかげさん？」

そうこうしているうちに紗季たちがロッカーの方に本格的に侵攻を開始し始めた。愛莉は完全に寝ぼけてるな。そんなことより、2人の名譽のためにここはなんとかしないと……………。なんとか逃げ出すスキを作ればいいんだから……………。

「うわっ、どうして電気が消えるのよ?!」

「幽霊?! 幽霊でたのっ?!」

考えた末、俺がとった行動は部屋の電気を消す、だった。幸いスイッチは入口近くにあるので、ロッカーに気が向いている真帆たちに気づかれる心配も少ない。電気を消すことによって、うまく目くらましと逃げ出すスキを作れたと思う。あとはこの間に2人が逃げてくれれば……………。

「（サ、サンキュー、園田）」

「（歩っ？ 助かったよ）」

スイッチの近くにいた俺のそばを2人がお礼を言って部屋を出ていく。2人の無事を確認したので俺もさっさと逃げようとしたけども、事件はこの時起きたのである。

「真帆、早く電気をつけるのよ！」

「わ、わかった。怖いもんな」

紗季に指示され勢いよく走ってくる音が聞こえる。たぶん、というか絶対真帆だろう。俺はというと未だにスイッチのところに留まったままだ。無事に任務を達成できて気を抜いていたところに紗季の声が聞こえて体が硬直してしまったからだ。硬直自体は一瞬だったけども、ここはそんなに広くない部屋の中だ。走破してくるのに一瞬の間は十分過ぎた。加えて暗いところが怖い真帆はあまりちゃんと前を見ていなかったらしい。すると必然的に……………。

「ぎゃ?!」

「うわっ！」

こうなってしまう。

「あいたたた。……………ん？」

ぶつかった衝撃で床に仰向けに倒れこんだ俺は、腕や頭を打ってしまった痛みで顔をしかめる。すると、体の各所から痛みとともに誰かが乗っているような感じがした。さらにすぐ近くから視線を感じて、恐る恐る目を開けていく。

「あ、あゆむん？」

そこには、俺に跨るように乗っている真帆の透き通るような瞳がすぐ近くにあった。少し動けばキスもできそうなほど近い距離で見つめあう。

「……………」

「……………」

お互い視線を外すことなく、ただただジッと見つめあう。……………なんて綺麗な瞳なんだろう、少し涙目なのは暗いところが恐かったからだろうか。そんなことを考えている場合ではないことはわかっていたけども、つい惹きこまれてしまう魅力があった。

「で、歩はこんなところでなにをしているのかしら？」

紗季の一言により電気が点けられ、現実に戻される。まず真帆がバツとすばやく離れ、続いて俺も体を起こす。ちなみに俺も真帆もこれ以上ないというくらいに顔が赤くなっていた。

「どういうことかしつかり説明してもらいましょうかね」

両手を腰に当て威厳たつぷりに迫ってくる紗季がすごく恐い。さつきまでの甘い空気が嘘のように体が震えて、自然と話を聞く体制が正座になってしまふ。これが真の『氷の絶対女王政』^{アイス・エイジ}か。

それから、足の感覚がなくなってしまうくらいの時間お説教をくらう羽目になってしまった。ちなみに、解放されて部屋に戻るとスヤスヤと眠る竹中がいた。

くそー、誰のせいでこんなことになったと思ってるんだよ。

24. お宝返却大作戦（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

真帆がかわいく描けてましたでしょうか？

さて、次回更新は申し訳ないですが来週になると思います。

週末は東京ドームに行ってきますので……。

25. 臨時コーチ誕生（前書き）

奈々サイコー！！

という訳で東京ドーム行ってきました。
もうメチャクチャ楽しかったです。

25. 臨時コーチ誕生

〃 ガールズトーク 〃

紗季 「まったく、歩があんな悪戯するなんて意外だわ」

あいり 「たしかにちよつと珍しいよね」

まほまほ 「きゆうにでんきけすなんてあくしつだよな、まったく。
ゆうれいとかポ

ルターガイストかとおもっちゃうじゃんか」

紗季 「いや、あんたはうれしいハプニングがあったんだからいいじゃない」

まほまほ 「な、なにいつてんだよ。べ、べつにうれしいなんておも
ってねーよ。た

だびっくりしただけだっつーの」

湊 智花 「そ、そうだよ。うれしいなんてそんな……。はうう」

紗季 「いや、なんでトモまで顔赤くしてるのかわかんないんだ
けど……。それ

にしても電気の件は歩が犯人としても、ロッカーの荷物
はどうして外に

あったのかしら？」

夜中の騒動は、俺の悪戯ということで幕を閉じた。まあそのおかげで紗季からたつぷりとお説教をいただく羽目になったけども、なんとか長谷川さんや竹中のことはバレずにすんだ、と思う。

「なんだこれはあああ!!」

朝の静かな時間に突如絶叫が響いた。それを聞いて俺は笑いを堪えるのに必死だった。ダダダダと廊下を走る音が聞こえ、部屋の扉が勢いよく開けられた。

そこにいたのは、中世の貴族みたいなカールしたヒゲを顔に描かれた竹中だった。

「プフフっ」

「プフフ、じゃねー!!」 なにしゃがる。真帆や紗季にも見られて笑われちゃったじゃねーか」

部屋に入ってくるなり怒りだす竹中だったけども、立派なヒゲのせいで全然恐くない、むしろ笑ってしまう。犯人としては満足のいく出来だった。

「あーおかし。でも、竹中が悪いんやよ？　俺が紗季にお説教くらつてるときに呑気に寝てるんやから」

「うぐ、それは……」

笑いすぎて出てきた涙を拭いながら竹中と話す。昨日の夜、ホントはその場で蹴り起こしたかったけども、グツと堪えて大人の対応に変更したのだ。一応負い目は感じているらしく、痛いところを突かれた竹中は押し黙ってしまう。

「まあもういいけどな、仕返ししたし。それよりちゃんと返せたんやろ？」

「っ！　……………それがさ」

気まずそうにしながらカバンをあさる竹中を見て嫌な予感が膨らむ。ゴソゴソとカバンの奥の方から『それ』を取り出した。

「……………なんで返せてないんよ。俺の苦労はなんやったんよ」

「仕方なかったんだって。返そうとしたら、あの騒ぎになってさ。」

そしたら返すどころじゃなくなって、逃げるので精いっぱいだったんだよ」

竹中の手にあつたのは件のパンツだった。あんなに苦勞したのに結局返せていないとか残念すぎる。

「とりあえず竹中がもつときなよ、それ。また機会があれば返すことにしよ。もう疲れたよ」

「し、しかたねーな。じゃあ俺が預かつとくよ」

竹中のセリフは仕方なしにという風だけでも、顔はどこかうれしそうにして、またパンツをカバンにしまう。俺にとっては厄介物でしかないので、竹中に任せられて一安心だ。

そうして竹中がヒゲのことを思い出して慌てて顔を洗いに行った、真帆たちにからかわれたりして朝の時間を過ごした。昨日のことは俺のいたずらだということになっているので真帆たちと気まずい雰囲気になったら嫌だなと思っていたけど、いつも通りだったので安心した。そうして、合宿最後の練習をするために体育館へ向かうのだった。

「じゃあちよっと集合してくれるかな」

全員体育館に集まったのを確認して長谷川さんから集合がかかった。

「最後の練習をする前にみんなに相談があるんだけど、6－D戦の時のメンバーをどうしようか？ 一応みんなの意見を聞きたいんだ」

練習前のストレッチをやるのかと思いきや、長谷川さんから告げられたのは球技大会のことだった。球技大会のルールは前後半5分で、ケガなどの理由以外での交代は基本的になし、というものだった。交代ができないというルールがあるから長谷川さんもこんなことを聞いてくるんだろう。

「どうする？」

俺は隣にいる竹中にだけ聞こえるような小声で話しかける。真帆たちもみんなで視線を交わしあいオロオロしていた。女バスの5人が出るのか、それとも確実に勝てるメンバーにして俺と竹中を出す、このどちらを選ぶのかということだ。勝ちに拘るのなら後者を選ぶべきなんだけど、真帆たちのバスケットはこの5人でやることに意味がある。正直、D組との因縁にあまり興味がない俺は女バスメンバーにやらせてあげたいのだけでも、絶対に勝つと団結していた竹中がどうしたいのかが気になった。

竹中は、話しかけた俺に笑いかけるとおもむろに真帆たちの方に
向き直った。

「D組戦はお前たちでやれよ」

なかば予想していた俺とは違い、それを聞いた真帆たちはびっく
りした顔で竹中の方を見る。

「な、なんでだよ!!」

「やっぱり私たちとじゃ、……やりたくないっていうの?」

真帆が怒鳴り、紗季が悲しそうに聞き返し、他の子も一様に悲し
そうな顔をしている。

「べ、べつにお前たちのことを……認めないってわけじゃねーよ。
ただ今回は任せてみてもいいかなって思っただけだ」

竹中が腕を組んでぶっきらぼうに言っているが、恥ずかしいのか
頬が少し赤くなっている。

「で、でもそれじゃあ………」

みんなが安心したような表情をする中、今回の1件で打ちとけた竹中の不参加表明に、それでも納得できないらしい真帆が心配そうな顔をして言い募る。

対する竹中はこの反応を待ってましたとばかりに、ニヤリと笑った。

「なんだ？ やっぱり俺がいないとD組には勝てる自信ないのか？
見せてみるよ、お前の……………お前たちの力を」

竹中は不敵な笑みをしたまま、始めは真帆、最後の方でみんなを見てそんなことを言った。俺は実にうまい挑発の仕方だなと感心していた。特にあの子には効果バツグンだろう。

「上等だ。D組なんてあたしたちだけでやっつけてやる！」

案の定、すぐさま真帆が挑発に乗ってきた。

「そんなこと言われたら余計負けるわけにはいかないわね、ねえみんな？」

さらに紗季が続いて、他のみんなにも確認する。見てみると智花も愛莉もひなたも、それぞれやる気に満ちた顔をしていた。

「ありがとうっていうべきなんかな？　優しいところあるやん」

「フ、フン。別に理由の全部があいつらのためってわけじゃねーよ。たまには外から自分のチームを見るのも悪くないかなって思ったんだよ。そ、そういうお前はいいのかよ、出なくて」

半分以上からかう目的でお礼を言うと、またもや顔を赤くして言い訳をしてくる。照れ隠しに頭をかきながら話題を変えたいのか俺のことを聞いてきた。

「俺はもともと譲るつもりやったし、かまわんよ。それになにも試合にでるだけが全てやないしな。真帆たちが勝てるように教えるのが俺なりの球技大会への参加方法ってところやな」

そんな風に竹中と話していたら、真帆がこっちの話に入ってきた。どうやら向こうまで聞こえていたらしい。

「ねえねえ、ならあたしに新技教えてよ、新技。かっこいいやつ」

「え？　うーん。どうしょ」

俺としては全然構わないけども、ここは一応主コーチの長谷川さんの意見を聞いてみようと思いの視線を向けてみる。

「あはは、いいんじゃないかな。歩はこれが終わってから時間あるかな？　なにを教えるとか話そうか」

「合宿終わってからってことですか？　なら、かまわないですよ。1度、家に戻ってから長谷川さん家に行きますね」

どうやら長谷川さんも反対ではないらしく結構乗り気にいる。

「やったー、新・技、新・技」

新技の許可がでて余程うれしいのだろう、真帆はピョンピョン飛び跳ねて喜んでいる。

あれ？　紗季の様子がおかしい？　……………ああ、真帆だけ新技を教えてもらうから悔しいんだな。これは紗季にもなにか考えといてあげた方がいいやろうな。

「もう話も終わったし俺は帰るぞ、……………じゃあな」

球技大会の話が一段落したのを見計らって、竹中が帰ろうとして体育館の出口に向かう。俺を含め、みんなが驚いている中、それを止めたのは長谷川さんだった。

「おいおい、今さら部外者面なんて許さないぞ。今日……だけじゃなくて球技大会までの1週間、園田みたいみんなのコーチをやってくれ。ちなみにこれはお願いじゃなくて命令な」

長谷川さんにしては珍しい強気な態度で帰ろうとする竹中に話しかける。たぶん長谷川さんはわかってたんだと思う。竹中がこの申し出を断らないことを……。

「フン、その横暴な感じ美星そっくりだな」

頭をかきながら振り向く竹中は不機嫌を『装っている』のがバレバレだった。立ち止まったということはコーチの件は引き受けるつもりなんだろう。

「……最高の褒め言葉だよ」

対して長谷川さんは先生と似ていると言われことに思うところがあるらしく苦笑していた。

「それより、俺も手伝うって言ってもなにか策があるのかよ。練習を見るくらいはいいけど、そこからっていうのは嫌だぞ。それにあいつらの作戦は絶対に話さないからな」

「ある程度は考えてあるから心配するな。それに作戦を聞くなんて俺のプライドが許さないよ」

竹中が作戦の有無を長谷川さんに聞いていた。この合宿ではあんまりそういう練習をしてこなかったもので、てっきりぶっつけ本番なのかと思っていた。でも確かに、真帆たちだけで戦うのなら、なんらかの作戦は必要だよな。こういうことを予想していて既に作戦を考えていたならさすがだ。

「……………これは宣戦布告だ。湊っ！ 今度はお前、苦勞するぞ。あの時お前を止めれなかったのが悔しくて、最近はダブルチームの練習をやってる。もう、この前のような急造なやつじゃないからな」

「うん、わかった。でも、私も簡単には負けないよ？」

作戦は話さないと言いつつも智花への対抗策を教えてくれる竹中に、智花もやる気に満ちた眼で言い返す。

そうして、新たに竹中をコーチに加えて練習を開始し、いろいろあった合宿は幕を閉じたのだった。

25. 臨時コーチ誕生（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ようやく合宿が終わりました。

今週はちょっと忙しいですが何とかもう1本更新できるようにがんばります。

26. 信頼関係（前書き）

今回、歩がポジションの説明をしますけども作者の勝手なイメージですのでおかしなところがあれば指摘してください。
それでは……どうぞ。

26. 信頼関係

〃 交換日記（SNS） 〃

湊 智花「合宿、すごく楽しかったね」

あいり「そうだね、いろんなことあったもんね」

紗季「まあ確かにね、夏陽ともうまくやれそうだし良かったわ」

まほまほ「あんなヤツいなくたって、あたしのしんわざでらくしうだって」

紗季「そんな簡単なものでもないでしょうに」

まほまほ「へへーんだ、いっぱいれんしゅうしてすぐおぼえてやるもんねー」

ひなた「おー、ひなもいっぱい練習して役にたつ」

いろいろなことがあった合宿が終わって次の日の放課後。俺たちは本格的に球技大会勝利へ向けての練習を開始した。

昨日、合宿から帰ってきてからすぐに長谷川さんの家にお邪魔して、今回の作戦とそれにもなう真帆たちにどんなことを教えるかということ話し合っておいた。紗季のことは長谷川さんも気付いていたらしく、みんなに何かしら新しいことを教えようということになったので結構遅くまでかかってしまった。

練習には臨時コーチである竹中も来ている。ストレッチを終え、前半は全体練習を行ない、後半をいよいよ個人練習に割り当てる。組み分けとしてはAチームに智花、紗季、愛莉、Bチームに真帆とひなた、という具合だ。Aチームを長谷川さんが、Bチームを俺と竹中が担当する。なので、Bチームは実質マンツーマンでの指導という形になる。まあ、どっちがどっちを教えるなんてことは言われなくても2人ともわかっている。

「よっしゃー、がんばるぞー。なあヒナ？」

「おー、がんばるー」

Bチームの2人はやる気満々な感じだ。Bチームの練習内容はシュート練習なのでゴールの近くに移動してそれぞれのペアに分かれる。

「ねえねえ、新技ってどんなの？」

真帆が待ちきれないのか興味津津で聞いてくる。俺はニコツと笑って今から教えることを簡単に説明する。

「シュートのバリエーションを増やすんやよ。前は右やったから今度は左からのシュートを練習する。しかも、ちよつと難しいところからのシュートやから真帆のセンスも重要やよ」

「まかして！」

俺の説明を聞いて俄然やる気を出す真帆に、今回のポジションのゴールの真横の位置についてもらう。ここは、ゴールとの角度が0であり、ボードが使えない分距離感がものをいう位置になる。真帆のセンスが重要と言ったのはここにある。いかにゴールとの距離を正確に測れるかが、この位置からのシュートの成功率に大きく関わるからである。

「見ての通りここからだボードが使えんから、直接ゴールを狙うしかない。だから距離感を覚えるために数をこなしていこか。まずは入らんでもいいからリングにあてる感じだな」

「りょーかい」

そうして俺たちの個人練習はスタートしたのだった。ちなみにもう1組の方はというと、一言で言うなら『竹中が面白かった』だ。合宿中の2人で練習していた時以上にあたふたしている姿がおかしかったのだ。

「おー、はいった」

「ナイスだ、ひなた。でも、もうちょっと腕をこう……したほうがいい」

普段はツンとした態度が多い竹中が、ひなたと一緒に一喜一憂して身振り手振りで説明している様子はなかなか面白かった。

「くうー、あゆむんの言うとおりに難しいなー。でも、なんかわかってきた！」

「よしよし、その調子でいこか」

……まあ俺もあんまり人のことは言えんかな。やる気満々の真帆は練習に夢中らしく、休憩をする間も惜しんでこの日の練習が終わるまで続けていた。

そして次の日の火曜日の放課後。

俺は真帆の家に来ていた。練習のない今日も自主練を見てほしいと言われて、俺も断る理由がないので喜んで引き受けたからだ。

「よし、また入った！」

「さすがといひかなんというか。今で確率5割ってところかな」

昨日始めたばかりなのに持ち前の飲み込みの早さを発揮して、もう2本に1本の割合で決まるようになっていひる。ホントうらやましいセンスを持ってると思ひう。

「ふいー、ちよっち疲れたから休憩にしようよ」

「ええよ、そうしよか」

しばらくして真帆が休憩をしたいというので、コート脇にあるベンチで一息つくことにした。するとすかさず久井奈さんがドリンクとタオルをもってきてくれた。そのドリンクを飲みながら真帆がちよっとヒマ潰しにという感じで話しかけてきた。

「あたしのポジションってパワーフォワードっていうんだよね？
それってどんなことするの？」

そういや、前の試合が終わった時の説明は愛莉への謝罪で終わっていたから、みんなのポジションの詳しい説明はしてなかったわけ。ちよūdいから教えておこうかな。

「パワーフォワードはチームのムードメーカーみたいなもんな。フォワードっていう名の通り攻めることが多くて、ゴール下でのプレーも多いからパワーやジャンプ力も必要だな。男子にも当たり負けせんやろうし、男勝りで根性もあるし、真帆にピッタリのポジションだな」

「えへへ、そうかなー、……………って、それあんまり褒めてないよね?!」

俺が女の子に言うには少しおかしいことを言っていると、後から気付いてツツコミを入れてくる真帆にゴメンゴメンと笑いながら謝っておく。

「まったくもうー。……で、あゆむんはなんのポジションなの?」

しばらく頬を膨らましていた真帆は、ケロっと機嫌を直して俺のポジションを聞いてきた。

「俺は主にポイントガードだな。ちなみにポイントガードっていうのは一言でいうなら『司令塔』。ゲームの流れなんかの試合運びを

する感じやな。フォワード陣にパスをしたり、自分でシュートしたり」

簡単にポイントガードの説明をすると、真帆はたぶんわかってないと思うけども感心したようにフムフムと頷いていた。

「なら、もしあゆむんと一緒に試合にでたらあたしにパスとかしてくれるの？」

「そうなるはずやよ。ちょっと自慢になるけど、俺の出すパスは、今みんなで作ってるパスよりもワンランク上な感じになるな」

それを聞いた真帆は、どういうこと？ と首をかしげるのでもう少し詳しく説明をしてあげる。

「俺がパスを出すときは、相手の1歩先を狙って出すことを心がけてるんよ。だからパスをもらう方も、『受け取る』んじゃなくて『取りに行く』って感じなんよね」

まああくまで、そういう意識を持ってるって感じで、ちゃんとできているかと言われると自信はないんだけども……。

「もちろん、俺についてるマークを抜かないかんからトリッキーなパスになったり、パスを受ける方とも息を合わせないかんから信頼

関係っていうのかな？ そんなんがすごい大切になってくるよね」

ノールックパスなんかの相手の虚をつくことをやって味方も騙されたり、パスを受ける側の次の行動の予測が立てられないと、このパスは成立しない。だから、あいつならこの場面ならこう動く、といったことがわかるくらい、もしくはアイコンタクトで意志の疎通ができるくらいの信頼関係は絶対条件になってくる。

「信頼関係……………じゃあさ、そのパスの練習もしようよ。あたしはあゆむんのパスがとれるようになりたい」

真剣な顔をして、まっすぐに俺を見てそう言ってくれる真帆に、ドキッと心臓が跳ねる。吸い込まれるような真帆の瞳に気を取られていた俺は、真帆の後ろに控えていた久井奈さんが「あらあら、まああ」的な表情になっていたのに気付かなかった。

「べ、べつにいいけど、球技大会では俺とやることはないんじゃない？ それでもいいならやりたいけど、2人じゃあんまり練習にならないと思う。せめてディフェンスがおらんと……」

見つめられているのが恥ずかしくて視線をそらしながら、パスの練習をすることの問題点をあげる。すると、意外なところから解決策がでてくることになった。

「それでしたら私にお任せ下さい。あゆむん様、ディフェンスには何人必要でしょうか？」

「え？ えーと、とりあえず2人いればいいですけど……」

かしこまりました、と言ってすぐさま携帯を取り出しどこかへ連絡をしている久井奈さんを、俺と真帆は呆氣にとられた顔をして見ていることしかできなかった。

「そうです、今すぐバスケの経験がある者を2人探さない。これには真帆様の命運がかかっています。いいですか？ 真帆さまの勇気が無駄にすることは許されません。絶対に10分以内にメイドの中から2人探すのです」

久井奈さんは電話をしながら徐々に離れて行ったので、かろうじて聞き取れた内容はこれだけだった。……………そんな大げさな、と思ってしまう俺だった。

そうして待つこと約8分。

久井奈さんの命令通りに10分以内に探してきたらしいメイドさん2人が、今俺の前に久井奈さんと一緒にジャージ姿で立っている。

「お待たせしました。この2人はバスケの経験がありますので、デイフェンスとしてお使いください。2人にはあゆむん様から指示を出していただければ結構です。それでは、しっかりと真帆様と信頼関係を築いてください」

どこか含みのあるセリフと晴れやかな笑顔とともに、2人の簡単な紹介を済ませて久井奈さんはコートの外へ出て行った。残された2人は無言でジッと俺の方を見ってくる。もしか………しなくても俺の指示を待ってるんだろうな。さて、どうしたものか、と悩んでいると始めに口を開いたのは真帆だった。

「なんだよー、2人ともバスケできたんだ。ならもっと早く教えてくれればよかったのにー」

真帆は2人を知っているらしく（自分家のメイドなんだから当たり前か）バスケ経験者なのを黙っていたことに少しご立腹の様子だ。

「いえ、経験者といっても高校でかじった程度ですので、真帆様を指導できるほどではありません。なので私たちは、あゆむん様の指示に従うくらいが精一杯かと」

なるほど、それなら仕方ないかな。それにしても、久井奈さんだけかと思ったらこのメイドさんも『あゆむん様』なんだな。……もしかして、ここのメイドさんの共通認識なんだろうか？

そのことに関しては半分諦め、早速パス練習をするために2人に指示を出す。2人には俺と真帆のディフェンスを頼んだ。

そうして、始めのうちはトリッキーなパスをわざと多くして、こんなパスもある、ということを教えていく。もちろん始めから取れるわけもなく何回もとりにぼすので、真帆はその度に驚きと悔しさを表情に滲ましている。

俺の方も、何回も真帆の動きと違うところにパスを出してしまう。今までの練習で真帆のを見ていってと言っても実際に一緒にプレーをしたことは案外少ない。真帆の性格やプレイスタイルなどを考慮してパスコースを決めていく。

日が暮れるまで練習を続けて、まだまだ練習は必要だけどもうやく形になるくらいまでは俺も真帆も慣れてきた。暗くなってきたので今日の練習を終わることにした。

「ねえねえ、あゆむん。ちょっとさ、お願いがあるんだけど……」

片付けと着替えを済ませ、帰ろうと準備していると、後ろから真帆が話しかけてきた。振り返ってみると、目をランランと輝かせている真帆と、その後ろに控えている久井奈さんがいた。

「あのさ、明日から朝練にも付き合ってくんない？ さっきのパスとかシュートの練習したいなって思うんだよね。もちろんヤンバルに迎えに行かすからさ」

ダメ？ と首を傾けて聞いてくる真帆の後ろで、久井奈さんが目が笑っていない笑顔で見てくる。まさか断りませんよね、と聞こえてきそうな笑顔だ。

まあ俺もサラサラ断る気はないので、そんなことしなくても大丈夫なんだけどな。

そんなことを考えていると、いつまでも返事をしない俺を不安に思ったのか、目の前の真帆の顔がどんどん曇ってきた。そんな顔をさせたくないので、慌てて返事を返す。

「か、かまわんよ。何時くらいにする？」

俺の返事を聞いた真帆は、パアアと表情を明るくして喜んでくれた。そのあと朝の時間を決め、今度こそ家路に着いた。

次の日から、朝は真帆の家でシュートとパスの練習、放課後は練習のある日は全体練習、ない日は真帆の家で練習とバスケットの三昧の日々を過ごす。そこまでしても全然苦にならず、むしろこのまま続けばいいとさえ思っていた。

そうして怒涛の1週間が過ぎ、いよいよ球技大会本番の日がやってきたのだった。

26. 信頼関係（後書き）

ということで次回からやっ和本番です。

すっかり久井奈さんのキャラが壊れている感じになってますが温かな目で見てください。

また、少し忙しくなるので次回更新は来週後半くらいになってしまおうと思いますのでご了承ください。

27. 球技大会本番（前編）（前書き）

更新が遅くなってしまいました。

いよいよ球技大会に突入します。かなり長くなったので前後編に分けています。前半は基本原作通りに進行していきます。それでは……どうぞ。

27. 球技大会本番（前編）

〃 交換日記（SNS） 〃

湊 智花「いよいよ明日だね、球技大会」

あいり「そうだね、私たちが信じて試合を任せてくれた竹中君や歩君のためにも

勝たなきゃ、だね」

ひなた「おー、ヒナも竹中直伝シュートでがんばる」

まほまほ「ぜってーかつー!!」

紗季「真帆は歩となにかやってたんでしょ？ 結局なにしてるかは教えてくれ

なかったけど」

まほまほ「ひみつとつくんだからな。ひみつじゃないとおもしろくないじゃん」

紗季「ほんとなにしてたんだか……………」

いよいよ球技大会当日。

体育館に集合している俺たちの前には台車に載せられた跳び箱が置いてあった。

「ぎやはははは、なにこれ。ちょーおもしろい。長谷川巣箱っ！」

「あんまり笑わないでくれよ。俺も恥ずかしいんだから」

真帆が大笑いしていると跳び箱から小さく声が聞こえた。跳び箱がしゃべった………という訳ではもちろんない。犯人は球技大会を見に来た長谷川さんだった。

ついさっき、笹先生に呼ばれてついて行ってみれば、既に長谷川さんが入ってスタンバっていた長谷川巣箱があって、ここまで運んできたという訳だ。巣箱を見た時のみんなの笑顔は、長谷川さんが見に来てくれたことがうれしいだけではなかったはずだ。

「ほら、みんなもうちょっと近くに寄れ。こいつが話しやすいように」

笹先生からもっと近くによるように言われ、みんなで円陣を組む

ように跳び箱の前に固まる。それを確認して長谷川さんがしゃべり始める。

「みんな、この1週間は結構きついスケジュールだったけどよくがんばった。あとはしっかり実力をだせれば、きっと勝てるはずだ。みんなの力をD組のヤツらはもちろん、竹中や歩にも見せつけてやろう」

長谷川さんから激励をもらい、みんなの顔にやる気が満ちる。

「ここまで俺を付き合わせたんだ、勝てよな」

「俺もみんななら勝てるって信じてるから、頑張ってや」

竹中につき、俺もみんなに激励を送る。真帆の方を見ると目が合ったので、ガンバレの意味を込めて無言で頷くと真帆も頷き返してくれた。

「はあ、ほんと最近朝練も一緒みたいだし、仲がいいお2人だと」

「ねえねえ、やっぱり2人ってそうなのかな？」

そんなことを紗季と愛莉がいつの間にか少し離れて話しているの

に気付かず、俺は篁先生が乗った長谷川巢箱の台車を竹中と一緒にコートまで移動させるのだった。

これまでの結果、サッカーや卓球などの競技は終わっていてどれも互角の戦いを見せたらしく、総合優勝の行方はバスケの結果に委ねられた。そして、クラス総当たりのリーグ戦であるバスケも残すところあと1試合を残すのみになった。すなわち、ともに無敗のC組とD組の対戦である。この試合に勝った方が総合優勝となり、C組とD組の因縁の勝者になるという、男子としては心躍る展開になっている。ちなみに、今までの他のクラスとの試合はほぼ智花1人で蹴散らしたようなもので、作戦通りみんなの体力の温存に成功している。

そしていよいよC組対D組の試合開始のホイッスルが鳴らされた。

ジャンプボールは、前と同じく智花が担当する。そして合図とともに審判からあげられたボールにいち早く触れたのは………智花の方だった。ボールは真帆に渡り、すぐさま智花に返された。奇しくも前の男バス戦と同じ立ち上がりを見せる。

「愛莉っ」

「は、はあい」

これもまた前回と同じく、智花から愛莉へ高めのパスが通る。ゴール下でパスを受け取った愛莉はそのままシュートモーションに入る。

「ひゃ、ひゃうう」

と、ここで相手からの激しいディフェンスに晒され尻もちをついてしまう。ホイッスルが鳴り、相手のファールとなるけども……。

「やっぱり、こうくるよな」

「これを試合中に思いつけばよかったんだけどな。これでもう愛莉は簡単にはゴール下に入ってこれない」

シュート中のファールなのでフリースローをやっている愛莉は、見るからに怯えてしまっているように見える。

「でも、あれはやる方も覚悟がいるんだぞ。やっぱり女子にきつくだたるのは気が引けるからな」

「そうやろな。特に怯えてしまうとわかってる愛莉に、やもんな」

フリースローは2本とも外れ、ルーズボールはD組が拾った。そのまま攻め込まれ、シュートを決められてしまい先制点はD組となる。

った。

C組 0-2 D組

エンドラインからボールを受け取った智花がドリブルで攻める。すると竹中の宣言通り、気合いの入った顔をしたD組がダブルチームについた。長谷川さんから合図がきたので、智花にそのままダブルチームの相手をしてもらうように指示をする。

「————くっ！ ————このっ」

竹中が自慢するだけはある、あの智花がかなり苦しそうな声をだす。ボールを取られることはないけども、ドリブルでの突破もシュートもできないようだ。そして30秒の笛がなり、智花の個人技は通用しないことが証明されてしまう。

「よし、見たかつ！」

隣の竹中がガッツポーズをとって喜ぶ。

「おーい、今はこっちの味方やからなー。まあ気持ちはわかるけど」

「あ、ああ。わかってるっての」

竹中に指摘すると、照れくさかったのかそっぽを向かれてしまう。そうしているうちに、ボール権を手にしたD組の攻撃によって2点追加されてしまう。

C組 0－4 D組

点差を4点に広げられ、そろそろこっちの得点がほしい。と、思っていたら長谷川さんから合図がきた。この1週間の練習の成果をみせる作戦の指示をみんなに伝える。

まずは智花がボール運びを担い、センター付近まで持っていく。すかさずダブルチームが智花につく。……まずは2人。

「愛莉っ」

ゴール下とまではいかないけどもポスト付近にいた愛莉にパスが通る。間髪いれずにゴール下にいた1人がマークにつく。……これで3人。

「さ、紗季ちゃん！」

左サイドの『例の位置』で待つ紗季にパスを出す。当然、前の試合でのことからこの位置は危険と警戒してマークがつく。……4人目。

「真帆！」

そして紗季もすかさずパスを出す。渡す相手は紗季と左右対称の位置で待ち構える真帆だ。紗季と同じく、この位置でのシュートがまずいのはわかっているので慌ててマークがつく。……これで5人。

D組の連中は、これでこっちの攻撃手段は封じたと思ったに違いない。たしかに男バス戦のときなら、これでチェックメイトだった。でも、今はもうそんなことはない。この1週間頑張った成果を見せるべく、ゴール下に駆け寄り仲間に真帆はパスを出す。

「ヒナっ！」

D組は全員他のマークについているので、フリーの状態でゴール下でパスを受け取ったのは、竹中と2人で必死に練習してきたひなただ。

「おー、なかなか直伝」

そうして放たれたシュートは往生儀は悪く、リングを2回周りネットに吸い込まれた。

C組 2－4 D組

「よしっ！！ それでいい、ひなた」

シュートを決めたひなたより、喜びをあらわにする竹中をニヤニヤした顔で見る。それに気付いた竹中は慌ててそっぽを向き、「まだただけどな」なんてブツブツ言っている。

今度はD組のボールからになり、懸命にディフェンスをするも最後はシュートを決められ、再び4点差に広がる。

C組 2－6 D組

「紗季、落ち着いてね」

「……………うん、まかせて」

点を決められたのは仕方ないと割り切り、こちらボールでスター
トする。そしてさらにD組に混乱を招くために、次は紗季の成果を
見せてもらおう。

「えっ？ マジかよ?!」

今まではすべて智花が担っていたボール運びを、いきなり紗季が
し始めたのだからD組が驚くのも無理はない。それも、とても付け
焼刃とは思えないようなスムーズなドリブルで、だから余計にそう
なるだろう。

ちなみにさっきの驚きのセリフはD組のやつら……………ではなく
隣の竹中からだったりする。練習は同じ体育館でやっていたという
のに、まるで今始めて見たかのようなこの反応。いったいどれだけ
ひなたとの練習に集中していたんだって感じた。

「ど、どうする?」

「どうするったって……」

D組の狼狽ぶりは、傍目から見てもわかるほどになっていた。そ
んな中出した結論は……………

「永塚につけ、マークだ」

「わ、わかった」

智花のダブルチームを解除し、マンツーマンの体勢にすることだった。

「最悪だ……」

竹中が言うとおりに、この対策はお世辞にもいいとは言えないものだった。けども、監督もいなければ頼れるエースもいない中でのゲームで、そうそう冷静になって考えることができないのはしかたないことだと思う。

「トモっ」

マークが1人になった智花が持ち前のスキルでディフェンスを振り切り、パスを受け取りシュートを決めた。

その後D組もなんとか持ち直し、一進一退の攻防が続いた。そして前半が終了した時には、未だ4点差のまま負けていた。

C
組

6
—
1
0

D
組

27. 球技大会本番（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

後編は明日に更新予定です。後半はオリジナル展開になっていきますので楽しみにしてください。

28. 球技大会本番（後編）（前書き）

今日中にやるといったのに更新が遅くなっています。
オリジナル展開で「歩大活躍の巻」です。
それでは……どうぞ。

28. 球技大会本番（後編）

4点ビハインドのまま迎えた後半、開始直後にそれは起こった。

「きゃっ?!」

「おー???」

紗季が相手の不意をつこうと、急に動いたところにひなたが走ってきて2人はぶつかってしまう。

「いたたた……………」

幸い2人ともすぐに起き上がったけども、なにやら足を押さえて動けないようだった。すぐさま試合を止めて、養護の先生が駆け寄るのと一緒に俺達も様子を見に行く。

「特に重症ってわけではないけど、試合は止めておいた方がよさそうね」

しばらく2人のことを診ていた先生がそう言った。すると、心配で不安な顔をしている俺たちに、元気づけるようにとニッコリ笑った紗季が俺と竹中の方を向いた。

「ほら、別に大したことないんだからそんなに心配することなんてないわよ。それよりも、私たちの代わりに補欠のあんたたちがでるんだからちゃんと勝ちなさいよね」

「おー、ひなもつと試合したいけど竹中にまかせる。ひなの分がらんばってね。たよりにしてる」

そういうと篁先生と養護の先生に連れられて、コート脇に2人は連れて行かれた。

「あんなこと言われちゃ勝つしかないやん。なあ、竹中？」

「ひ、ひなたが俺に……任せるって。頼りにしてるって……」

……ダメだ、無垢なる魔性イノセントチャームにやられてる。まあ試合が始まったらちゃんともどってくるだろうからほっとうこう。

「そんなわけでここからは俺たちが入るわ。ボールは俺が回すから智花はガンガン攻めてって。真帆も愛莉もパスするからちゃんと見とってな」

未だに心配そうに2人の方を見ているみんなに、気持ち切り替えてもらうためにこれからの作戦を簡単に説明する。俺が話しかけ

ると慌てて俺の方を向いて、話し終わるとみんな頷いてくれた。

「よし、じゃあD組をやっつけよかつ」

「「「おー!!」「」」」

最後にみんなで気合を入れて、後半戦を戦うためにコートに入って行った。

中断した時にこっちのボールだったので、俺たちのオフェンスからでセンター付近のサイドからのスタートになる。まずはさっき言った通り、俺がボールをもらい様子をみる。D組は俺と竹中の加入によって、どんなディフェンスにしてくるかが肝心だ。

「そうくるか……」

俺がゆったりとドリブルをしていると、D組は少し広めのゾーンディフェンスを敷いた。普通より広めなのは智花と竹中の外を警戒しているんだろう。要注意人物が2人に増えてしまい、個別に止めるのが難しいなら、フォローできる位置で来た方を確実に抑えようという魂胆だろう。なかなかどうして、冷静な判断だと思う。この騒ぎで幾分か冷静さを取り戻したみたいだ。

「まあ広がってるなら中を突くのがセオリーやよな」

今は俺がセンターにいて、智花が左サイド、竹中が右サイドにいる配置になっている。打ち合わせもなにもしていないけども、きつと合わせてくれるだろうと信じて動く。

そう決めると、ボールが手元にくるタイミングで息を吸う。そして、それまでゆったりとしていたドリブルを、いきなりグツと体を沈めトップスピードで左サイドに突っ込む。

いきなりのチェンジオブペースに意表を突かれたD組は、慌てて進行方向にいた1人がコースをふさぎ、もう1人が智花とのパスコースをふさぐような位置につく。俺はコースをふさがれたのでディフェンスの目の前まで行って急停止をかける。

俺は立ち止まると同時にボールを背中側に回し、ビハインドパスをだす。その相手は、俺の動きにディフェンスが気を取られたスキに切り込んでいた竹中だ。

するどいパスをだしたので、竹中がパスを取る時バシッと音がした。パスを受け取った竹中はそのままシュートを決め、2点差にする。

「お前、ビハインドのくせに勢い強すぎだろ。あやうくこぼすところだったぞ」

「あれくらい取ってもらわな困るって。いけるやろ？」

シュートが決まり、戻る時に竹中が話しかけてきた。口調こそは責めるような感じだったけども顔が笑っていたので、こっちもからかう感じで返す。

ドンドンこい、と笑いながら言って竹中がディフェンスにつく。

D組のオフェンスはパスを細かく繋げていく作戦にしたらしく、20秒を過ぎてもまだシュートを打ってこない。

「こっつ！」

30秒を意識したのか甘くなったパスを智花がスティールする。

「歩君っ」

智花が俺にボールを渡してくる。それを受け取り、次の攻撃を考

える。

思考するのも数瞬、行動に移す。

さっきと同じ布陣で攻め込むことにし、D組も同じゾーンディフェンスできたので今度も智花のいる左サイドに切り込む。さっきと同じ展開に、D組は竹中のマークを意識してもらう。当然俺の前にも1人つき、今度は少し間をあけて止まる。と、すかさず竹中の時とは対照的に緩やかなパスを出す。他に誰も取ることでできない高さ、だ。

「愛莉っ」

それを取るのは、もちろん愛莉だ。まだ怖さが残っているので、ゴール下とはいかないがきちんとポスト付近にいてくれる。愛莉は俺のパスを受け取らず、方向を変えて弾く。そこには、愛莉への山なりのパスに注意が向いたことでマークを引き剥がした智花がいた。

「よしっ！」

相変わらず綺麗なシュートフォームで放たれたシュートはリングにかすることもなくネットを揺らした。

「よく智花の動きを見てたんやな、よかったよ」

「えへへ、智花ちゃんならきてくれるかなって思ったんだ」

いいアシストをした愛莉を褒めると、花が咲いたような笑顔でそう話す。ホント、このチームワームにはかなわない。

C組 10－10 D組

これで追いついた。しかし時間が残り少なくなってきた、次がラストチャンスになりそうだ。

残り1分を切った状態でD組の攻撃でスタートする。D組は30秒をフルに使う作戦をとってくる。さっきと同じく細かくパスを回して、ジワジワと攻め込んでくる。愛莉も真帆も懸命にディフェンスして、ボールを奪うまではいかなくてもシュートは打たせていない。

「くそっ、無理か」

D組のヤツから悔しがる声が聞こえ、30秒の笛がなった。

時計を見ると残り20秒もない。すぐさま、ボールをもらいコー
トを駆ける。

「行かせないっ！」

D組の1人が立ちふさがる。それを急停止とターンでかわし、さ
らに突っ込む。竹中のいる右サイドに向かってドリブルを続ける。

あと15秒足らずをD組の方もゾーンディフェンスにこだわらず
全員で止めにかかってくる。3Pライン付近までくると俺にダブル
チームがついた。竹中と智花も執拗なマークにあっついて、振り切
ることは難しそうだ。

俺は2人へのパスを諦め、ゴールを見据えダブルチームの相手を
する。右へ左へとボールを持ち替え、いくつものフェイントをいれ
耐える。

まだもう少し、……………あとちよつと——————————
きたっ!!

俺に2人、智花に1人、竹中に1人、そして愛莉と真帆をどっちつかずでマークしていた最後の1人がしびれを切らして俺の方へこようとした。

そいつが来る前にレッグスルーで隙とはいえない隙を作り、ゴールを見つめジャンプする。ダブルチームの1人が安心したような表情を見せて、ブロックのために跳ぶ。

きっと残り時間に焦り、一か八かでシュートに行っただと思っただけに違いない。そのブロックは完璧にコースをふさぎ、シュートをしていたなら確実に止められていただろう。

そう、これはシュートの為に跳んだのではない。パスを出すためだ。

けど、俺はダブルチームの相手とパスを出すタイミングを計るために全神経を使っていたので、味方の位置なんて確認していなかった。それでも、俺はなんのためらいもなく『そこ』にパスをだす。

なんの合図をしていなくても、この状況、このタイミング、絶対そこにいると確信があった。この1週間朝夕ずっと練習してきたその位置に……………。

「真帆っ、決めろー!!」

「まかせろっ!!」

俺の呼びかけに力強い言葉が返ってくる。リングの真横、ボードも使えず、シュートをするには1番難しい位置にいた真帆に俺のパスが通る。

そのまま放たれたシュートは高い弧を描いてネットに突き刺さったのだった。

「」「」「ありがとうございますっ」「」「」

試合後の挨拶をして、ベンチに戻る。するとそこには治療が終わったのだろう、紗季とひなたがいた。

「やったわね、上出来よ」

「おー、あゆむー最後すごかった」

2人からお褒めの言葉をもらい笑って応えるも、最後の攻防で疲れ切っていたのでベンチにドカツと座り込んで天井を仰ぎ見る。

「あー、しんどかった」

すると、隣に誰かが座る気配がした。

「あゆむん、お疲れっ！ 最後すごかったよね、2人相手にずっとボール持ってたさ」

真帆が話しかけてきたのでそっちを向く。

「真帆もちゃんとあそこにいてくれてよかった。シュートも決めてくれたしな」

「合図なんてなくても絶対くるってわかったもん。シュートも外れるなんてありえないって。信頼には応えないと、ね」

真帆のセリフが無性にうれしく思い……………

「そっか、ありがとう」

そう言って、真帆の頭をやさしく撫でる。最初は驚いた顔をしていた真帆は、嬉しそうな顔に変わり、撫でられている感触を味わうように目を閉じる。

俺の方も、気付けばやっていたような感じだったので内心では、なにやっぺんだとツツコミをいれる。けども、真帆が気持ちよさそうなのでそのまましばらく撫でていることにした。

しばらくすると、6－Cのクラスのメンツが担任である篁先生の周りに集まってきた。バスケで優勝したので、総合優勝も獲ることができたお祝いにみんなにジュースを奢れと何人かが催促していた。それに篁先生が言い負かされる形となり、ジュースを奢ってもらうことになったので、篁先生は催促していたヤツラに引っぱられてジュースを買いに行った。……………長谷川さんの入った跳び箱を残したままで。

「どうするん？」

「どうするって言われてもね……………」

近くにいた紗季に聞いてみるも、困った顔をさせただけだった。結局、ここに残っているのも不自然だし、きっと脱出の手段はあるだろうということになり、俺たちも篁先生たちについていくことに

したのだった。

あとから戻って来てみると、もう跳び箱はなくなっていたのでちやんと脱出できたのだと思い、俺は帰ったのであった。

それから数日後、あの日に生気の抜けたような顔をした若い男性が、なにやら「なにも見てない。……俺はなにも見てない」とブツブツ言いながら歩いているのが目撃されて、幽霊じゃないかと噂になったりしたそうだ。

28. 球技大会本番（後編）（後書き）

歩が活躍しすぎですかね？

楽しんでもらえたならうれしいです。

仕事忙しいので更新は週1くらいになってしまおうと思いますので、
気長に待ってもらえると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119v/>

ロウきゅうぶ ～不可視の6人目～

2011年12月20日17時54分発行